国道 11 号大内白鳥バイパス改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

第３冊

田中遺跡

2017. 3

香 川 県 教 育 委 員 会
国土交通省四国地方整備局

374

165

165

374

376

序　文

本書には、国道11号大内白鳥バイパス改築工事に伴い発掘調査を実施した、香川県東かがわ市白鳥に所在する田中遺跡（たなかいせき）の報告を収録しています。

田中遺跡では、縄文時代晩期から中・近世にかけての遺構・遺物が出土しました。とくに調査地の西端の調査区において、弥生時代終末期から古墳時代初頭、古墳時代末から古代初頭の複数の竪穴建物が検出され、これまで集落の存在が明らかではなかった湊川下流域において、その地理的・歴史的位置付けを考える上で、基礎となる貴重な資料が得られたものと評価できます。

また、調査地東端部の調査区では、後世の遺構への混入資料ながら、本県で２例目となる琴柱形石製品２点が出土しました。古墳時代前期末から中期初頭頃の遺物と考えられ、周辺に当該期の古墳が築造されていたか、何らかの祭祀儀礼が執り行われていた可能性が考えられます。徳島県北東部から本地域においては、同種遺物がやや集中して出土しており、その類例が増えたこととともに、畿内地域との関係において、本地域が特別な位置付けを与えられていたことを示唆する遺物と評価することができるものと考えられます。

本報告書が、本県の歴史研究の資料として広く活用されるとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理・報告にいたるまでの間、国土交通省四国地方整備局並びに関係各機関・地元関係各位には、多大なご協力とご指導をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成29年3月28日

香川県埋蔵文化財センター
所長　増田　宏

例　言

1　本報告書は、一般国道11号大内白鳥バイパス改築工事に伴い発掘調査を実施した、香川県東かがわ市白鳥に所在する田中遺跡（たなかいせき）の報告を収録している。

2　発掘調査は香川県埋蔵文化財センターが実施した。

3　発掘調査期間と担当者は次のとおりである。
　期間　平成22年6月1日～10月30日
　担当　文化財専門員　蔵本晋司、佐藤竜馬

4　調査にあたっては次の方々、関係機関の協力を得た。また、石器・石製品の石材の同定に関して、徳島大学総合科学部　村田明広・青矢睦月両氏のご教示を得た。記して謝意を表したい。
　古瀬清秀、松田朝由、吉村和明、小栗明彦
　東京国立博物館、広島大学考古学研究室、徳島県立博物館、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館、高松市教育委員会、丸亀市教育委員会、東かがわ市教育委員会、国土交通省四国地方整備局香川河川国道事務所、地元自治会、地元水利組合　（順不同、敬称略）

5　報告書の作成は香川県埋蔵文化財センターが実施した。執筆・編集は蔵本晋司が担当した。

6　本報告書で用いる座標系は国土座標第Ⅳ系（世界測地系）で、方位の北は国土座標第Ⅳ系による。また、標高は東京湾平均海水面を基準とした。

7　遺構は次の略号により表示した。
SH　竪穴建物　　SB　掘立柱建物　　SA　柱穴列　　SP　柱穴・小穴　　SK　土坑　　SD　溝
SR　旧河道　　SX　性格不明遺構

8　遺構断面図の水平線上の数値は水平線の標高線（単位m）である。

9　遺構断面図中の注記の色調は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖32版』を参照した。

10　土器観察表の色調は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖32版』を参照した。また、残存率は遺物の図化部分に占める割合であり、完形品に対する割合ではない。

11　石器実測図中の外郭線周囲の線は潰れの範囲を示している。図の左側に展開した面をA面、右側の面をB面として記述する。剥片石器の場合はA面が背面、B面が腹面となる。石材は表記がない限りサヌカイトである。

12　遺物の時期や分類は次の文献を参照した。

弥生土器：信里芳紀 2002「讃岐地域における弥生時代前期から中期前半の様相－集落の検討を中心にして－」『第 16 回古代学協会四国支部研究大会発表要旨集　弥生時代前期末～中期初頭の動態』，古代学協会四国支部

信里芳紀 2005「讃岐地方における弥生中期から後期初頭の土器編年－凹線文期を中心にして－」『香川県埋蔵文化財センター研究紀要Ⅰ』，香川県埋蔵文化財センター

信里芳紀 2011「弥生中期後半から古墳初頭の土器編年」『独立行政法人国立病院機構善通寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第２冊　旧練兵場遺跡Ⅱ』，香川県教育委員会・独立行政法人国立病院機構善通寺病院

大久保徹也 1990「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ　下川津遺跡』，香川県教育委員会・㈶香川県埋蔵文化財調査センター・本州四国連絡橋公団

須恵器：　田辺昭三 1981『須恵器大成』，角川書店

大阪府立近つ飛鳥博物館編 2006『年代のものさし　－大阪府立近つ飛鳥博物館図録 40－』

佐藤竜馬 1993「香川県十瓶山窯跡群における須恵器編年」『関西大学考古学研究室開設 40 周年記念　考古学論叢』，関西大学文学部考古学研究室

中世土器：佐藤竜馬 2000「高松平野と周辺地域における中世土器の編年」『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第４冊　空港跡地遺跡Ⅳ』，香川県教育委員会・㈶香川県埋蔵文化財調査センター

森田稔 1986「東播系中世須恵器生産の成立と展開　－神出古窯址群を中心に－」『神戸市立博物館研究紀要』第３号，神戸市立博物館

尾上実 1983「南河内の瓦器椀」『藤澤一夫先生古稀記念古文化論叢』，藤澤一夫先生古稀記念論集刊行会

貿易陶磁：太宰府市教育委員会編 2000『大宰府条坊跡ⅩⅤ　－陶磁器分類編－』

近世土器：佐藤竜馬 2003「近世在地土器の検討」『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第４冊　高松城跡（西の丸町地区）Ⅱ』，香川県教育委員会・㈶香川県埋蔵文化財調査センター

本文目次

第１章　調査にいたる経緯と経過

第１節　調査にいたる経緯……1
第２節　発掘調査と整理作業の経過……2

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　地理的環境……3
第２節　歴史的環境……3

第３章　調査の成果

第１節　調査の方法……9
第２節　調査の目的……9
第３節　基本層序……9
第４節　発掘調査の成果……20

第４章　自然科学的分析の成果

第１節　田中遺跡の自然科学分析……61
第２節　樹種同定……78
第３節　動物遺存体の同定……79

第５章　まとめ

第１節　遺構の変遷……80
第２節　香川県内出土の石棒について……82
第３節　琴柱形石製品の基礎的研究……87

挿図目次

第1図　遺跡位置図1 …… 1
第2図　遺跡位置図2 …… 5
第3図　遺跡周辺地形分類と遺跡分布図 …… 7
第4図　遺跡周辺微地形分類図 …… 8
第5図　遺構配置 …… 10
第6図　2区調査区北壁土層断面図 …… 11
第7図　3区調査区北壁土層断面図 …… 12
第8図　3区調査区東・西壁土層断面図 …… 13
第9図　4区調査区北壁土層断面図 …… 14
第10図　4区調査区北・東壁土層断面図 …… 15
第11図　6区調査区北壁土層断面図1 …… 16
第12図　6区調査区北壁土層断面図2 …… 17
第13図　6区調査区東・西壁土層断面図 …… 18
第14図　6区包含層Ⅳ遺物出土位置図 …… 20
第15図　6区包含層Ⅳ出土遺物実測図 …… 21
第16図　SH01平・断面・出土遺物実測図 …… 22
第17図　SH03平・断面・出土遺物実測図 …… 23
第18図　SH06平・断面・遺物出土位置図 …… 24
第19図　SH06出土遺物実測図 …… 25
第20図　SB01平・断面図 …… 26
第21図　SK10平・断面図 …… 26
第22図　SR01出土遺物実測図 …… 28
第23図　SH02平・断面・出土遺物実測図 …… 29
第24図　SH04平・断面・出土遺物実測図 …… 30
第25図　SH05平・断面・出土遺物実測図 …… 30
第26図　SB02平・断面・出土遺物実測図 …… 31
第27図　SA03平・断面図 …… 32
第28図　SD03平・断面図 …… 32
第29図　SD04平・断面図 …… 32
第30図　SD05平・断面図 …… 33
第31図　SD06平・断面図 …… 33
第32図　SA01平・断面図 …… 34
第33図　SA02平・断面図 …… 34
第34図　SK07平・断面・遺物出土位置図 …… 35
第35図　SK07出土遺物実測図 …… 36
第36図　SK11（左）・SK12（右）平・断面図 …… 37
第37図　SD02平・断面・遺物出土位置図 …… 38
第38図　SD02右積護岸（北）平・断面図 …… 39
第39図　SD02右積護岸（南）平・断面図 …… 40
第40図　SD02出土遺物実測図1 …… 41
第41図　SD02出土遺物実測図2 …… 42
第42図　SD07平・断面図 …… 43
第43図　SD08・SD09・SD10平・断面・遺物出土位置図 44
第44図　SD08・SD09・SD10出土遺物実測図 …… 45
第45図　SK01（左）・SK02（右）平・断面図 …… 46
第46図　SK03平・断面・出土遺物実測図 …… 47
第47図　SK04平・断面・出土遺物実測図 …… 48
第48図　SK06（左）・SK08（右）平・断面・
出土遺物実測図 …… 49
第49図　SK09平・断面・出土遺物実測図 …… 49
第50図　SD01・SX01平・断面・出土遺物実測図1 …… 50
第51図　SX01出土遺物実測図2 …… 51
第52図　柱穴出土遺物実測図 …… 52
第53図　3・4区包含層Ⅰ出土遺物実測図 …… 53
第54図　3・4区包含層Ⅱ出土遺物実測図 …… 55
第55図　6区包含層Ⅲ出土遺物実測図1 …… 56
第56図　6区包含層Ⅲ出土遺物実測図2 …… 57
第57図　6区包含層Ⅲ遺物出土位置・出土遺物実測図3 58
第58図　2～4・6区包含層等出土遺物実測図 …… 59
第59図　放射性炭素年代測定結果 …… 62
第60図　蛍光X線分析結果 …… 71
第61図　遺構変遷図 …… 81
第62図　石棒出土遺跡分布 …… 83
第63図　琴柱形石製品実測図 …… 87
第64図　琴柱形石製品分布図 …… 88
第65図　松林山型の分類と変遷 …… 92
第66図　恵解山型の分類と変遷 …… 93
第67図　丸山・宮山型の分類と変遷 …… 95

表目次

第1表　放射性炭素年代測定結果 …… 62
第2表　珪藻分析結果 …… 64
第3表　花粉分析結果 …… 65
第4表　種実分析結果 …… 67
第5表　主な種実遺体の計測値 …… 68
第6表　樹種同定結果 …… 69
第7表　蛍光X線分析結果 …… 70
第8表　動物遺存体一覧 …… 79
第9表　香川県内出土石棒一覧 …… 82
第10表　永井遺跡における結晶片岩製石器の出土組成 … 84
第11表　縄文時代晩期～弥生時代前期の結晶
片岩製石器の占有率と器種組成 …… 85
第12表　琴柱形石製品出土遺跡一覧（1） …… 89
第13表　琴柱形石製品出土遺跡一覧（2） …… 90
第14表　琴柱形石製品出土遺跡一覧（3） …… 91
第15表　出土土器観察表（1） …… 100
第16表　出土土器観察表（2） …… 101
第17表　出土土器観察表（3） …… 102
第18表　出土土器観察表（4） …… 103
第19表　出土土器観察表（5） …… 104
第20表　出土土器観察表（6） …… 105
第21表　出土土器観察表（7） …… 106
第22表　出土土器観察表（8） …… 107
第23表　出土土器観察表（9） …… 108
第24表　出土土器観察表（10） …… 109
第25表　出土土器観察表（11） …… 110
第26表　出土石器観察表 …… 111
第27表　出土木製品観察表 …… 111
第28表　出土金属器観察表 …… 111
第29表　出土玉類・石製品観察表 …… 111
第30表　出土瓦観察表 …… 112
第31表　出土土錘観察表 …… 112

写真目次

図版1　珪藻化石顕微鏡写真 …… 73
図版2　花粉化石顕微鏡写真 …… 74
図版3　大型植物遺体 …… 75
図版4　木材顕微鏡写真（1） …… 76
図版5　木材顕微鏡写真（2） …… 77
図版6　樹種同定試料の光学顕微鏡写真 …… 79
図版7　遺構写真 …… 114
1区全景（東より）
1区 SH01 完掘状況全景（東より）
1区 SH01 遺物（18・19）出土状況（西より）
図版8　遺構写真 …… 115
1区 SH03 全景（東より）
1区 SH03 検出状況（北より）
1区 SH03 土層断面（西より）
図版9　遺構写真 …… 116
1区 SH03 遺物（31）出土状況（東より）
1区 SH02 全景（北より）
1区 SH04 遺物（81）出土状況（東より）
図版10　遺構写真 …… 117
1区 SH04 竈完掘状況（北より）
1区 SH04 竈断面（南東より）
1区 SH06 土層断面（東より）
図版11　遺構写真 …… 118
1区 SK07 遺物出土状況（北より）
1区 SK07 遺物出土状況（北より）
1区 SK01 土層断面（東より）
図版12　遺構写真 …… 119
1区 SK04 土層断面（西より）
1区 SK06 埋甕出土状況（南より）
1区 SX01 全景（西より）
図版13　遺構写真 …… 120
1区 SX01 全景（北より）
1区 SX01 礫検出状況（北より）
1区 SX01 土層断面（東より）
図版14　遺構写真 …… 121
2区 SH06 全景（北より）
2区 SH06 遺物出土状況（南より）
2区 SH06 炭化物出土状況（北より）
図版15　遺構写真 …… 122
2区 SH06 土層断面（西より）
2区 SD02 全景（南より）
2区 SD02 護岸石積（北）検出状況（西より）
図版16　遺構写真 …… 123
2区 SD02 護岸石積（北）検出状況（西より）
2区 SD02 護岸石積（北）検出状況（南西より）
2区 SD02 護岸石積（北）検出状況（東より）
図版17　遺構写真 …… 124
2区 SD02 護岸石積（北）検出状況（南西より）
2区 SD02 護岸石積（南）検出状況（北西より）
2区 SD02 護岸石積（南）検出状況（西より）
図版18　遺構写真 …… 125
3区第1面全景（西より）
3区 SB02 全景（西より）
3区 SB02 全景（北より）
図版19　遺構写真 …… 126
3区 SD05 土層断面（北より）
3区調査区北壁土層断面（南西より）
3区調査区東壁土層断面（南西より）
図版20　遺構写真 …… 127
4区全景（西より）
4区 SD06 全景（南より）
4区 SD06 土層断面（南より）
図版21　遺構写真 …… 128
4区 SD07 全景（北より）
4区 SK11 完掘状況（南より）
4区調査区北壁土層断面（南西より）
図版22　遺構写真 …… 129
5区 SR01 全景（北東より）
5区 SR01 土層断面（南東より）
6区西半部全景（東より）
図版23　遺構写真 …… 130
6区東端部全景（北より）
6区 SR01 全景（西より）
6区 SR01 木株出土状況（東より）
図版24　遺構写真 …… 131
6区 SR01 土層断面（南より）
6区 SD08 遺物（165）出土状況（南より）
6区 SD08 遺物（160）出土状況（北東より）
図版25　遺構写真 …… 132
6区 SD08 動物遺存体出土状況（北より）
6区 SD10 完掘状況（北より）
6区 SD10 遺物（176）出土状況（北より）
図版26　遺構写真 …… 133
6区 SD10 土層断面（南より）
6区 SA02 全景（西より）
6区 SA03 検出状況（南より）
図版27　遺構写真 …… 134
6区調査区北壁東半土層断面（南より）
6区包含層Ⅱ遺物（351・352）出土状況（東より）
遺跡より白鳥廃寺方向遠望
図版28　遺物写真 …… 135
16・17・18・19・21・34・40・42・46・73・75・
78・234・235
図版29　遺物写真 …… 136
50・54・57・58・118・121・125・188・218・
286・348・362・366
図版30　遺物写真 …… 137
1・2・153・332・336・343・360
図版31　遺物写真 …… 138
152・154・155・230・144・146・148・149・
150・178・204・205・227・279・327・232
図版32　遺物写真 …… 139
6・7・8・9・70・71・164・239・282・
329・330・331・344・345・346
図版33　遺物写真 …… 140
10・156・191・313・314
図版34　遺物写真 …… 141
86・102・158・195・240・分析試料

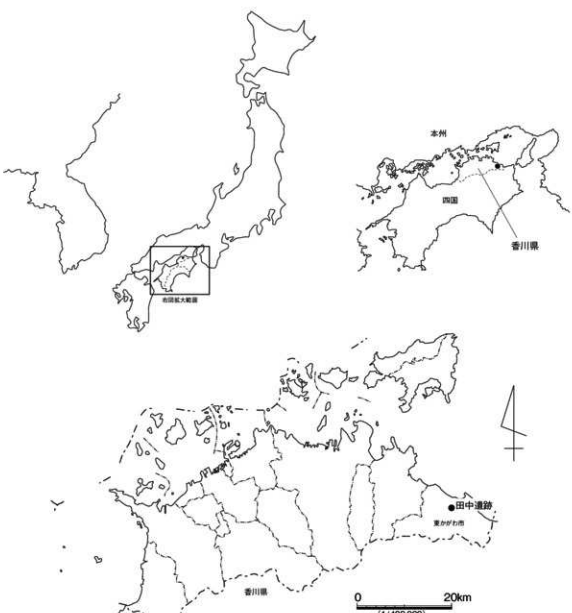
付図目次

付図1　田中遺跡平面図

第１章　調査にいたる経緯と経過

第１節　調査にいたる経緯

一般国道 11 号大内白鳥バイパス改築工事に伴い、香川県教育委員会では平成 22 年度に白鳥西地区において試掘調査を実施した。その結果、調査対象地のうち一部のトレンチで、弥生時代と古墳時代の土坑や溝が検出され、土器類の遺物が出土したことから、調査対象地のうち西半部を田中遺跡として文化財保護法にもとづく保護措置が必要と判断した。



第１図　遺跡位置図１

第２節　発掘調査と整理作業の経過

香川県埋蔵文化財センターでは、用地買収の終了した田中遺跡2,655㎡について平成22年６月１日～10月30日に発掘調査を実施した。調査は直営方式である。

なお９月19日には、琴柱形石製品が出土した６区を中心に地元説明会を実施し、市内外より多数の参加者があり、考古学的な関心の高さが伺われた。

整理作業は、平成27年11月１日から翌28年１月31日に香川県埋蔵文化財センターにおいて実施した。遺物の接合・図化・写真撮影と遺構図の浄書、遺構写真の整理等を行い、本書にまとめた。出土遺物量は、28㎏入りコンテナ72箱である。遺構については、本遺跡を評価する上で必要と認めるすべての遺構について報告した。また、遺物については、遺構出土遺物のなかでも遺構の時期を直接反映するものを最優先とし、混入遺物や遺構外出土遺物についてはとくに必要と認めるもののみ掲載した。

発掘調査及び整理作業の体制は下表のとおりである。

平成22年度発掘調査体制一覧表

香川県教育委員会事務局　生涯学習・文化財課			香川県埋蔵文化財センター		
総括	課長	石垣　嘉一	総括	所長	大山　眞宏
	課長補佐（総括）	亀山　隆		次長	濱谷　右
総務・生涯学習推進グループ			総務課	総務課長	濱谷　右（兼務）
	副主幹	香西　としみ		副主幹	林　文夫
	主事	丸山　千晶		主任	福井　良子
文化財グループ				主任	古市　和子
	主幹	藤好　史郎		主任	広瀬　健一
	主任文化財専門員	森下　英治	調査課	調査課長	西岡　達哉
	文化財専門員	小野　秀幸		文化財専門員	蔵本　晋司
				文化財専門員	佐藤　竜馬
				嘱託（土木）	砂川　哲夫
				嘱託（調査技術員）	白木　亨

平成27年度整理体制一覧表

香川県教育委員会事務局　生涯学習・文化財課			香川県埋蔵文化財センター		
総括	課長	増田　宏	総括	所長	真鍋　昌宏
	副課長	小柳　和代		次長	前田　和也
総務・生涯学習推進グループ			総務課	課長	前田　和也（兼務）
	副主幹	松下　由美子		主任	寺岡　仁美
	主事	和木　麻佳		主任	高木　秀哉
文化財グループ				主任	中川　美江
	課長補佐	片桐　孝浩		主任	丸尾　麻知子
	主任文化財専門員	山下　平重		主任	岩崎　昌平
	文化財専門員	乗松　真也	調査課	課長	森　格也
				主任文化財専門員	蔵本　晋司
				嘱託	市川　孝子
				嘱託	猪木原　美恵子
				嘱託	甲斐　美智子
				嘱託	葛西　薫
				嘱託	香西　栄理
				嘱託	高橋　千恵
				嘱託	森　后代
				嘱託	山地　祇理子

第2章　遺跡の立地と環境

第1節　地理的環境

遺跡周辺の地形と地質

田中遺跡は、東かがわ市白鳥500番地ほかに所在する。

遺跡が所在する東かがわ市大内・白鳥地域は、北は瀬戸内海に面し、東～南～西は与治山や虎丸山、北山等の標高約200～400mの山塊に囲繞された、面積約9.7㎢の閉鎖的な臨海性の小平野を中心とする。平野部東半は中川と湊川が、西半は与田川と番屋川がそれぞれ北流し、流域に扇状地性の谷底平野や氾濫平野を形成する。河口域には、現海岸線に平行して数列の砂州・砂堆が形成され、その背後には海岸平野・三角州が広がる。現在三角州は、その多くが盛土され、大内・白鳥の市街地へと変貌している。

平野部に接する山塊は、後期白亜紀の珪長質深成岩類（領家帯）によって形成され、その奥部の讃岐山脈には、後期白亜紀の海成礫岩や泥岩、砂岩等が分布する和泉層群が東西走する。与田・番屋川は領家帯に水源があり、流域は花崗岩質の堆積層を形成し、湊川の水源は和泉層群に達し、河床には砂岩等の堆積岩が花崗岩類に混じって多く認められる。弥生時代以降、和泉層群の砂岩の転石は、砥石として多く利用されたようだ。

本地域は、上述したように自然地形により画された閉鎖的な空間を形成するが、東は中川上流の帰来山と翼山の間の小峠を介して引田地域と、南は湊川上流の鵜の田尾峠（標高約370m）を介して徳島県吉野川下流域と、西は番屋川上流の北山南麓の小峠を介して津田湾沿岸地域や、田面峠（標高約50m）を介して長尾盆地と、陸路によりそれぞれ連絡することが可能で、さらに各河川を利用した内陸部との舟運や、湊川あるいは与田川河口部に想定される『兵庫北関入船納帳』（林屋編1981）に記された「三本松」など臨海部の港津を介して、海上交通により遠隔地ともアクセス可能な、交通の結節点としての恵まれた条件が付与された地域と評価できる。

さて、遺跡は湊川右岸の河口に近い氾濫平野上に立地する。遺跡の西には、高さ1m内外の崖面が、湊川に沿うように南北に走行しているのが観察される。試掘調査の結果によれば、崖面下の調査地点では、現耕作土下で湊川の河成堆積層である砂礫層が検出され、遺構・遺物は出土していない（香川県教育委員会2010）ことから、氾濫原面と考えられる。先の崖面は、おそらくは完新世段丘に伴うものであろう。遺跡は、段丘面上に展開する。

段丘面上も平坦ではなく、比高差0.1～0.3mの微細な起伏が帯状に認められ、埋没した旧河道と考えられる。それらの分布は第4図のように復元され、調査により検出された旧河道との対応で、遺跡には旧河道を中央に挟んで東西2箇所の見かけ上の微高地の存在が観察される。西側の微高地上では、調査の結果、弥生時代終末期と古墳時代後期を中心とする集落が確認された。

第2節　歴史的環境

縄文から古墳時代の動向

上述した陸路や海路の利用は、原間遺跡の自然河川より、結晶片岩粒の混入した縄文時代中期と晩期前半の土器が出土（香川県埋蔵文化財センター2005）し、本遺跡からは結晶片岩製の石棒が出土して

おり、遅くとも縄文時代に遡る可能性があることが考古資料から実証される。

さて、本地域の遺跡は、第2・3図に示したように、現状では谷底平野や氾濫平野、扇状地上に集落関係の遺跡が、丘陵上に古墳や墳墓等の遺跡がそれぞれ分布する。推定南海道も、海岸平野や三角州が内陸部にまで入り込む番屋川流域の松崎地区周辺を除けば、概ね氾濫平野上を中心に、本地域を横断すると考えられている（金田1988）。今後の詳細な分布調査や試掘調査を待つ必要があろうが、海岸平野や三角州地域の開発は、中世後半期以降に遡れる可能性が高いと考えられる。

こうした氾濫平野の本格的な開発行為は、おそらく弥生時代に遡る。本地域での遺跡分布は、弥生時代中期中葉を除けば、後期中葉までは散漫であることが指摘されている。後期後半から古墳時代前期初頭にかけて、鍛冶関連遺物を伴う竪穴建物を含む竪穴建物70棟が検出された原間遺跡をはじめ、地域内で遺構や遺物が出土した遺跡数は、中期後葉と比較して倍増する（信里2004）。飛躍的に地域内の開発が進展したことは間違いない。

そうした動向と併行して、大型建物への金属器や玉類等の非自給物資の集中や、水銀朱を使用した葬送儀礼が行われた樋端墳丘墓等、地域内での階層差が明確化する。中期中葉の池の奥遺跡における磨製石斧類の集中保有は、集落間での分業体制の成立とともに、上記した階層化社会を準備したとも考えられる。

仲戸遺跡、仲戸東遺跡で実施した花粉分析の成果（香川県埋蔵文化財センター2016）からは、縄文時代晩期から弥生時代終末期の間においてアカマツ林の相対的拡大が示され、その傾向は古代へと継続することが示された。これは遺跡周辺の丘陵部に自生していた照葉樹林等が林産資源の利用拡大により伐採され、二次林であるアカマツ林へと転換したこと、つまりは周辺の植生に大きなダメージを与えるような大規模かつ恒常的な開発行為がなされたことが想定され、上記した考古学的な状況を補完する。

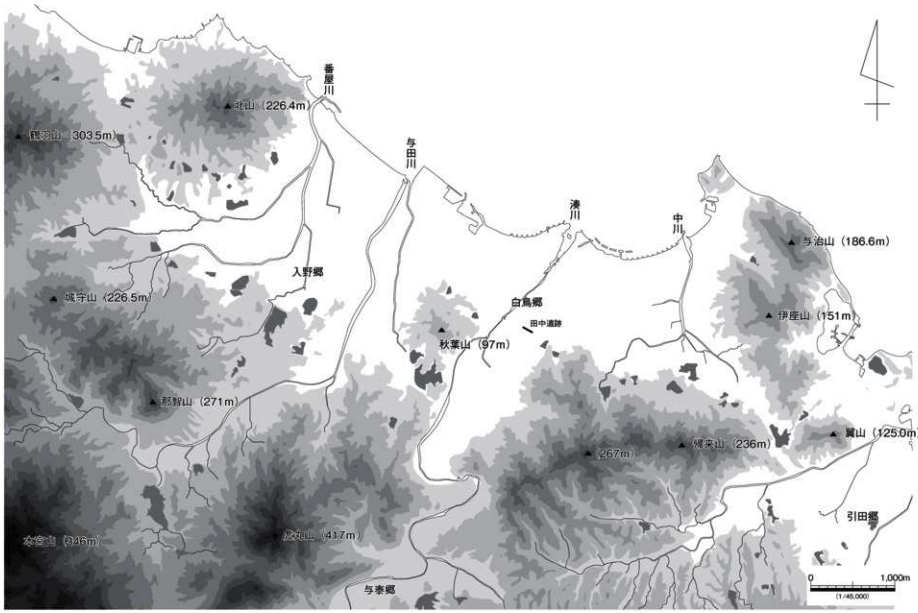
こうした諸開発行為の延長上に、全長約38mの前方後円墳である大日山古墳を位置付けることができよう。中期には韓半島との関係が想定される原間6号墳、後期には多彩な形象埴輪が出土した仲戸東遺跡等、時期により多様な様相を示しながら古墳が築造され、そこには吉備や畿内といった他地域との関係も垣間見ることができる。

古代の大内郡

律令期には、大内郡が置かれ、管内には引田・白鳥・入野・与泰の四郷があった。遺跡周辺は白鳥郷に含まれる。大内郡はもと小郡であったが、『続日本後紀』承和10（843）年5月8日条に「又讃岐国大内郡小郡。只有二領帳一。領則レ領調入レ京。帳猶留レ国驚レ務。非常移レ病。无二人従一レ公。加郷戸田数。既堪二下郡一。改爲レ下。加二領一員一焉。」（黒板1971）とあり、郷戸田数の増加などを理由に下郡に改め、領一員を加えている。

なお、天平19年（747）2月11日の法隆寺伽藍縁起并流記資財帳（正倉院文書）の寺領荘園について記した部分に、「大内郡一処」とあり、郡内に法隆寺領の荘園があったとされるが、具体的な場所やその後の変遷については明らかではない。

白鳥に所在する白鳥廃寺は白鳳期創建の可能性が説かれ、過去の調査により塔や金堂とみられる基壇や心礎石が、近年の調査では僧坊とみられる掘立柱建物がそれぞれ検出され、一町四方の寺域に南滋賀廃寺式の伽藍配置が想定されている。また秋葉山南麓には、平安時代に高松廃寺が創建されている。小規模な寺院であったようだが、付属する瓦窯2基が調査されている。古代においては、秋葉山周辺が本



第２図　遺跡位置図２（国土地理院の電子地図（数値地図 2500）を 55.5% に縮小し一部改変して掲載）

地域の宗教センターとして機能していたと考えられる。

一方式内社は、水主の水主神社があり、承和三年（836）に従五位下に除された（続日本後紀）のを史料上の初見として、天慶三年（940）には藤原純友の乱平定祈願の功により正五位下を授けられている（長寛勘文）。また、平安末期に書写されたとされる大般若経を収める経函が至徳三年（1385）に作られ、その裏書に天永元年（1131）や長承二年（1133）等の国司や目代の神拝とともに、社領の寄進がなされたことが記される。郡内唯一の式内社であり、讃岐国内でも有力社として評価されている（野中1982）。

これら宗教施設は、自然地形により集落が展開する平野部とはやや隔絶された場所に造営され、例えば白鳥廃寺が古代南海道の湊川渡河点至近地に位置しているように、水陸交通路の結節点に位置し、人・モノ・情報のネットワークにアクセス可能な場所が巧みに選地されているように思われる。当時の宗教施設が有する機能の一端を示すものであろう。

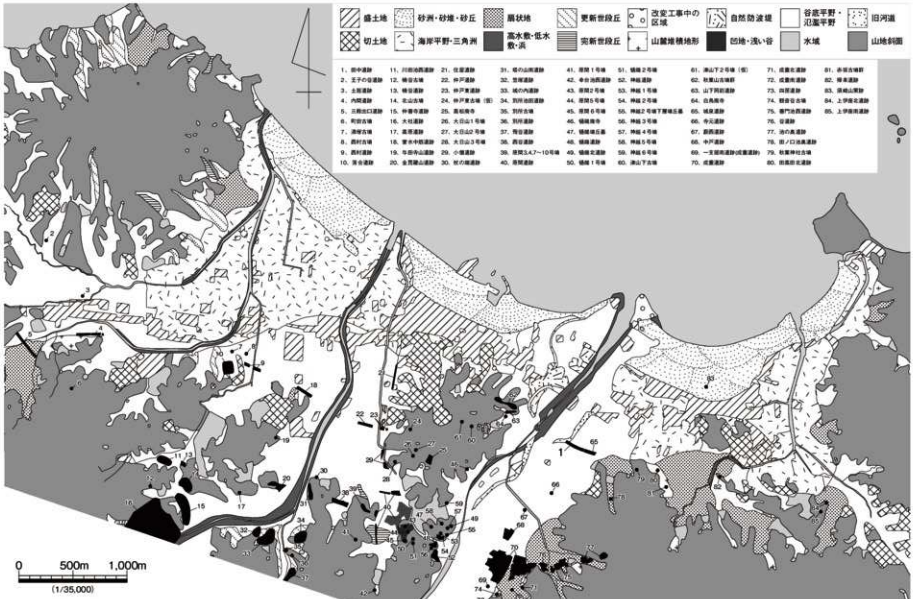
中世の誉水中筋遺跡

鎌倉時代には大内郡は一円所領化され、皇室の御願寺領として京都浄金剛院領大内荘が成立し、天皇家に伝領された。与田郷の地頭に小早川氏がみえ、小早川本仏譲状案（小早川家文書）によれば、小早川氏が有した所職は地頭職以外に、公文・案主・田所等の諸職に及ぶ。嘉応二年（1170）に讃岐国は建春門院の院分国となり、国司としてその弟平親宗が任じられると、讃岐国は平家とのつながりを深める。その際国衙領であった大内郡は、平家の所領に編入され、鎌倉時代に平家没官領として、皇室所領となったことが考えられる。

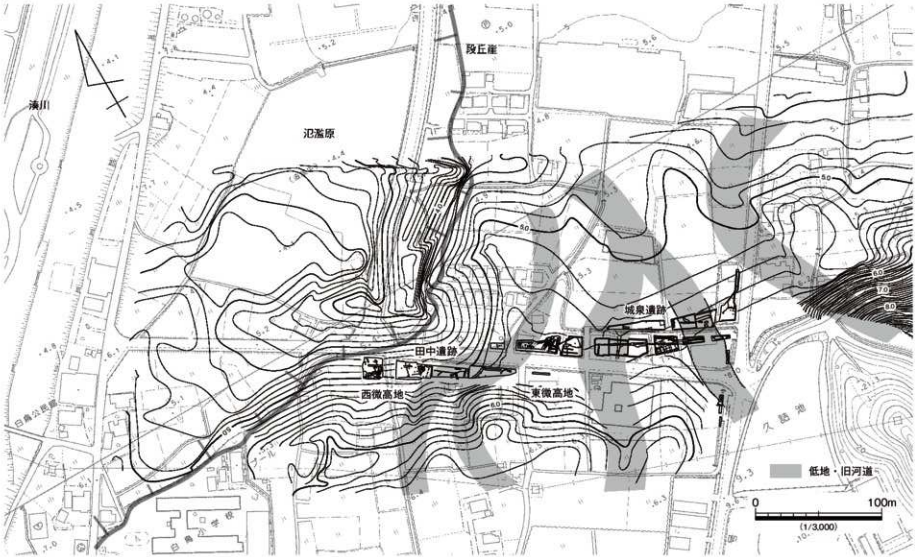
鎌倉・室町時代の遺跡は、王子の谷、三殿出口、内間、西村、誉水中筋、仲戸、原間、成重、田中、城泉の各遺跡で確認されている。誉水中筋遺跡では、和鏡や輸入磁器を副葬した屋敷墓が検出され、荘官クラスの有力層の屋敷地と考えられる。

引用・参考文献

香川県教育委員会 2010『埋蔵文化財試掘調査報告ⅩⅩⅢ　平成21年度　香川県内遺跡発掘調査』，香川県教育委員会
香川県埋蔵文化財センター 2005『県道大内白鳥インター線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　原間遺跡』，香川県教育委員会・香川県埋蔵文化財センター
香川県埋蔵文化財センター 2016『国道11号大内白鳥バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1冊　仲戸遺跡・仲戸東遺跡』，香川県教育委員会・国土交通省四国地方整備局
金田章裕 1988『讃岐の条里遺跡』『香川県史』第一巻通史編，香川県
黒板勝美編著 1971『新訂増補国史大系〔普及版〕　続日本後紀』，吉川弘文館
高松市歴史資料館 1996『讃岐の古瓦展』
野中寛文 1982「大水主社領の範囲と構造」『香川の歴史』2号，香川県県史編さん室
信里芳紀 2004「東讃地域の弥生集落の動態」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第47冊　成重遺跡Ⅰ』，香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団
萩野憲司 2004「讃岐国水主神社所蔵『外陣大般若経』と『北野社一切経』について」『佛教大学総合研究所紀要』別冊2，佛教大学総合研究所
林屋辰三郎編 1981『兵庫北関入船納帳』，中央公論美術出版



第３図　遺跡周辺地形分類と遺跡分布図（国土地理院の電子地図（数値地図 2500（土地条件））を 71.4%に縮小し、遺跡位置を追記して掲載）



第４図　遺跡周辺微地形分類図（東かがわ市都市計画図 11・18 を 83.3%に縮小し、一部を加工して掲載）

第３章　調査の成果

第１節　調査の方法

調査対象地は、南北幅約 28 m、東西延長約 154 mと東西に細長い。また調査区中央を、市道城泉線が東西に横断し、市道を拡幅するような形で市道の南及び北側に調査地が設定された。また調査地内を用水路や農道等が南北に走行し、調査区は現状での地割を基準に、第５図に示したように西より１～６区の６調査区に区分し、調査を実施した。調査前の地目は、宅地や商業用地、耕作地である。

調査は、直営方式により実施し、基本的に遺構検出面までは重機により掘削し、それ以下は人力にて掘り下げをおこなった。また、測量に要する基準杭は、業者に委託して設置した。各調査区は 45～350㎡と狭小なため、グリットは設定せず、包含層等の遺物は基本的にトータルステーションで位置を記録して取り上げ、とくに必要と認めたものについては、出土状況の写真を撮影した。

遺構名は、調査時には各調査区単位に付したが、本書を作成するにあたり、すべて新たな番号を付して統一した。なお、調査区名は調査時のものをそのまま踏襲する。

調査は、１・２・５・６区を佐藤が、その他を蔵本が主に担当し、本書作成にあたり、それぞれの調査内容について見解を統一して記載した。

第２節　調査の目的

既述したように、調査対象地が湊川右岸の完新世段丘上に位置し、中世以降には安定した微高地が展開することが予想された。また、試掘調査の成果から、２区を中心に弥生時代の、６区を中心に弥生時代と中世の集落が、それぞれ存在する可能性が想定された。こうした点を踏まえて、調査では段丘上面の地形環境の変遷や、それに対する人為的な対応行為の結果としての遺構の変遷について、それまで発掘調査によるこうした取り組みがほとんどなされてこなかった湊川下流域での調査資料を得ることを目的として、対象地内の全面調査を実施した。また、上述した目的に沿って、理化学的な分析成果を考古学的な所見に援用することを意図して、花粉分析試料や流路内の自然木についても積極的に試料採取を実施した。

さらに、遺跡周辺での踏査により、周知の遺跡の現状確認のほか、石造物や遺物の散布状況についての調査も適宜実施した。

第３節　基本層序

１区は、調査前は宅地として利用されていた。宅地造成土や現代耕作土下で、弥生時代以降の遺構面を確認した。遺構面の標高は、4.8 m前後である。

２区は、調査前は事業所用地として利用されており、現地表面下には厚い造成土が堆積し、その下には現代の耕作土・床土層の水平堆積が確認された。現代の耕土層下には、６層に細分される近世以降と考えられる耕土層（第６図６～11層、第１面包含層）の水平堆積が確認され、その下面で遺構を検出

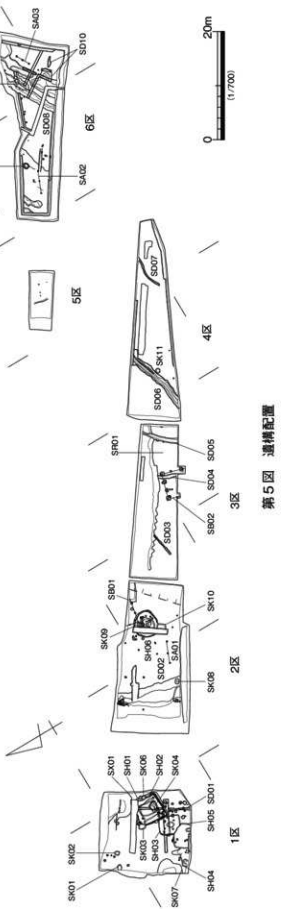
した。これを第１遺構面とする。検出面の標高は、4.3 ～ 4.6 mを測る。検出された遺構は、柱穴列SA01や土坑SK08・SK09、溝SD02等がある。

第１面のベースとなる褐色系シルト層（同図第19 ～ 22層）からは弥生時代の遺物が出土し、本層下面で第２遺構面を確認した。遺構面の標高は、4.3 ～ 4.55 mを測る。本遺構面では、竪穴建物SH06や掘立柱建物SB01、調査区東端で旧河道SR01を検出した。

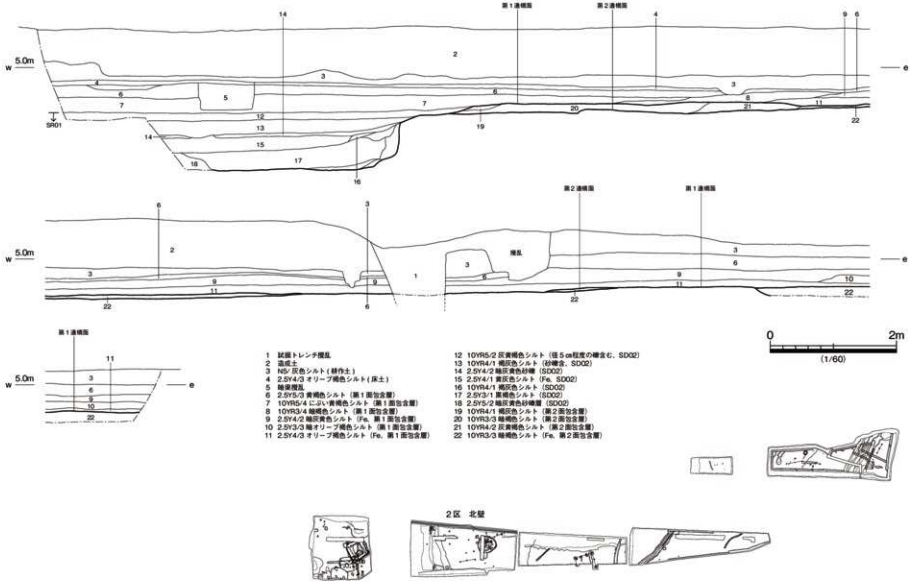
３・４区は、調査前は耕地として利用されており、現耕作土・床土層下で、層厚10cm程度の薄い包含層（第７・８図５層、第９・10図３層、包含層Ⅰ）の水平堆積が確認された。包含層Ⅰは、ほぼ均質に水平に堆積していることから、耕土ないしは整地層の可能性が考えられたため、掘り下げを中止し、包含層Ⅰ上・下面で遺構の確認をおこなった。その結果、包含層下面において、土坑SK11と溝SD07を検出し、第１遺構面として調査を実施した。包含層Ⅰからは、第53図に示す遺物が出土している、下限の資料として乗岡編年中世４期に下る備前焼擂鉢**267**があるが、当該期の資料は僅少で混入資料の可能性があり、その他土師質土器や輸入磁器より、13世紀前半代の堆積層と考えられ、上掲遺構の下限もこの年代を想定する。

包含層Ⅰ下面には、２層に細分される黄色系シルト～粘土（第７・８図８・９層、第９・10図４・５層、包含層Ⅱ）の水平堆積が確認され、第54図に示す遺物が出土した。本層も、堆積状況から耕土ないしは整地層の可能性が考えられ、下面において遺構の確認作業を行い、掘立柱建物SB02や土坑SK11、複数の溝SD03 ～ SD07を検出し、本遺構面を第２遺構面として調査をおこなった。遺構面の標高は、4.8 ～ 4.9 m前後であった。包含層出土資料には時期幅が認められるものの、概ね十瓶山周辺窯編年Ⅲ－３～Ⅲ－４期を下限とする遺構面と考えられる。

第２遺構面は、水成堆積層の灰色系等の砂礫～

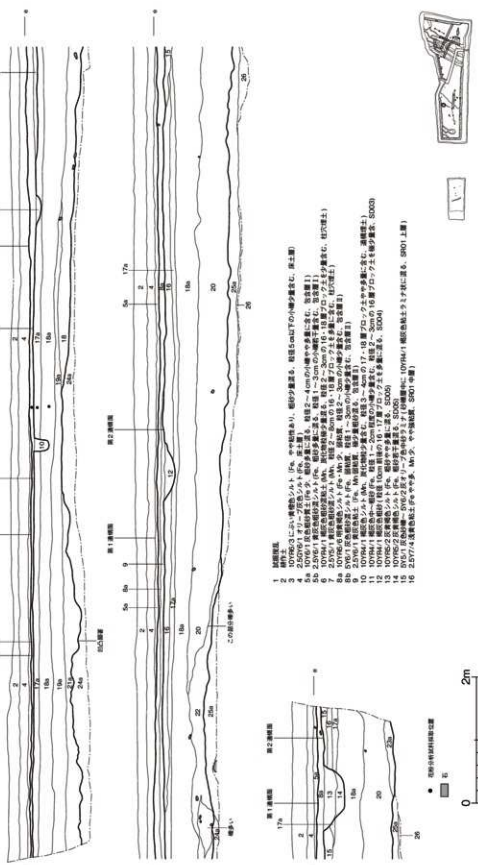


第５図　遺構配置



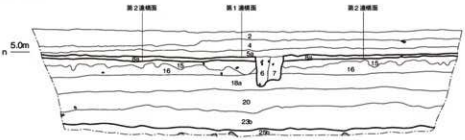
1　試掘トレンチ埋土
2　造成土
3　N5/ 灰色シルト（耕作土）
4　2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト（床土）
5　暗褐埋土
6　2.5Y5/3 黄褐色シルト（第1面包含層）
7　10YR5/4 にぶい黄褐色シルト（第1面包含層）
8　10YR3/4 暗褐色シルト（第1面包含層）
9　2.5Y4/2 暗灰黄色シルト（Fe、第1面包含層）
10　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト（第1面包含層）
11　2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト（Fe、第1面包含層）
12　10YR5/2 灰黄褐色シルト（径5cm程度の礫含む、SD02）
13　10YR4/1 褐灰色シルト（砂礫含、SD02）
14　2.5Y4/2 暗灰黄色砂礫（SD02）
15　2.5Y4/1 黄灰色シルト（Fe、SD02）
16　10YR4/1 褐灰色シルト（SD02）
17　2.5Y3/1 黒褐色シルト（SD02）
18　2.5Y5/2 暗灰黄色砂礫層（SD02）
19　10YR4/1 褐灰色シルト（第2面包含層）
20　10YR3/3 暗褐色シルト（第2面包含層）
21　10YR4/2 灰黄褐色シルト（第2面包含層）
22　10YR3/3 暗褐色シルト（Fe、第2面包含層）

第６図　２区調査区北壁土層断面図



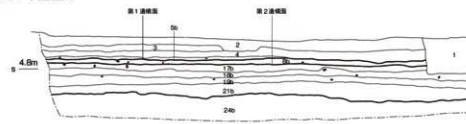
第7図　3区調査区北壁土層断面図

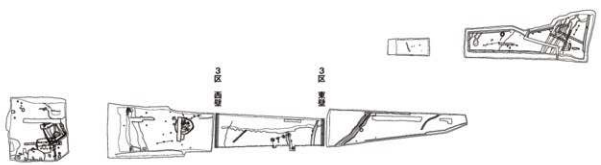
３区　東壁断面



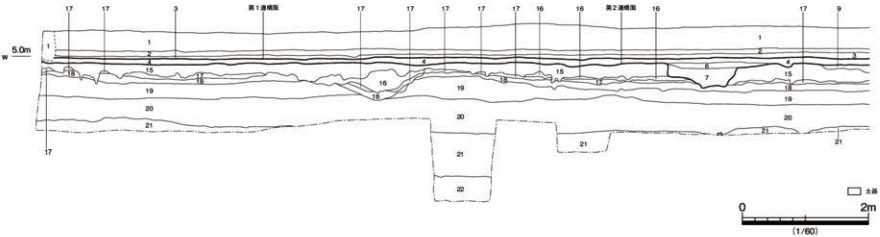
17a 10YR4/1 褐灰色シルト(Fe・Mn、弱粘質、粒径２～3cmの小礫線少量含む、SR01 中層)
17b 2.5Y4/1 黒灰色シルト(Fe・Mn、弱粘質、SR01 中層)
18a 10YR4/2灰黄褐色粘土(Fe・Mn、粒径２～４cmの小礫線少量含む、SR01 中層)
18b 10YR4/2灰黄褐色粘土～10YR6/4にぶい黄橙色粗砂混粘土(Fe・Mn、弱粘質、粒径２～４cmの小礫線少量含む、SR01 中層)
19a 10YR5/1 褐灰色シルト(Fe・Mn、粗砂やや多量に混る、粒径３cm程度の砂岩等の小円礫を極少量含む、SR01 中層)
19b 10YR4/2灰黄褐色粗砂混粘土(Fe・Mn、やや強粘質、粗砂少量混る、SR01 中層)
20　10YR4/2～10YR5/2灰黄褐色シルト(Fe、粒径２～４cmの小礫線少量含む、SR01 中層)
21a 10YR4/1 褐灰色中～粗砂質土(Fe、15世紀以前砂やや多量に混る、粒径３cm程度の砂岩等の小円礫を極少量含む、SR01 下層)
21b 10YR4/2灰黄褐色粘土(Fe、やや強粘質、粗砂極少量混る、SR01 下層)
22　2.5Y4/1 黒灰色礫混砂中粗土(粒径２～５cmの砂岩を主とする円～亜角礫をやや多量に混る、SR01 下層)
23a 10YR5/1 褐灰色シルト～細砂ブロック、粒径２cm前後の小礫線少量含む、SR01 下層)
23b 5Y5/1 灰色砂礫～5Y6/2 灰オリーブ色中砂ラミナ(砂礫層中に 10YR4/1 褐灰色粘土ブロック含む、SR01 下層)
24a 2.5Y5/1 黒灰色礫～中砂(粒径２～15cmの砂岩を主とする円～亜角礫少量含む、無遺物層)
24b 10YR5/3 にぶい黄橙色粘土Fe、やや強粘質、無遺物層)
25a 10YR5/2灰黄褐色砂礫(粒径～15cmの花崗岩を主とする円～亜円礫多量に混る、無遺物層)
25b 5Y6/1 灰色砂礫(上面に Fe 沈着、銅～中砂に粒径５～30 cm程度の砂岩等の円～亜角礫をやや多量に含む、無遺物層)
26　5Y6/1 灰色細砂(粒径～3cmの砂岩を主とする円礫線少量混る、無遺物層)

３区　西壁断面

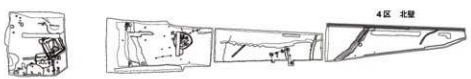




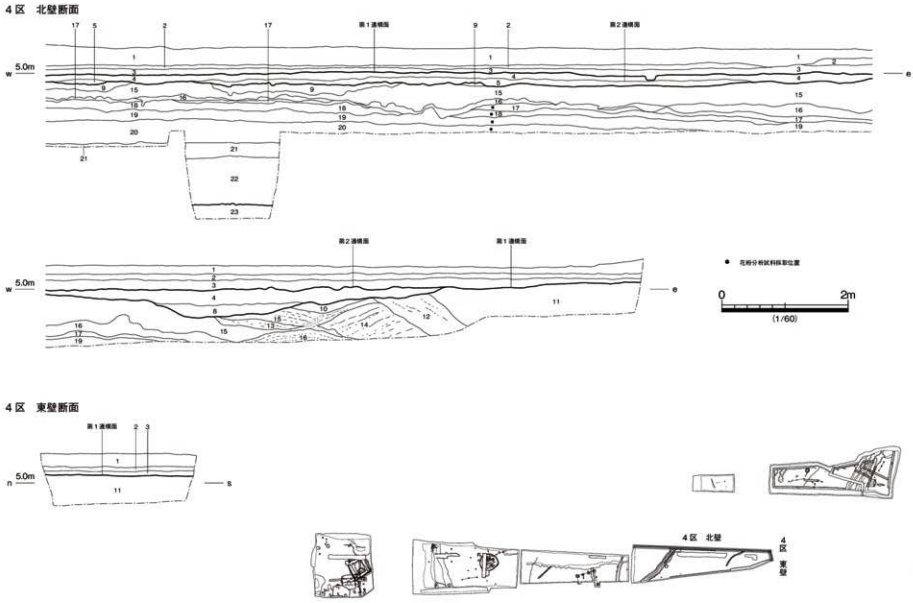
第８図　３区調査区東・西壁土層断面図



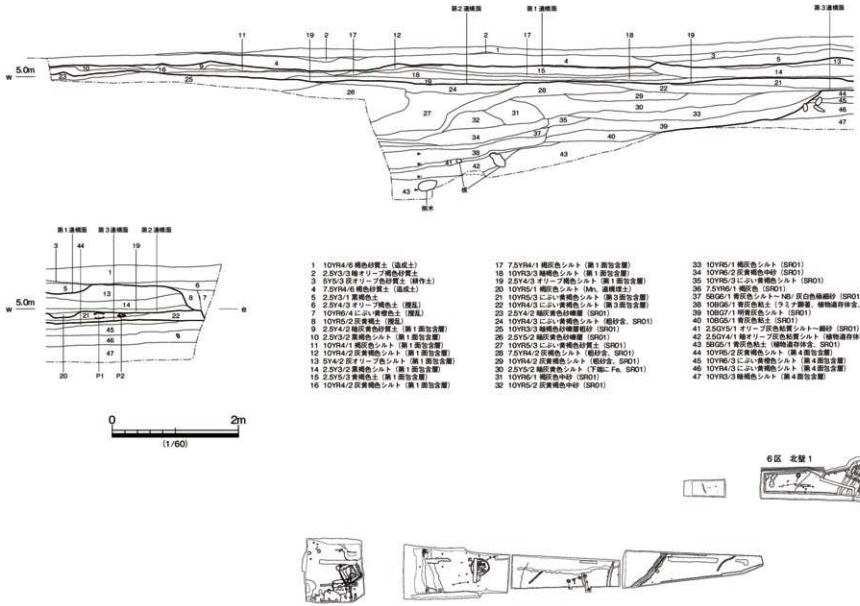
1　耕作土
2　2.5Y6/3 にぶい黄色粗砂混シルト (Fe、粗砂少量混る、床土層)
3　10Y6/1 灰色粗砂質土 (Fe 少、粗砂多量に混る、粒径 2 ～ 4cm の小礫やや多量に含む、包含層 1)
4　10YR6/6 明黄褐色シルト (Fe・Mn 少、固結質、粒径 2 ～ 3cm の小礫少量含む、包含層 2)
5　7.5YR3/1 黒褐色粗砂混粘土 (Fe・Mn 粗砂若干量やや固結質、包含層 3)
6　2.5Y6/1 黄灰色シルト (Fe・Mn、やや固結質、粒径 3cm 程度の小礫少量含む、SD06)
7　10YR5/2 灰黄褐色粗砂～細砂 (Fe、粒径 2cm 程度の小礫若干量含む、SD06)
8　10YR4/1 褐灰色粗砂混シルト (Mn、粗砂ラミナ状に多量混る、粒径 3 ～ 5cm の小礫少量含む、SD07)
9　10YR7/4 にぶい黄橙色粘土 (Fe やや多・Mn、やや強結質、粒径 3cm 程度の 5 層ブロック土を微少量含む、SR01)
10　10YR5/3 にぶい黄褐色細砂 (ややシルト質、SR01)
11　10YR7/2 にぶい黄橙色砂礫 (粒径 1 ～ 14cm の砂岩等の円～亜角礫含む、SR01)
12　10YR5/3 にぶい黄橙色細～中砂ラミナ (SR01)
13　10YR7/3 にぶい黄橙色細砂 5 層とラミナ堆積、SR01)
14　10YR7/4 にぶい黄橙色細砂～粗砂～砂礫ラミナ (粒径 1 ～ 7cm の砂岩等の円～亜角礫含む、SR01)
15　5Y5/1 灰色砂礫から 5Y6/2 灰オリーブ色中砂ラミナ (砂礫層中に 10Y8/4 1 褐灰色粘土ラミナ状に混る、SR01)
16　2.5Y7/2 灰黄色細砂～シルト (粒径 1cm 以下の小礫少量混る、SR01)
17　2.5Y7/4 浅黄色粘土 (Fe やや多・Mn 少、やや強結質、SR01)
18　10YR4/1 褐灰色シルト (Fe・Mn、固結質、粒径 2 ～ 3cm の小礫極少量含む、SR01)
19　10YR4/2 灰黄褐色粘土 (Fe・Mn、粒径 2 ～ 4cm の小礫極少量含む、SR01)
20　10YR4/2 ～ 10YR5/2 灰黄褐色シルト (Fe、粒径 2 ～ 4cm の小礫極少量含む、SR01)
21　10YR5/1 褐灰色シルト～細砂 (Fe 少、粒径 2cm 前後の小礫極少量含む、SR01)
22　10YR5/1 褐灰色砂礫 (粒径 2 ～ 15cm の砂岩等の円～亜角礫含む、SR01)
23　10YR6/3 にぶい黄橙色　礫～ 20cm の砂岩等の円～亜角礫層 (無遺物層)



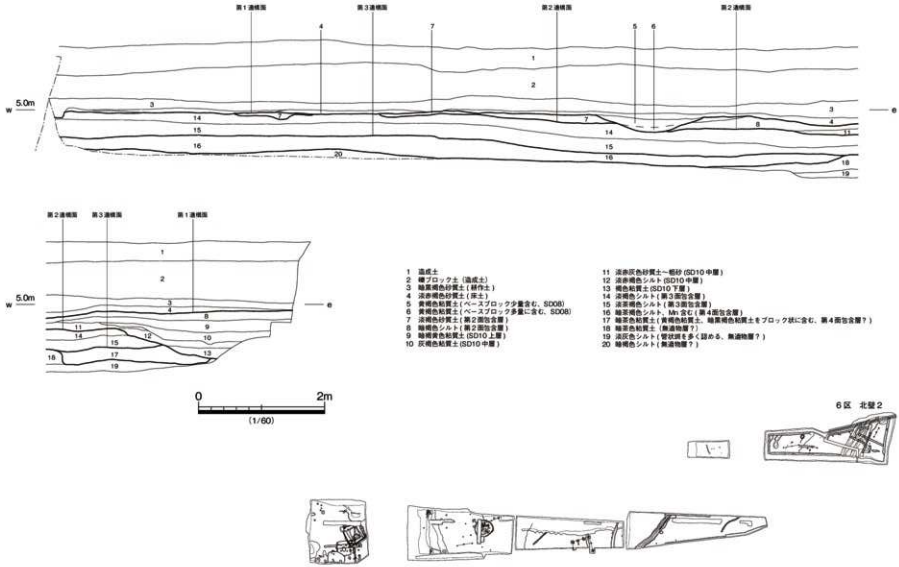
第９図　４区調査区北壁土層断面図



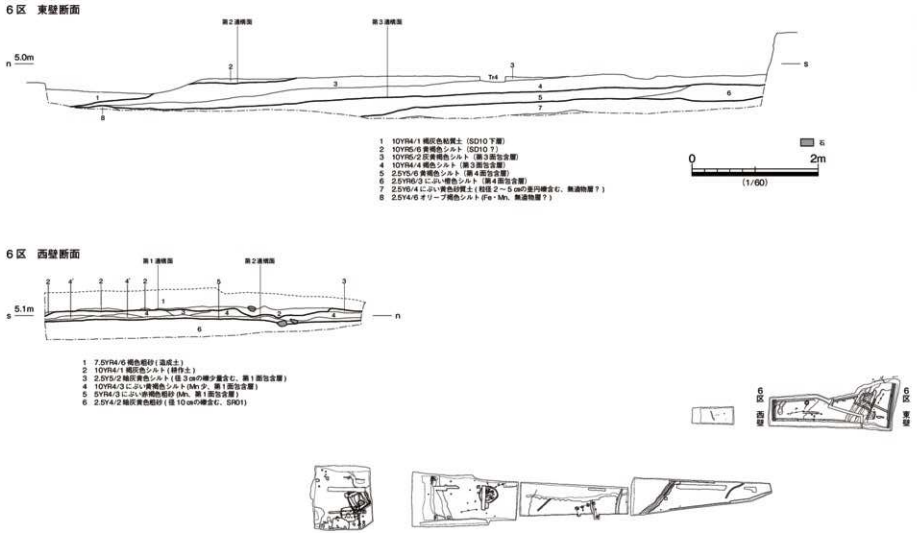
第10図　4区調査区北・東壁土層断面図



第 11 図　6区調査区北壁土層断面図 1



第12図 6区調査区北壁土層断面図2



第13図　6区調査区東・西壁土層断面図

シルト（第７・８図15～17層、第９・10図９～15層）をベースとし、ベース層中より弥生時代後期後半～終末期に遡る遺物が出土した。遺物は、複数の堆積層から出土し、埋土の状況等より旧河道と判断し、以下SR01として報告する。本流路は後述するように、複数の流路が重複して流下しており、土層断面での堆積状況の確認のみで調査を終えた。流路底面については、無遺物層の可能性が高く、３～４区の広範囲に堆積が確認され、礫の大きさや円磨度がSR01埋土礫層とは大きく異なる黄褐色系砂礫層（第７・８図24～26層、第９・10図35層）をベースと考え、流路底とした。

５区は、上述した３・４区の北側に位置する調査区で、土層の堆積も３・４区と大きな相違は認めない。調査前は店舗用地として利用されていたため、地表面下には花崗土の盛土がなされ、その下面で造成前の耕土層が確認された。耕土層下には、東半部を中心に３・４区の包含層Ⅰと一連の堆積とみられる包含層が水平堆積し、その下面で少数の柱穴を検出した（第１遺構面）。５区においては包含層Ⅱの堆積は認められず、第１面のベース層は、３・４区と異なり旧河道SR01の埋土であった。

６区は、調査前は商業用地として利用されていたため、地表面下には厚い造成土の堆積が認められた。また、調査区中央部で建物基礎のコンクリート擁壁が存在し、その東側と西側で造成土下の堆積状況がやや異なるため、以下分けて記述する。

まず東側では、造成土下には、現代の耕作土や床土層（第12図３・４層）の水平堆積が認められ、その直下で褐色系砂質土やシルト（同図７・８・14層）をベースとする第１遺構面を検出した。遺構面の標高は、4.8～5.0ｍ前後である。第１遺構面では溝SD01を検出した。遺構の詳細は後述するが、概ね中世以降の遺構面と考える。

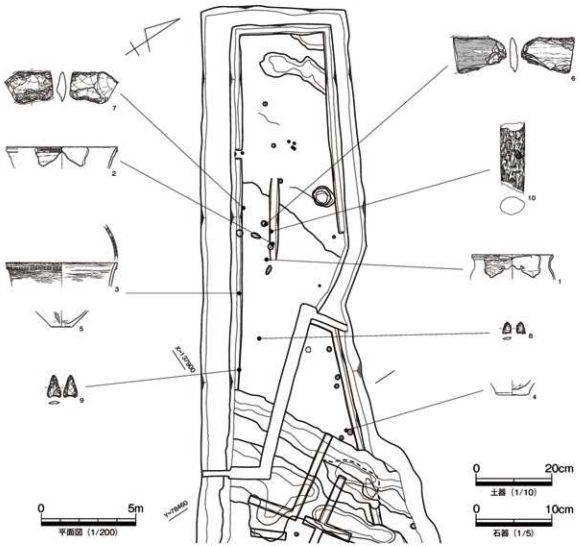
第１面のベース層からは、弥生時代以降の遺物が出土し、包含層下面で、淡褐色シルトをベースとする第２遺構面を検出した。第２面包含層は調査区東半部でのみ堆積が確認され、第２面として溝SD02を検出した。包含層厚は0.2ｍ前後と薄いため、調査では第１面と第２面を合わせて調査を実施した。なお第２面の標高は4.7～4.8ｍである。

第２面以下には、３層に細分される褐色系シルトの水平堆積が認められ、いずれからも遺物の出土が確認された。上位２層は弥生時代後期に下る遺物が、最下層は縄文晩期の遺物がそれぞれ出土し、最下層上面は、後述する旧河道SR02検出面に連続する可能性が想定され、本層上面を第３遺構面として調査をおこなった。第３面からは調査区東端で、柱穴列SA02を検出した。なお最下層暗茶褐色シルト下面も遺構面の可能性を考慮して精査をおこなったが、遺構は確認されなかった。

擁壁西側では、造成土及び現代の耕作土層等下で、10層近くに細分される中世以降の包含層（第11図９～22層）の水平堆積を確認した。層上面にやや顕著な起伏が認められる箇所もあり、中世以降の耕土層の可能性も考えられる。本層下面、黄褐色シルト（同図21・22層）上面で遺構を確認した。遺構面の標高は、4.9～5.1ｍを測り、やや東へ傾斜する。上述した擁壁東側の第１面に連続する遺構面と考えられる。本遺構面では土坑SK01や柱列SA01等を検出した。

第１面ベース層である黄褐色シルトは２層に細分され、東へ傾斜して堆積する。いずれも弥生時代以降の遺物を含む包含層で、本層下面で旧河道SR02を検出した。遺構面の標高は4.7～5.1ｍを測り、流路の埋没時期から擁壁東側の第３面に相当する遺構面と考える。

さらにSR02のベースとなる黄色系シルト層（同図44～47層）からは縄文晩期の遺物が出土し、擁壁東側の当該期包含層へ連続する。なお、当該期包含層も流路堆積の上位層の一部と考えられるが、調査区が狭小なため深くまで掘り下げることができず、流路の詳細については明らかにはできなかった。



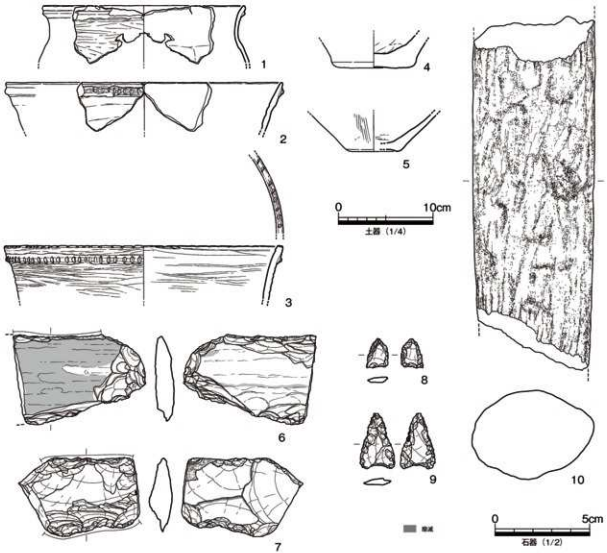
第14図　6区包含層Ⅳ遺物出土位置図

第4節　発掘調査の成果

1　縄文時代（第14・15図）

既述したように、6区第3面のベース層から当該時期の遺物が出土している。包含層は、最大3層に細分され、いずれも黄色系シルト層である。各層下面で遺構の確認作業を行ったが、明確な遺構は検出されなかった。周辺での遺跡の存在が想定される。

遺物は、コンテナ1箱程度と少量で、器種不詳の細片が主体を占め、図化可能な資料は乏しい。**2**・**3**は晩期突帯文土器深鉢の口縁部片である。いずれも口縁端部下に刻み目突帯を貼付し、**3**では端部にも刻み目を施す。**1**は突帯文系の屈曲形深鉢で、突帯形状より弥生時代前期前葉に下る可能性がある。**4**は弥生土器甕底部片で、本資料も混入資料の可能性がある。**5**は縄文土器浅鉢とみられる底部小片。**7**はサヌカイト製の楔形石器で、図上下端に顕著な潰れを認める。また、図右面には一部に磨滅痕を認め、打斧等を転用した可能性がある。**6**は包含層5層出土の泥質片岩製の打製石庖丁である。上縁に潰れと、図左面を中心に顕著なマメツ痕を認める。刃部は再加工された可能性がある。上位層からの混入



第15図　6区包含層Ⅳ出土遺物実測図

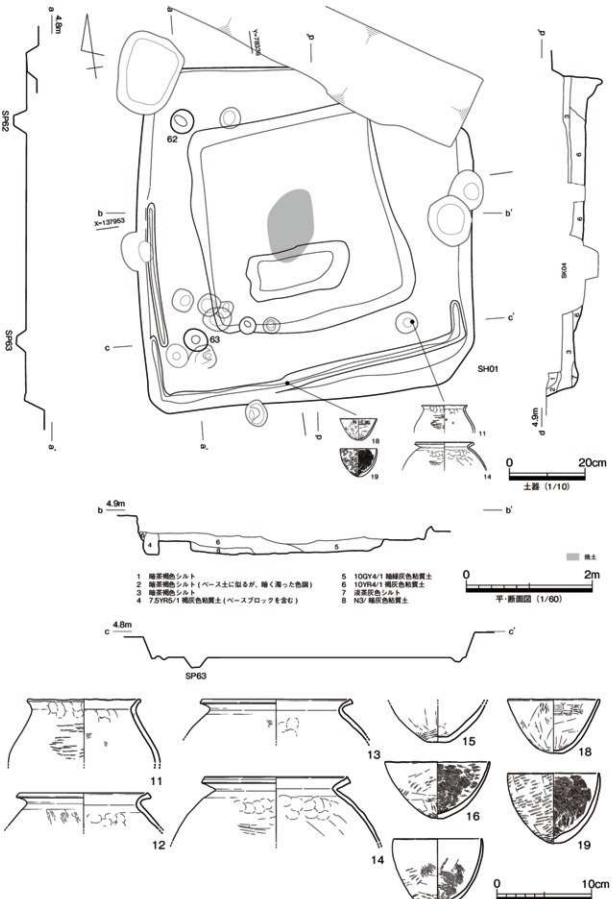
資料の可能性がある。**8**・**9**はサヌカイト製の打製石鏃。**10**は泥質片岩製の石棒である。上下端を欠損し、約19cmが残存する。長径約6.5cmの断面楕円形を呈し、下端部に対して上端部がやや窄まる。また、器表面には加工前の凹凸を認める。

2　弥生時代～古墳時代前期

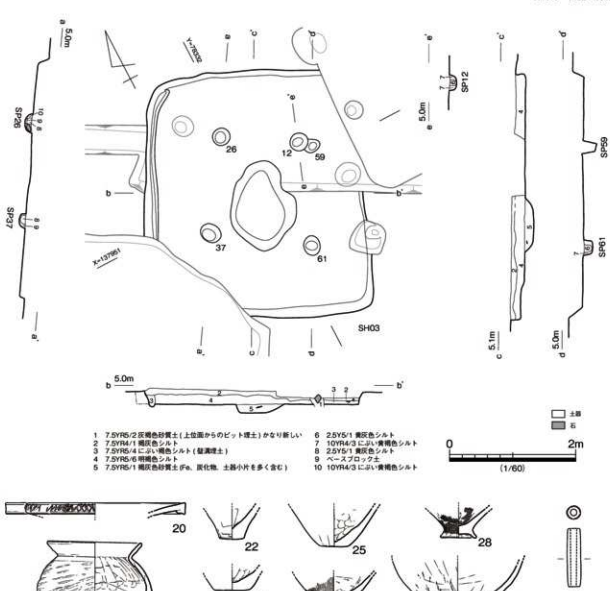
竪穴建物

SH01（第16図）

1区東端部で検出した竪穴建物である。北東隅部を試掘トレンチに、北西隅部をSK03に、東辺中央をSK07にそれぞれ切られる。また上面にほぼ重複してSH02が掘り込まれる。東西約5.31m、南北約5.30m、平面形は概ね隅丸方形を呈する。建物床面に貼床層は認められず、地山を削り残した幅約0.65～1.08mのベッド状遺構が四周に配される。また建物南辺と西辺には壁溝が掘り込まれ、一部重複する部分もあることから、建て替えの可能性が考えられる。主柱穴は西辺に2穴を確認した。南東部の主柱穴は、SH02と重複する可能性も考えられ、おそらく4本柱となるものと思われる。柱穴は長径0.37m前



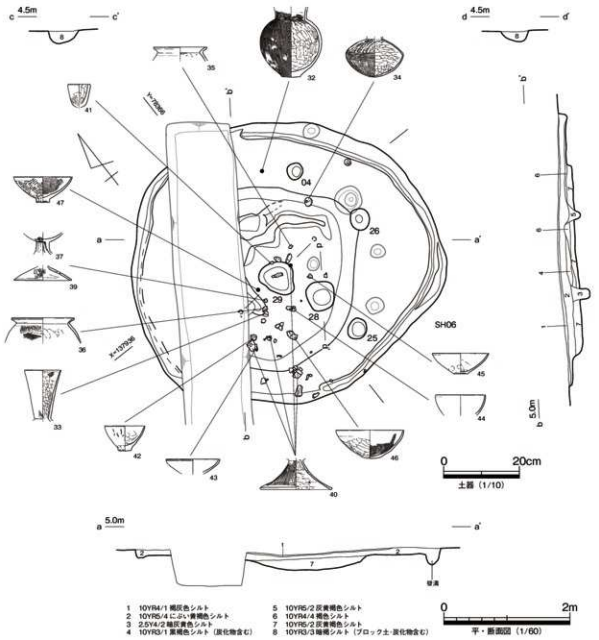
第16図　SH01 平・断面・出土遺物実測図



第 17 図　SH03 平・断面・出土遺物実測図

後の楕円形を呈する。建物中央床面では、南北約 1.17 m、東西約 0.75 mの範囲に焼土の堆積が確認され、その南に東西約 1.59 m、南北約 0.71 mの隅丸方形の土坑が検出された。埋土は概ね３層に細分され、灰色系粘質土が西から東へ傾斜して堆積しており、人為的に埋め戻された可能性も考えられる。

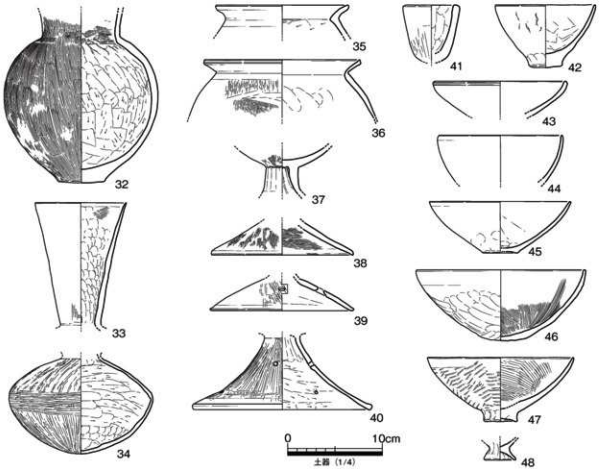
遺物は、土器片がコンテナ 1/3 箱程度出土した。**11** ～ **14** は弥生土器甕。**12**・**13** は、胎土中に結晶片岩粒を含み、阿波吉野川南岸下流域からの搬入土器である。**15** は建物中央部より出土した弥生土器鉢。**16** ～ **19** は１次床面埋土より出土した小型鉢である。出土遺物より古墳時代前期前葉の廃絶の可能性が考えられる。



第18図　SH06 平・断面・遺物出土位置図

SH03（第17図）

1区南東部で検出した竪穴建物で、北東隅部をSH02に、南西隅部をSH05にそれぞれ切られるものの、概ね全形は判明した。平面形は、東西3.47 m、南北3.93 m、床面積約13.6㎡の整った隅丸方形を呈する。残存深は0.25 mを測り、床面はほぼ平坦であった。埋土は2層に細分され、下位層上面より壁溝が建物西辺にのみ確認された。主柱穴は4穴を確認し、北東部柱穴のみ別の柱穴が重複するが、建て替えの可能性は低いと考えられる。柱穴は径0.25 ～ 0.3 mの円ないし楕円形を呈し、すべての柱穴で径0.15 m前後の柱痕を確認した。また、北西部の柱穴で、拳大程度の詰石が出土した。建物中央床面には、長軸約1.4 m、短軸約1.0 m、深さ0.15 mの平面歪な楕円形、断面逆台形状を呈する中央土坑が配され、内部より炭化材等が多量に出土した。



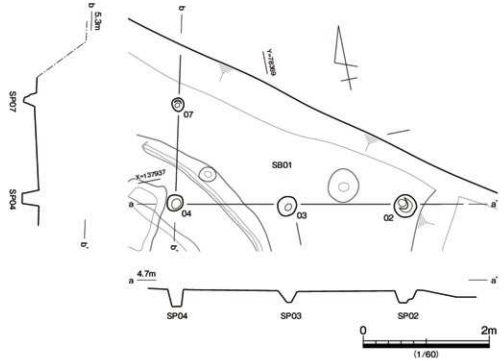
第１９図　SH06 出土遺物実測図

遺物は、弥生土器小片やサヌカイト剥片がコンテナ 1/2 程度が出土した。甕 **21** 以外は土器小片が多く、図化可能な遺物は乏しい。**20** は中央土坑より出土した弥生土器広口壺の口縁部小片。**25・26** は弥生土器甕の底部片。**21** は弥生土器小型甕で、口縁部の大半を欠損する以外は、完形である。倒卵形の体部に、底部は丸底化しており、終末期前後に位置付けられよう。**27** は小型鉢、**22**～**24** はその底部片とみられる。**28・29** は台付鉢の脚台部片である。**30** は備讃Ⅱ式とみられる製塩土器である。**31** は鉄石英製とみられる細身の管玉で、上層より出土した。出土遺物より、弥生時代終末期後葉～古墳時代前期初頭に廃絶したものと考える。

SH06（第 18・19 図）

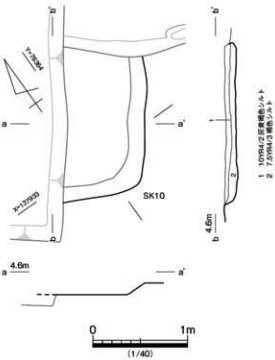
２区北東部で検出した竪穴建物である。西半部は損壊を被っているが、概ね全形は判断される。平面形は、東西約 4.99 m、南北約 4.43 m の歪な円形を呈し、床面積約 17.29㎡を測る。東半部を中心に壁溝が半周し、床面にはベース層を掘り残して幅 0.5 ～ 1.1 m のベッド状遺構が敷設される。ベッド状遺構内側には貼り床（７層）がなされ、その上面で２基の炉（SP28・29）を検出し、周囲より多量の遺物が出土した。

遺物は、弥生土器片やサヌカイト剥片がコンテナ１箱出土したほか、上層より被熱痕のある拳大～幼児頭大の砂岩亜円～亜角礫が３点出土した。**33・34** は弥生土器細頸壺で、同一個体の可能性が高い。ほぼ完形に復元される。**32** は広口壺で、胎土中に雲母粒を多量に含む。**35・36** は甕。**36** の体部外面



第 20 図　SB01 平・断面図

に煤が付着する。**35** は、輝石とみられる黒色鉱物粒を多量に含む。**37** ～ **40** は高杯。**41** ～ **47** は小型鉢である。**41** は、小型丸底形態で本地域では類例に乏しい。胎土から判断して、**33**・**34**・**40** は高松平野香東川下流域からの、**32**・**35** は高松平野周縁部等からのそれぞれ搬入土器と考えられ、本竪穴建物では搬入土器の占める比率がやや高い。**46** の内面全面には、水銀朱の付着が認められる。**48** は貼床層より出土した備讃Ⅲ～Ⅳ式の製塩土器の脚台部片である。出土遺物より、弥生時代後期末頃に廃絶したものと考えられる。



第 21 図　SK10 平・断面図

掘立柱建物

SB01（第 20 図）

2区北東隅部で検出した掘立柱建物である。東西2間（3.59 m）、南北1間（1.54 m）を検出した。北半部は調査区外へ延長し、全形は不明である。東西方向の柱穴3穴は長径 0.3 m前後の、北西隅の柱穴は長径約 0.2 mの楕円形をそれぞれ呈し、柱穴規模の差より、東西方向が桁行、南北方向が梁間となる可能性が考えられる。

遺物は、SP02・03・04・07の柱穴より、器種不詳の弥生土器小片 16 点とサヌカイト剥片2点が出土したのみである。本建物周辺で弥生期の竪穴建物以外に建物遺構は検出されず、出土遺物も弥生土器に

限られることから、当該時期の遺構として報告する。竪穴建物SH06と近接した時期を想定したい。

土坑

SK10（第21図）

２区東半部で検出した土坑で、北半部をSH06に、西半部を試掘トレンチにより削られ、全形は不明である。平面形は、南北1.54ｍ以上、東西0.80ｍ以上の隅丸方形を呈するとみられる。残存深は0.12ｍと浅く、断面形は概ね皿状を呈する。埋土は２層に細分された。いずれも褐色系シルトが水平堆積する。

遺物は出土しておらず、時期を特定しがたいが、SH06より先行するものの、埋土の内容よりSH06と大きな時期差を認めることはできないと考える。

旧流路

SR01（第22図）

３区東端より６区西端付近にかけて検出された、北流する自然河川である。検出面幅約80ｍの低地帯内部を、土層の堆積状況より幅10～30ｍ程度の複数の流路が、流路位置を変更しながら重複して流下していたと考えられる。流路底面の標高は、３区で約3.7ｍ、４区で約2.9ｍ、６区で3.0ｍ前後をそれぞれ測る。

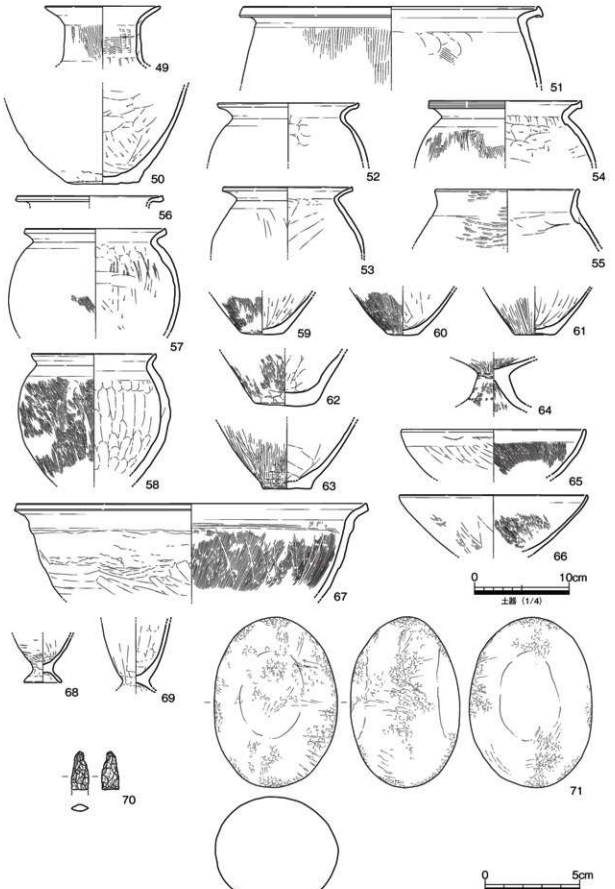
埋土は６区において20層程度に細分されたが、各層の堆積環境を考慮して、上～下層の３層に大別して報告する。４区東端部から６区西端部で検出した、黄色系の細砂～砂礫を埋土とする水成堆積層（第７・８図15層、第９・10図９～16層、第11図23～43層）を上層とする。本層は、確認された本低地帯最終期の流路堆積層で、４区東端部から６区にかけて、後述する中層を大きく削り込んで堆積する。また、一部は３区東半部にかけて低地帯上面を広く被覆する。６区においては流路底面付近より多量の流木が出土した。

３・４区を中心に概ね水平堆積する褐色系粘土～シルト（第７・８図17～20層、第９・10図17～20層）を、中層とする。穏やかな環境下で自然堆積したものと考えられ、本層の堆積により低地帯は概ね平準化される。図示した遺物の大半は、本層出土のものである。

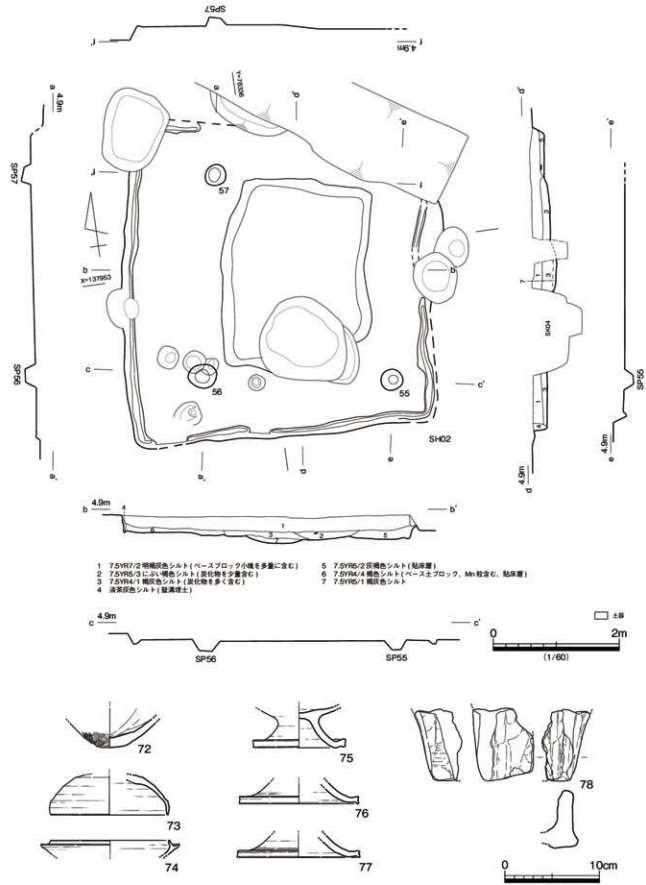
下層（第７・９図21～23層、第９・10図21・22層）は、流路底面で認められた本低地帯初期段階の水成堆積層である。３区西半部では褐色系の中～粗砂質土が、３区東端～４区では褐色系中砂～砂礫がそれぞれラミナ堆積する。

遺物は、各区より弥生土器、サヌカイト砕片や剥片等がコンテナ１箱程度出土した。**51**・**70**は６区出土の遺物で、それ以外は３・４区中層よりそれぞれ出土した。**49**は広口壺である。**50**～**58**は甕である。**51**は弥生時代中葉前後に遡る。当該時期の資料は乏しく、混入の可能性も否定できない。**57**は球胴を呈し、**50**と同一個体となる可能性がある。**52**・**54**・**58**の外面には煤が付着する。**56**は小片のため断定はできないが、高松平野香東川下流域産土器の可能性がある。**55**は口縁部タタキ出しの甕。**53**は古墳時代前期初頭に下る土師器甕で、流路埋没の下限を示す。**59**～**63**は壺・甕の底部片。被熱により赤変したものも認める。**64**は高杯。**67**は大型鉢で、体部外面には小さなクラックや横方向の不整な粘土の皺が認められ、外型成形により製作された可能性が考えられる。**65**・**66**も鉢である。**69**は備讃Ⅱ式、**68**は備讃Ⅲ式のそれぞれ製塩土器である。

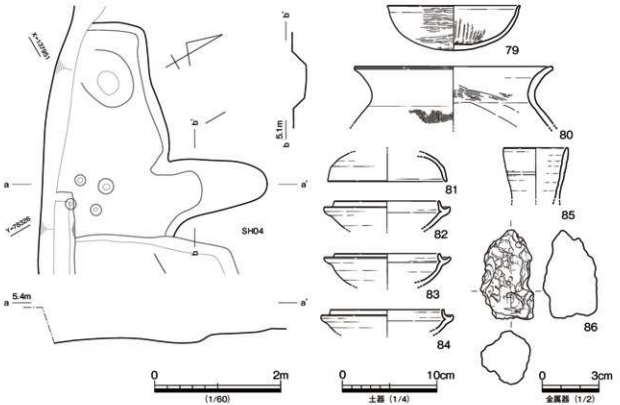
70はサヌカイト製の打製石鏃切先部の小片である。**71**は細粒砂岩製の磨石。側縁を中心にアバタ状



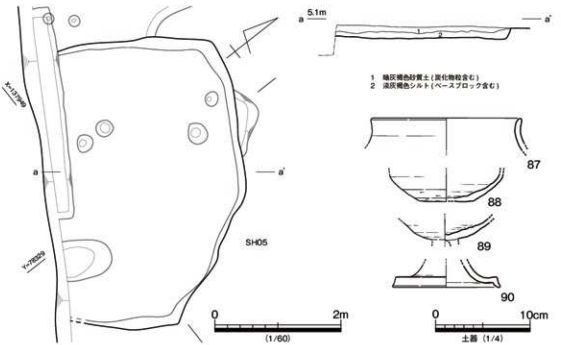
第 22 図　SR01 出土遺物実測図



第 23 図　SH02 平・断面・出土遺物実測図

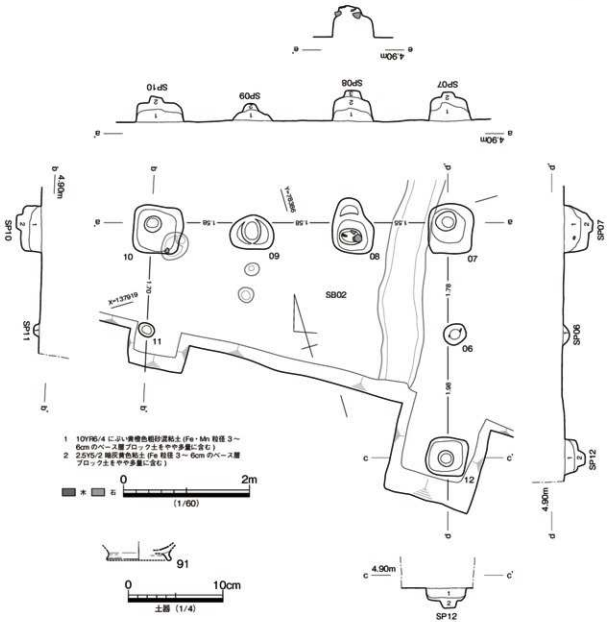


第 24 図　SH04 平・断面・出土遺物実測図



第 25 図　SH05 平・断面・出土遺物実測図

の敲打痕や擦痕を認める。



第 26 図　SB02 平・断面・出土遺物実測図

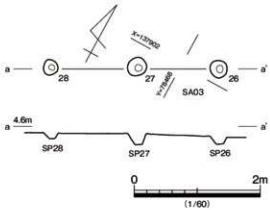
3　古代

竪穴建物

SH02（第 23 図）

１区東端部で検出した竪穴建物である。既述したように、SH01 とほぼ重複して検出された。SH01 と同様に、北東隅部を試掘トレンチに、北西隅部を SK03 に、東辺中央を SK07 にそれぞれ切られる。平面形は、東西約 4.97 m、南北約 5.02 mの概ね隅丸方形を呈するとみられる。おそらく北辺に竈が付されていたと考えられるが、攪乱により削平され遺存しない。建物床面に貼床層は認められないが、置土による幅約 0.74 ～ 1.32 mのベッド状遺構が四周に配される。また北辺を除く３辺には壁溝が配される。主柱穴は攪乱により削平された北東隅柱を除いた３穴を確認し、４本柱となるものと思われる。柱穴は長径 0.34 ～ 0.44 mの平面楕円形を呈する。埋土は概ね４層に細分され、最上位にはベース層ブロック土を多量に含む明緑色シルトが堆積していたことから、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

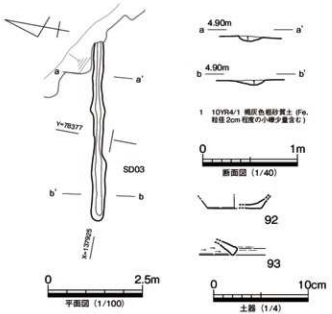
遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、焼土塊、不明鉄製品等の破片がコンテナ1/3箱程度出土した。**72**は弥生土器甕の底部片でSH01からの混入資料であろう。**73**は須恵器杯蓋。**74**は同杯口縁部片。**75**～**77**は同高杯の脚部片である。**77**は竈焚口部から出土した小片で、内外面は被熱によりやや変色し、内面に竈の焼土が付着する。**78**は土師器移動式竈の底部破片である。出土遺物より、TK217型式併行期の廃絶の可能性が考えられる。



第27図　SA03平・断面図

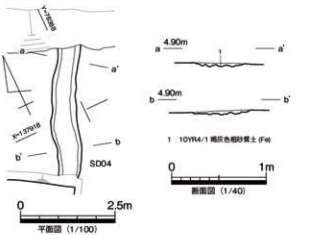
SH04（第24図）

1区南西隅部で検出した竪穴建物で、南半部は調査区外へ延長し、東端部はSH05に切られるため全形は不詳である。平面は矩形を呈するとみられ、北辺に竈が配される。仮に竈が北辺中央に配されたと仮定するなら、東西長は約6.0mと推定される。主柱穴は調査区外とみられ、確認されていない。竈は袖部を置土によって整え、燃焼部床面は皿状に浅く窪み、燃焼部奥壁は高さ0.12mの比高をもって煙道部に接続する。燃焼部床面からは、崩落した竈天井部材とみられる拳大程度の焼土塊が多量に検出された。煙道部は緩やかなスロープ状を呈して北へ延び、建物北辺より延長約1.4mを検出した。



第28図　SD03平・断面図

遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、焼土塊等の破片がコンテナ1/3箱程度出土した。**80**は竈壁内より出土した土師器甕である。**79**は畿内系の土師器杯。**81**は須恵器杯蓋、**82**～**84**は同杯身である。TK209型式併行期か。**85**は同平瓶の口縁部である。**86**は鉄滓である。出土遺物より、TK209～TK217型式併行期の廃絶の可能性が考えられる。



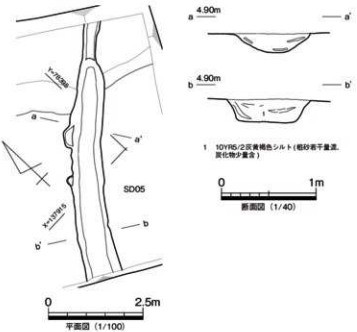
第29図　SD04平・断面図

SH05（第25図）

1区中央南端部で検出した竪穴建物で、南半部は調査区外へ延長するため、全形は不詳である。平面形は、東西約4.56m、南北約3.0m以上のや

や歪な隅丸方形を呈するとみられる。残存深は約0.2ｍで、床面は概ね平坦であった。埋土は２層に細分され、下位層にはベース層のブロック土が含まれる。床面で明確な主柱穴は確認されなかった。

遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、焼土塊等の破片がコンテナ1/2箱程度出土した。土師器は小片が多く、図化可能な資料に乏しい。**87**は粗製の甕口縁部小片。**88**は須恵器杯身として図示したが、外面の自然釉の状況から、蓋となる可能性もある。**89**は同高杯杯部、**90**は脚端部片である。本建物は出土遺物が乏しく時期を特定しがたいが、SH04より後出し、TK217型式併行期の廃絶の可能性が考えられる。

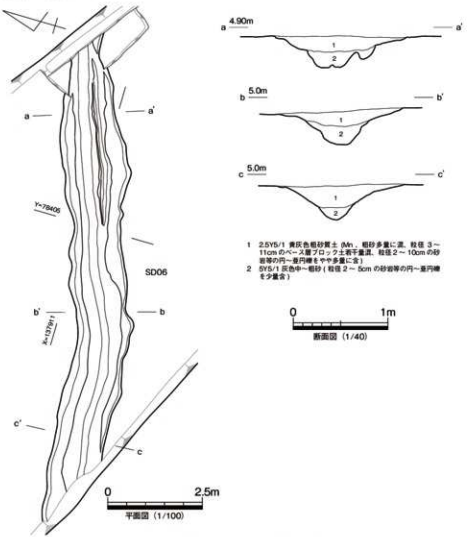


第30図　SD05平・断面図

掘立柱建物

SB02（第26図）

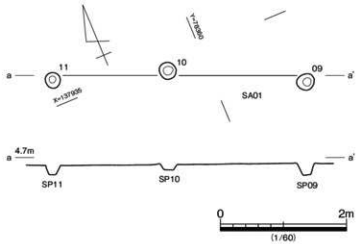
３区中央南端第２面で検出した、東西棟の側柱建物である。南半部は調査区外へ延長するが、概ね建物規模等の情報は確認することができた。桁行３間（4.74ｍ）、梁間２間（3.76ｍ）、主軸方向N 74.45° W、床面積約17.8㎡に復元される。柱穴掘り方は、辺約0.75ｍの隅丸方形を基本とし、梁間中央穴のみ長径0.35ｍの楕円形を呈する。柱痕はほぼすべての柱穴で確認され、長径0.3～0.35ｍの楕円形であった。



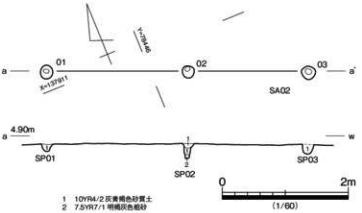
第31図　SD06平・断面図

柱間間隔は、桁行1.55～1.58m、梁間1.70～1.98mで、桁行方向は概ね一定であった。

遺物は、各柱穴より弥生土器や土師器、須恵器の小片が、それぞれ数点～20点程度出土した。大半は器種不詳の小片であり、図化は困難であった。**91**はSP03出土の黒色土器椀。出土遺物より時期を特定することは困難だが、柱穴掘り方が矩形を呈することと、出土遺物より、12世紀前葉を下限とする時期に位置付けられよう。



第32図　SA01 平・断面図



第33図　SA02 平・断面図

柱穴列

SA03（第27図）

6区第2面東端部で検出した。方向N61.50°Eに配され、延長2間（2.67m）を検出し、東西両端は調査区内で途切れる。柱穴は径約0.25mの円ないし楕円形を呈し、残存深は0.11～0.18mと浅い。

遺物は出土しておらず、時期を特定することは困難であるが、検出面や遺構埋土等より、当該時期の可能性が考えられる。

溝

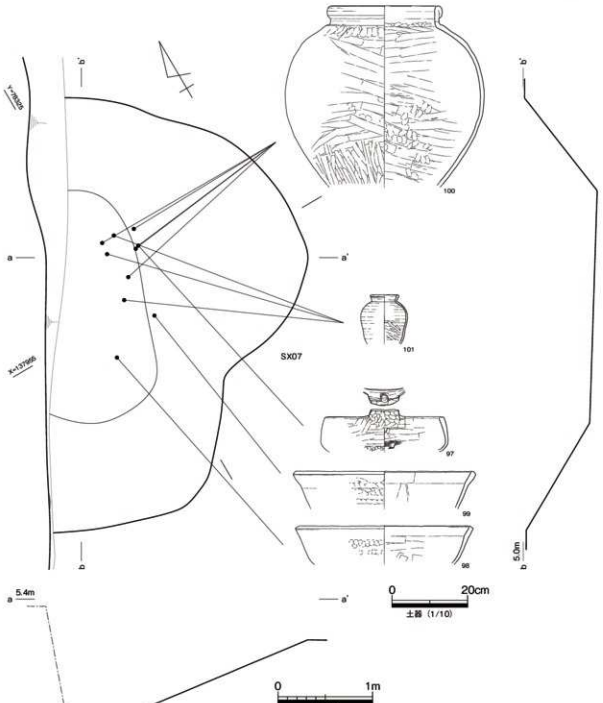
SD03（第28図）

3区第2面で検出した東西溝である。東端部は地下げにより削奪され、西端部は調査区内で途切れ、延長約4.7mを検出したにとどまる。検出面幅約0.22～0.3m、N80.22°Eに配され、残存深は0.05mと浅く、断面形は皿状を呈する。溝底面の標高は、西端部で約4.77m、東端部で約4.78mとほぼ一定し、流下方向は特定できなかった。埋土は褐灰色粗砂質土の単層である。

遺物は、弥生土器甕や土師器の小片が70～80点程度出土した。**92**は弥生土器甕、**93**は同高杯の小片で、胎土中に角閃石粒を含み、高松平野香東川下流域からの搬入資料である。いずれもSR01からの混入資料と考えられ、出土遺物より時期を特定することは困難である。検出位置より、当該時期の遺構と考える。

SD04（第29図）

3区第1面中央で検出した南北溝である。南端は調査区外へ延び、北端は地下げにより削奪され、約3.3mを検出したにとどまる。検出面幅約0.55～0.64m、中央部付近で若干クランクし、北半部は概ねN29.49°Eに配される。残存深は0.04mときわめて浅く、底面には細かな起伏が顕著に認められた。溝



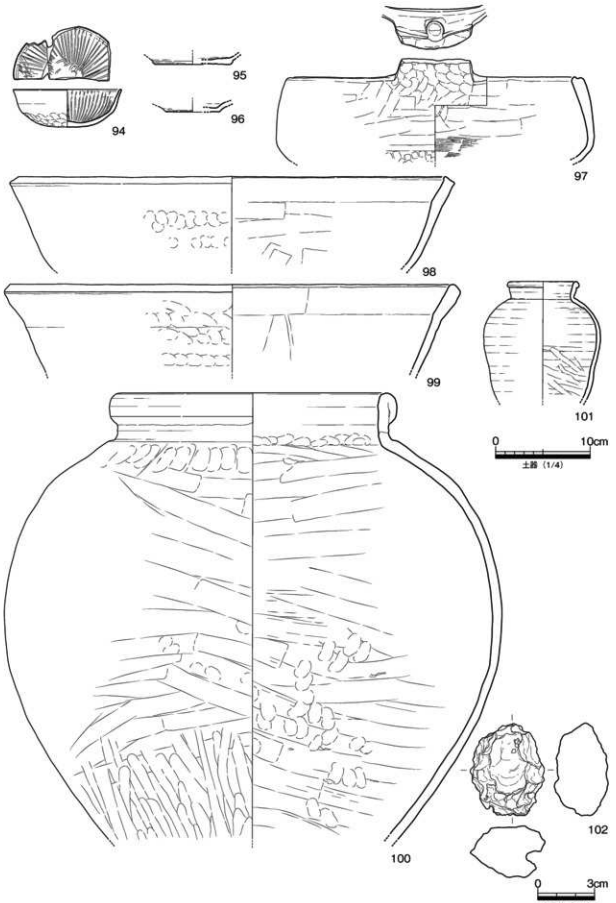
第 34 図　SK07 平・断面・遺物出土位置図

底面の標高は、南端部で 4.74 m、北端部で 4.70 m をそれぞれ測り、高低差より北へ流下していたと考えられる。埋土は褐灰色粗砂の単層で、溝機能時の堆積層とみられる。

遺物は、器種不詳の土器小片２点が出土したのみであり、本遺構も出土遺物から時期を特定することは困難である。検出位置より、当該時期の遺構と考える。

SD05（第 30 図）

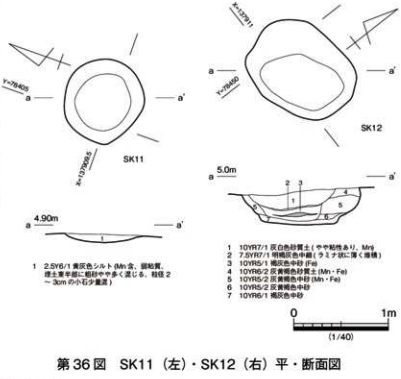
３区第１面東端部で検出した南北溝である。南北両端は調査区外へ延び、延長約 6.7 m を検出した。



第 35 図　SK07 出土遺物実測図

検出面幅 0.85 ～ 0.88 m、緩やかに弧を描くが、流路方向は概ねN 44.7° Eに配される。残存深は 0.20 ～ 0.25 mで、断面形は逆台形ないし箱形を呈する。溝底面の標高は、南端部で 4.52 m、北端部で 4.46 mをそれぞれ測り、高低差より北へ流下するとみられる。埋土は杯黄褐色シルトの単層であった。掘り方肩部に、ベース層の流れ込みとみられる粗砂の堆積を認めるが、明確な流水痕跡は乏しい。

遺物は、器種不詳の弥生土器や土師器、須恵器の小片が 18 点出土したのみである。出土遺物より時期を特定することは困難であり、検出位置より、当該時期の遺構と考える。



第 36 図　SK11（左）・SK12（右）平・断面図

SD06（第 31 図）

４区第２面西半部で検出した東西溝で、東西両端は調査区外へ延長し、約 11.3 mを検出した。調査区内でやや屈曲するものの、流路方向N 74.06° Eに配される。溝は、幅約 1.3 m、残存深約 0.35 m、断面形は概ね逆台形状を呈し、水流による削奪のためか、底面には若干の起伏が認められた。流路底面の標高は、西端部で 4.52 m前後、東端部で 4.48 m前後をそれぞれ測り、高低差より東へ流下していた可能性が高い。埋土は２層に細分され、下位層は、中～粗砂の溝機能時の水成堆積層、上位層は溝廃絶後の自然堆積層と考えられる。

遺物は、弥生土器、土師器、須恵器杯、黒色土器等の小片 40 点が出土した。大半は器種不詳の小片であり、図化可能な資料はない。出土遺物や検出位置より、当該時期の遺構と考える。

4　中世

柱穴列

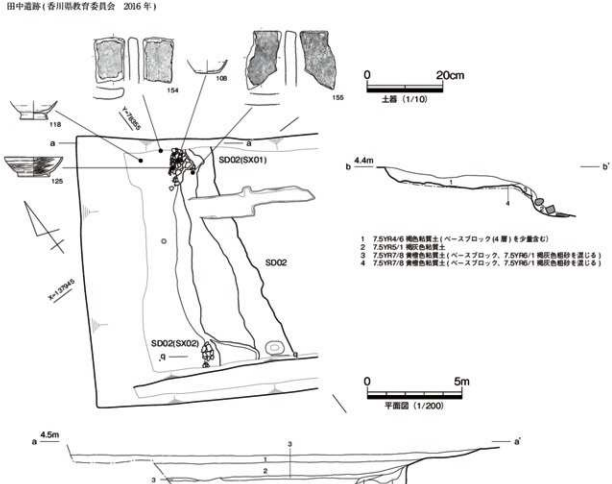
SA01（第 32 図）

２区第１面中央南半部で検出した。方向N 66.81° Wに配され、延長２間（4.04 m）を検出し、東西両端は調査区内で途切れる。柱穴は径 0.2 ～ 0.25 mの円ないし楕円形を呈し、残存深は 0.11 ～ 0.20 mを測る。

遺物は、各柱穴より器種不詳の弥生土器や土師器の小片数点が出土したのみであり、遺物より時期を特定することは困難である。出土遺物や検出位置より、当該時期の遺構の可能性を考える。

SA02（第 33 図）

６区西部第１面で検出した。方向N 67.59° Wに配され、延長２間（4.15 m）を検出し、東西両端は調



第 37 図　SD02 平・断面・遺物出土位置図

査区内で途切れる。柱穴は径約 0.2 mの円ないし楕円形を呈し、残存深は 0.16 ～ 0.24 mを測り、中央部の柱穴にのみ、柱痕と抜き取りが確認された。

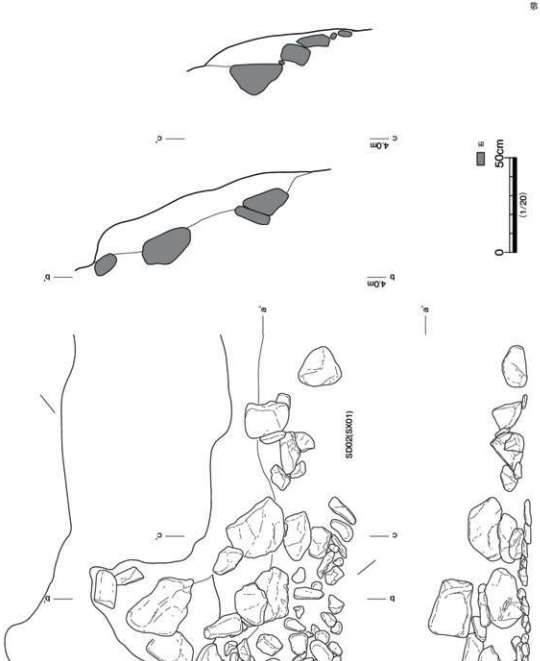
遺物は出土しておらず、時期を特定することは困難であるが、検出面や遺構埋土等より、当該時期の可能性が考えられる。

土坑

SK07（第 34・35 図）

1 区南西隅部で検出した大型土坑である。西半部は調査区外へ延長し、全形は不明。東西 2.54 m以上、南北 4.58 m以上で、平面形は歪な楕円形ないし隅丸方形状を呈するとみられる。残存深約 0.9 mと深く掘り込まれていた。

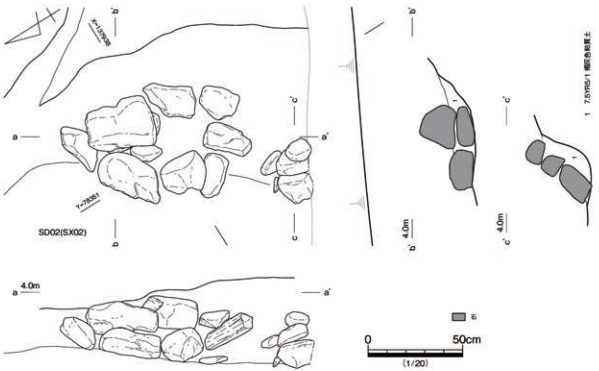
遺物は図示した以外に、器種不詳の弥生土器、土師器、須恵器杯・高杯・壺、緑釉陶器、土師質土器皿・杯・足釜・鍋、黒色土器、瓦器碗、瓦質土器、焼土塊、サヌカイト剥片、炭化物等がコンテナ 2 箱程度出土した。大半は中世以前に遡る混入資料であり、そうした時期の遺構が近接して所在した可能性



第38図　SD02石積護岸（北）平・断面図

が推定される。

94 は飛鳥Ⅱ併行期の畿内系土師器杯で、SH04 からの混入資料であろう。**96** は瀬戸・美濃系の灰釉陶器皿。**97** は土師質土器把手付鍋で、外面と内底面に煤が付着する。**98**・**99** は同鍋。いずれも外面には煤が付着する。**101** は備前焼壺、**100** は同甕である。乗岡編年中世４～５期に遡り、いずれも混入ないし伝世資料と考える。**102** は鉄滓である。出土遺物より、16 世紀末前後に埋没したものと考えられる。



第 39 図　SD02 石積護岸（南）平・断面図

SK11（第 36 図）

4 区西半で検出した土坑である。第 2 面において検出したが、後述する遺物より第 1 面中世の遺構として報告する。東西 0.81 m、南北 0.86 mで、平面形は略円形を、残存深は第 2 面で検出したため 0.1 m と浅く、断面形は浅い皿状をそれぞれ呈する。埋土は単層で、自然堆積とみられる。東半部に粗砂の混入がやや顕著に認められた。

遺物は、器種不詳の土師質土器と瓦質土器の小片 2 点が出土したのみである。出土遺物より詳細な時期を特定することは困難だが、瓦質土器が出土していることから、当該時期の遺構と考える。

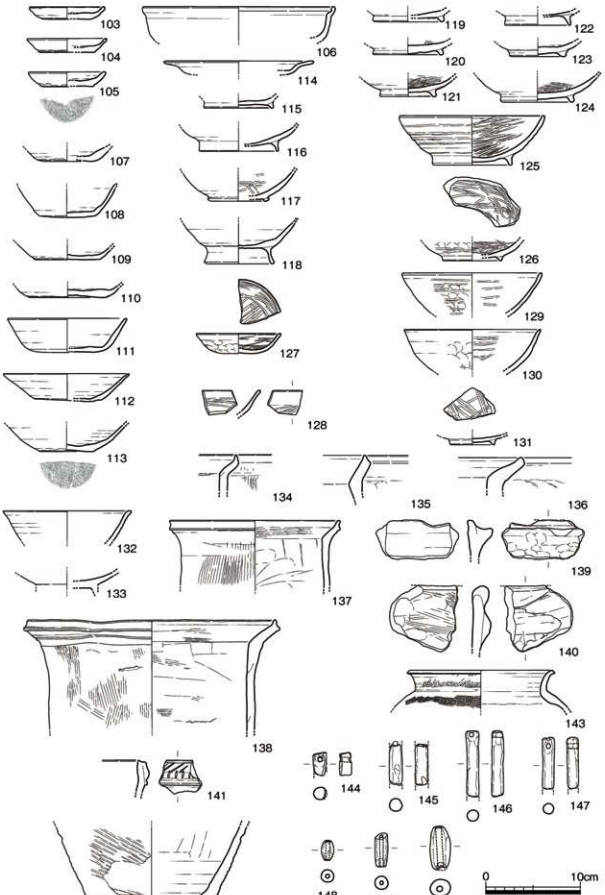
SK12（第 36 図）

6 区第 1 面北西部で検出した土坑である。平面形は、東西約 1.15 m、南北約 0.88 mのやや歪な隅丸長方形を呈する。残存深 0.40 mで、断面形は逆台形状を呈する。埋土は、7 層に細分された。1 ～ 3 層は細～中砂がラミナ堆積する灰白～黄橙色シルトで、4 層以下の堆積層上面より掘り込まれた状態で認められた。おそらくは土坑内部に曲げ物等の容器が据えられていた可能性が考えられ、4 層以下の堆積層はその裏込め土と考えられる。1 ～ 3 層は容器内部の堆積層で、砂層のラミナ堆積が認められることから、滞水下での堆積の可能性も考えられる。

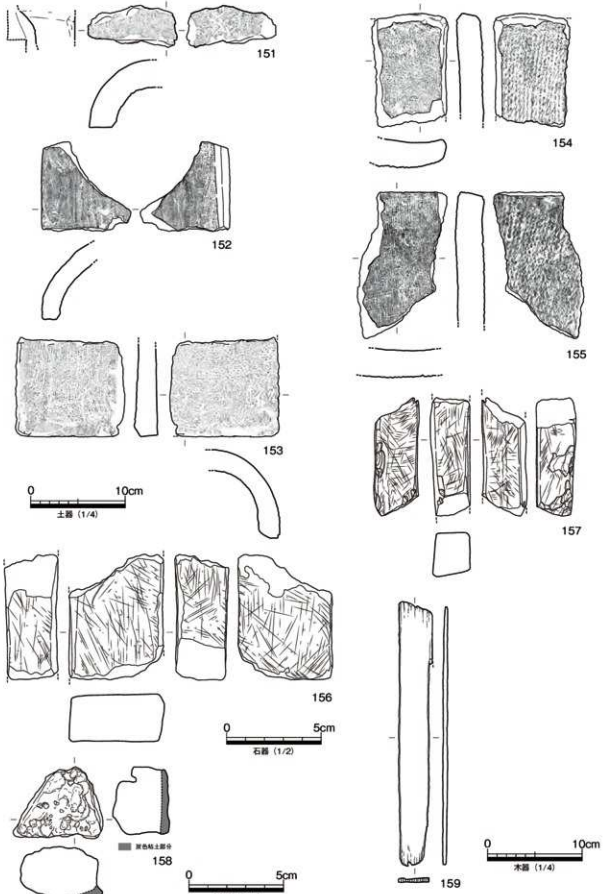
遺物は、弥生土器や土師器、須恵器等の小片約 10 点が出土したのみである。図化可能な資料はない。9 世紀代の遺物が出土しているが、資料が限られるため時期を特定することは困難である。周辺の遺構より、当該時期に属するものと考える。

溝

SD02（第 37 ～ 41 図）



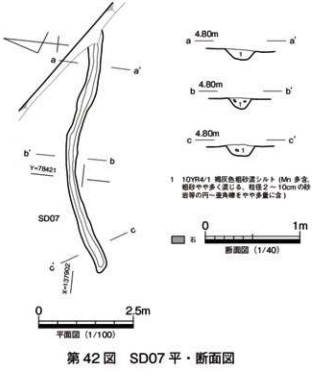
第 40 図　SD02 出土遺物実測図 1



第 41 図　SD02 出土遺物実測図 2

２区第１面西端部で検出した南北大溝である。南北両端及び西肩は調査区外へ延長する。流路延長約 11.5 m を検出した。溝は、幅 7.3 m 以上、残存深約 0.9 m、底面は概ね平坦で、断面形は逆台形状を呈するとみられる。

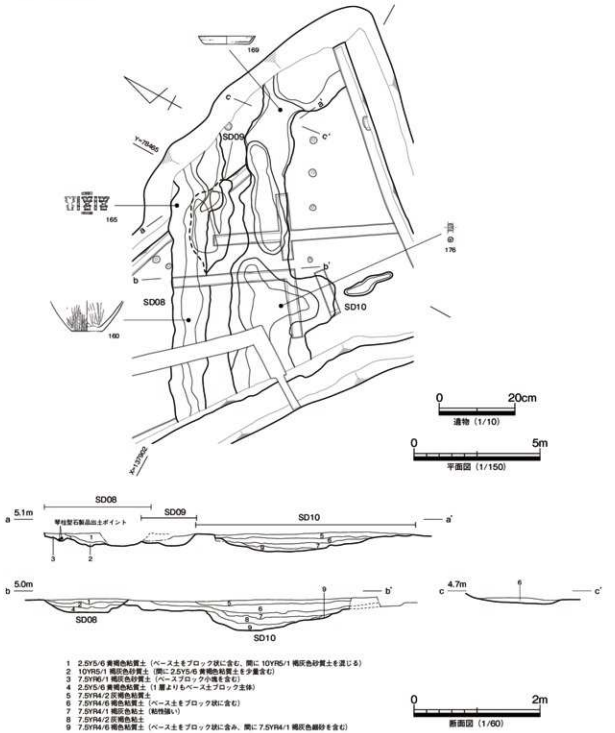
埋土は概ね７層以上に細分され、上～下３層に大別して報告する。上層（１～３層）は砂礫を含む褐色系シルトの水平堆積層で、遺構廃絶後の自然堆積層とみられる。中層（４～６層）はグライ化した黄灰色ないし暗褐色シルトで、低湿地状を呈して堆積したことが考えられ、溝底面より後述する下層を削り込むように堆積していることから、改修後の溝機能時の堆積層の可能性が考えられる。下層（７層）は、暗灰黄色砂礫の水成堆積層で、確認された堆積層の中では、溝開削期に最も近い堆積層であろう。



第 42 図　SD07 平・断面図

また、流路東肩底面南端と北端部で、長軸 0.2 ～ 0.3 m程度の自然礫を２～３段積み重ねた護岸施設が検出された。北端部で延長約２m、南端部で同約 1.5 mを確認し、中央部は崩落したとみられ、溝埋土中に多量の礫が混入していた。礫は横積みにより面を揃え、概ね 35 ～ 40 °の傾斜角で積み上げられていた。本来は３段以上に積まれていたと考えられる。

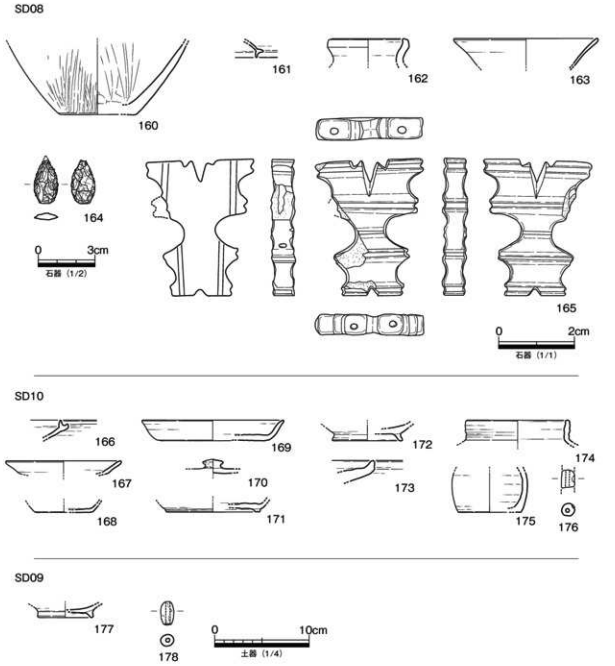
遺物は、各層より弥生土器や土師器、須恵器、黒色土器、土師質土器等の小片、サヌカイト剥片が総量でコンテナ３箱程度出土した。そのうち上層の遺物量が多く、２箱程度が出土している。また図示していないが、上層より白磁碗１点が出土した。遺物は細片が多く、図化可能性な資料は乏しい。**122**・**127**・**128**・**139** ～ **141**・**144**・**153**・**157**・**158** が下層出土の、**107**・**111**・**114**・**116**・**119**・**121**・**132**・**134**・**137**・**138**・**159** が中層出土の、**103**・**110**・**117**・**123**・**124**・**131**・**133**・**135**・**142**・**143**・**145**・**156** が上層出土のそれぞれ遺物である。そのほか、石組内より **109**・**112**・**115**・**120**・**151** の遺物が出土している。**141** は須恵器壺口縁部の小片である。**106** は畿内系の土師器杯。内面にベンガラが付着する。平城Ⅳ前後。**107** は同皿の底部片。**118** は同碗。**133** は、削り出し輪高台の緑釉陶器皿、**132** は灰釉陶器碗である。以上の資料は、いずれも古代に遡り、溝開削時期を示すにはやや他の資料と時期が離れており、混入資料と考えたい。**103** ～ **105**・**114** は土師質土器皿。**103** の外底面は被熱により黒化しており、供膳具以外の用途に使用された可能性がある。佐藤編年中世Ⅰ－３～Ⅱ－２期か。**105** は回転糸切りが施され、本遺跡出土資料では少数派である。**108** ～ **112** は同杯。**108**・**109**・**112** は、土師質土器としては水簸された細かな素地粘土を用い、同中世Ⅰ－３期に遡る可能性がある。それ以外の杯は、同中世Ⅱ－２期前後に下り、埋没の下限を示す。**115**・**117** は同碗である。**116**・**119** ～ **125** は黒色土器碗。同中世Ⅰ－１～Ⅰ－２期前後。**116**・**123** は炭素の吸着が弱く、土師質土器碗の可能性もある。**125** は黒色土器碗としたが、炭素の吸着は内面口縁部付近に限られる。器高が低く、同中世Ⅰ－３期か。**126** は十瓶山周辺窯産須恵器碗。**113** は東播系須恵器碗である。森田編年第Ⅱ期第１段階前後か。**127** は和泉型瓦器皿、**128** ～ **131** は同碗である。尾上編年Ⅱ－２期前後と思われる。**134** ～ **138**



第 43 図　SD08・SD09・SD10 平・断面・遺物出土位置図

は土師器甕で、一部の土器には煤が付着する。**134** は胎土中に角閃石や雲母細粒を含み、搬入品の可能性がある。**139** は土師器羽釜。佐藤編年中世Ⅰ－１期か。**140** は土師器竈として図示したが、小片のため別の器種となる可能性がある。外面に低い突帯を貼付する。**142・143** は十瓶山周辺窯産の須恵器甕。十瓶山編年Ⅳ－１～Ⅳ－２期前後。**144** ～ **147** は棒状土錘、**148** ～ **150** は管状土錘である。

151 ～ **153** は須恵質焼成の布目丸瓦片、**154・155** は同平瓦片である。いずれも混入資料とみられる。**156** は上層出土の砥石で、現状で４面を使用する。流紋岩製の中砥である。**157** は最下層砂礫層出土の



第 44 図　SD08・SD09・SD10 出土遺物実測図

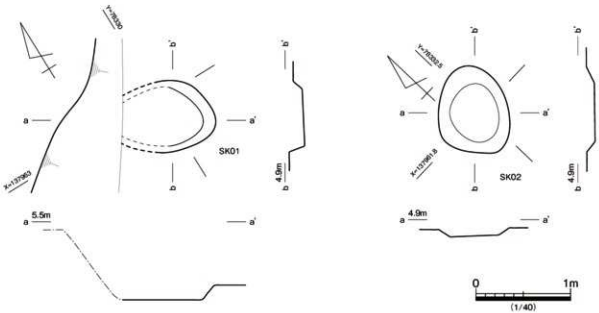
砥石で、現状で 4 面を使用するが、図右端面の使用頻度は乏しい。珪質泥岩製の中砥である。いずれも砥面の使用方向に一貫性はなく、手持砥であろう。**158** は最下層砂礫層出土の鉄滓で、図底面には須恵器もしくは灰白色粘土が溶着する。**159** はモミ属を用いた板材片である。

なお**377**(図版 32)は、護岸石積に使用されていた三波川帯に属する点紋塩基性片岩の板状石材である。阿波地域からの搬入石材であることは確実であるが、搬入の経緯については明確な意図は想定しがたい。

出土遺物より、11 世紀中葉前後に開削され、13 世紀前葉頃に廃絶した可能性が考えられる。

SD07（第 42 図）

4 区第 1 面東半部で検出した東西溝で、西端は調査区内で途切れ、東端は調査区外へ延長し、約 6.3



第45図　SK01（左）・SK02（右）平・断面図

mを検出した。やや蛇行して流下するものの、概ねN 83.3° Eに配され、幅0.23 ～ 0.29 m、残存深0.12 mを測り、断面形はU字状を呈する。埋土は粗砂混りシルトの単層で、溝機能時の堆積層と考えられる。底面の標高は、西端部で4.65 m、東端部で4.52 mをそれぞれ測り、高低差より東へ流下していたことが考えられる。

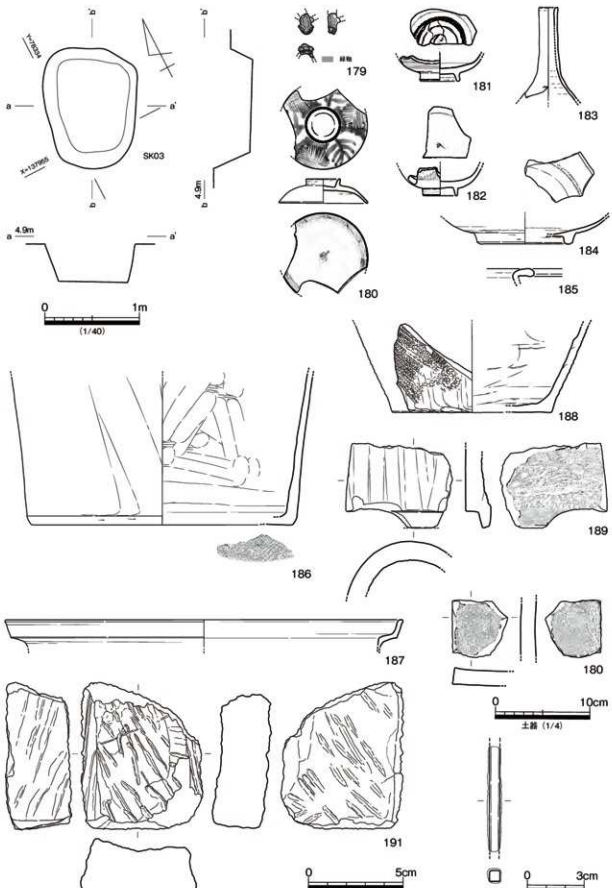
遺物は、器種不詳の土器小片6点が出土したのみである。出土遺物より時期を特定することは困難だが、検出位置より当該時期の遺構として報告する。

SD08（第43・44図）

6区第1面東半部で検出した東西溝で、切り合い関係よりSD09より後出する。東西両端は調査区外へ延び、延長約9.9 mを検出した。検出面幅約1.4 m前後、流路方向N 59.98° Eに配され、残存深0.2 mで断面形は概ね逆台形状を呈する。溝底面の標高は、南端部で4.75 m、北端部で4.61 mをそれぞれ測り、高低差より東へ流下していたと考えられる。埋土は3層に細分されたが、明瞭な水成堆積層は認められない。また、ベース層のブロック土が下位層を中心に混入し、人為的に埋め戻された可能性も考えられる。

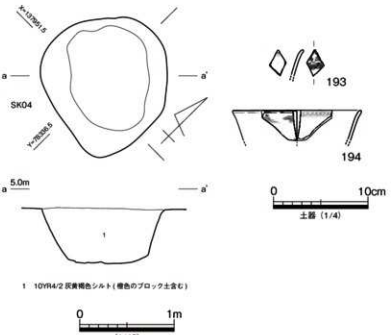
遺物は、弥生土器、土師器、須恵器等の小片がコンテナ1箱程度出土したが、小片が多く、図化可能な資料は乏しい。また、北端部で琴柱形石製品1点が出土した。琴柱形石製品は、中央部で上下に半截し、埋土下層中より近接して出土した。なお、本資料以外にさらに1点が、本溝周辺の側溝掘削時に出土している。詳細な出土位置は不詳であるが、本溝から出土した可能性は高いと判断される。とすれば、大きく後出する時期の溝へ、2点の資料が近接して混入したことになり、既述したように当該資料出土層位は人為的な埋め戻しの可能性もあることから、琴柱形石製品を含む遺構が近在し、その遺構を削奪した土砂で、本遺構を埋め戻した可能性も想定される。

160は弥生土器壺底部片。**161**は須恵器杯蓋口縁部小片。**162**は同壺の口縁部小片である。**163**は土師器杯とみられる小片である。**164**はサヌカイト製の打製石鏃。**165**は滑石製の琴柱形石製品。既述したように、中央部で半截し、その部分を中心に図左面の一部を欠損する。出土遺物はいずれも古代を下



第 46 図　SK03 平・断面・出土遺物実測図

限とするが、ほぼ重複する SD09 より後出し、同溝の後継水路の可能性も想定され、出土遺物を混入資料とし、本溝は当該時期の遺構と判断したい。



第 47 図　SK04 平・断面・出土遺物実測図

SD09（第 43・44 図）

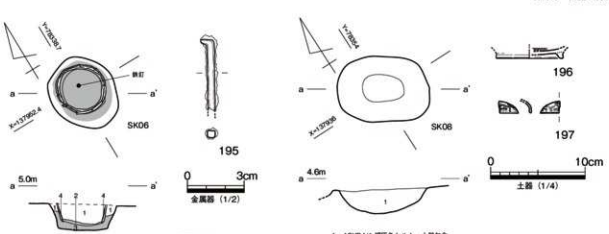
6 区第 1 面東半部で検出した溝で、大半が SD08 と重複し、SD08 により大きく削奪され、南肩部の一部が確認されたに過ぎない。溝は、幅 1.5 m以上、残存深 0.15 mで、断面形は皿状を呈する。

遺物は、弥生土器、土師器、須恵器等の小片が約 40 点出土した。図化可能な資料は乏しい。**177** は黒色土器碗。佐藤編年中世Ⅰ－３期か。**178** は小型の管状土錘である。出土遺物より、12 世紀前半の遺構と考えられ、SD10 との重複関係も矛盾しない。

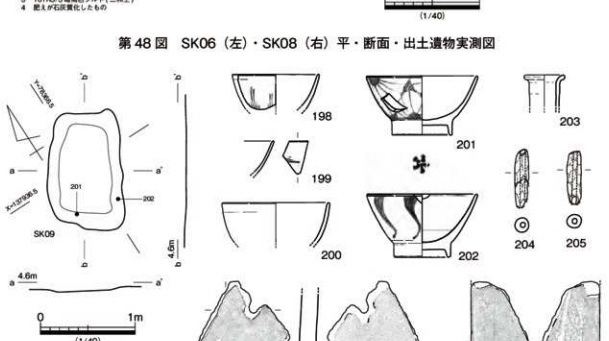
SD10（第 43・44 図）

6 区第 2 面東端部で検出した東西溝である。東西両端は調査区外へ延び、延長 13.4 mを検出した。溝は、調査区南端より北から 61° 東に扁して延び、北端部付近で屈曲して N 87.8° E とほぼ東西に配される。また、調査区南端より約 2.5 mの位置で、南へ小溝が分岐し、溝南部に南北 7.2 m以上、東西 4.0 m以上のやや歪な矩形の区画を形成する。溝は、幅 2.3 m以上、残存深約 0.5 mで、断面形は南肩部がやや緩やかに掘り込まれた、椀底状を呈する。溝底面の標高は、4.3 ～ 4.5 mと場所により起伏が認められ、一定の流下方向を示さない。埋土は 4 ～ 5 層に細分され、褐色系の粘土～粘質土がレンズ状に堆積し、明確な水成堆積層は認められなかった。溝底面の形状や埋土から判断して、区画溝として開削された可能性が想定されるが、その性格については、東に隣接する城泉遺跡の調査報告のなかで示されるものと考える。なお遺物は、上（5・6 層）・中（7・8 層）・下（9 層）の 3 層に大別して取り上げた。

遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器等の小片がコンテナ 2 箱程度出土した。小片が多数を占め、図化可能な資料は乏しく、また上層からの資料が多数を占める。**168**・**169** は同皿。**169** の内外面には火襷痕を認める。**170** は同杯蓋で、天井部に宝珠形の摘みを付す。**171** は同杯底部片。**174** は同短頸壺の口縁部小片。**175** は小型の壺の底部片である。**167** は土師質土器皿である。以上の資料は 9 世紀代以前に遡り、混入資料と考える。**173** は同甕口縁部の小片。**172** は黒色土器碗で、11 世紀後半を中心とした時期と考えられ、本溝埋没時期を示す資料と考える。**176** は管状土錘の小片である。



第 48 図　SK06（左）・SK08（右）平・断面・出土遺物実測図



第 49 図　SK09 平・断面・出土遺物実測図

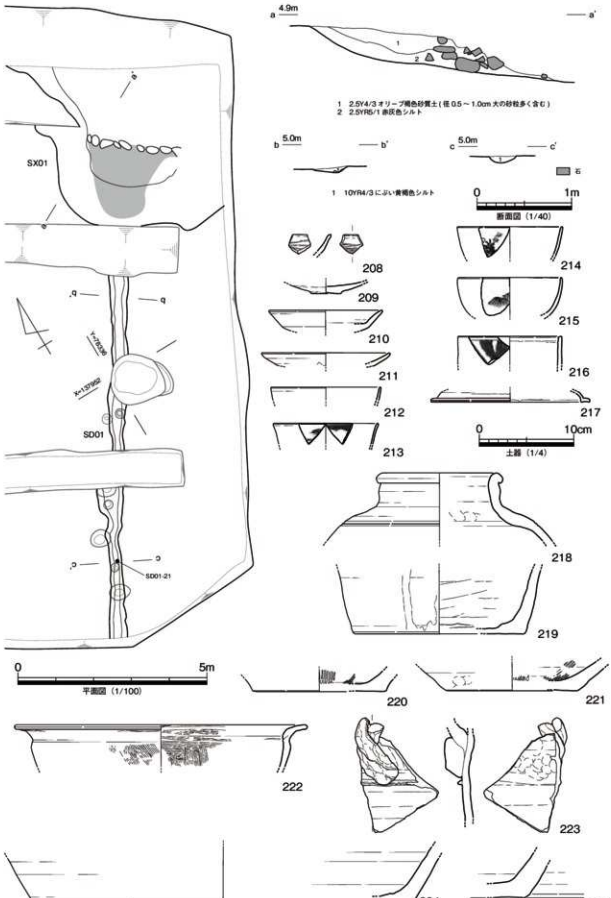
5　近世以降

土坑

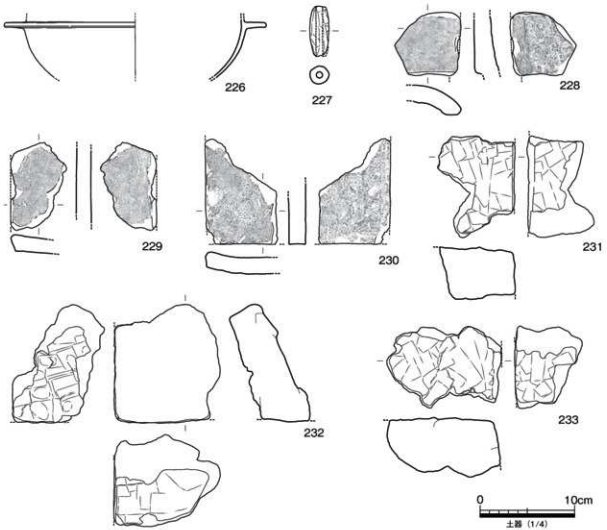
SK01（第 45 図）

1 区北西隅部で検出した土坑である。西半部は調査区外へ延長し、全形は不詳である。平面形は、長軸 0.98 m以上、短軸 0.74 m以上の東西に長い楕円形状を呈するとみられる。残存深は現状で約 0.16 m を測る。

遺物は、土師質土器風呂釜片が 20 点程度のほか、炭化物片が出土した。出土遺物より 18 世紀以降に



第 50 図　SD01・SX01 平・断面・出土遺物実測図 1



第 51 図　SX01 出土遺物実測図 2

廃絶したものと考える。

SK02（第 45 図）

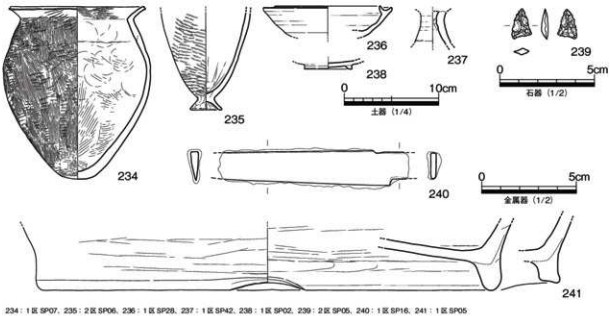
1 区北西部で検出した土坑である。平面形は、長軸約 0.91 m、短軸約 0.73 m、主軸方向N 46.62 ° E のやや歪な隅丸方形状を呈し、残存深約 0.11 m を測る。

遺物は、器種不詳の土器や須恵器の小片が 5 点出土したのみである。出土遺物より時期を特定することは困難だが、周辺の類似遺構より判断して、当該時期に位置付けられるものと考える。

SK03（第 46 図）

1 区中央部で検出した土坑である。SH02 上面より掘り込まれる。平面形は、長軸約 1.23 m、短軸約 0.94 m、主軸方向N 29.77 ° E の整った隅丸方形状を呈し、残存深 0.41 m を測る。

遺物は、図示した以外に、弥生土器、須恵器、瀬戸・美濃系小杯、平瓦片等が 30 点程度のほか、炭化物片が出土した。**179** は色絵磁器蓋物の蛙形をした摘みの小片と思われる。**180** は肥前系磁器染付碗蓋。**181**・**182** は同碗である。**183** は同徳利。**184** は肥前系陶器鉢。**185** は御厩系の土師質土器焙烙の口縁部片である。**186** は土師質土器火鉢。胎土から高松御厩産の可能性が高い。**187** は体部外面型作り



234：1区SP07、235：2区SP06、236：1区SP29、237：1区SP42、238：1区SP02、239：2区SP05、240：1区SP16、241：1区SP05

第52図　柱穴出土遺物実測図

の瓦質土器鍋の口縁部小片。**188**は十瓶山周辺窯産とみられる須恵器甕底部片。11～12世紀に遡る混入資料である。**190**は凸面に雲母粉（きらこ）が付着する平瓦片である。**189**は丸瓦片。**191**は火山産角礫凝灰岩製の延石の破片である。**192**は鉄製の角釘。出土遺物より、18世紀後半～19世紀前半代の遺構と考える。

SK04（第47図）

1区東端部で検出した土坑である。SH02、SD01上面より掘り込まれる。長軸約1.45m、短軸約1.33mの平面歪な楕円形を呈し、残存深は0.58mで、断面形は逆台形状を呈し、底面は概ね平坦である。埋土は橙色ブロック土を含む灰黄褐色シルトの単層で、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

遺物は、弥生土器、土師質土器、瓦器碗、肥前系染付磁器、褐釉焼締陶器等の小片が30点程度、不明鉄製品1点、炭化物片が出土した。**193**・**194**は肥前系染付磁器碗。これら出土遺物より、18世紀後半～19世紀前半代の遺構と考える。

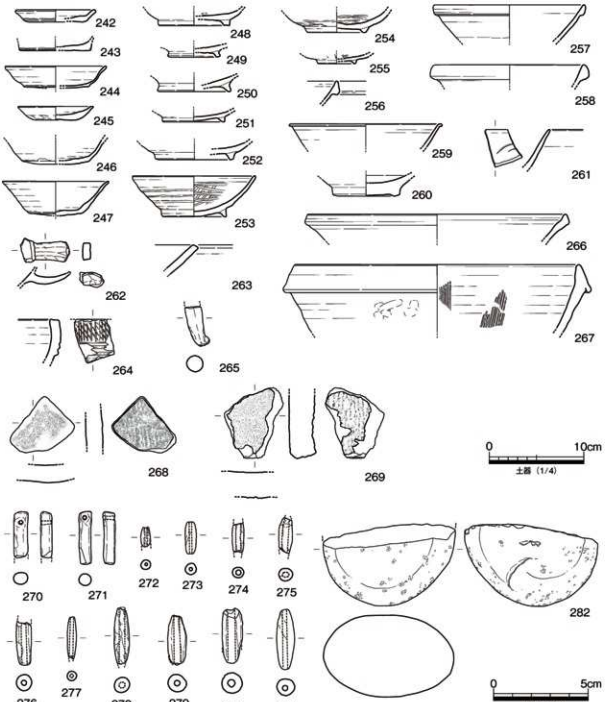
SK06（第48図）

1区東端部で検出した土坑である。SH02上面より掘り込まれる。東西約0.67m、南北約0.77mの平面楕円形を呈し、残存深0.18mを測る。土坑中央部で底面と周囲を三和土によって固定された土師質土器甕底部が出土した。甕内部はブロック状の黄褐色土で充填されており、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

遺物は、上述した土師質土器甕のほかに、甕内部より鉄製角釘**195**が出土した。出土遺物より、18世紀～19世紀代の遺構である。

SK08（第48図）

2区第1面南西部で検出した土坑である。SD02上面より掘り込まれる。東西約0.96m、南北約0.65



第 53 図　３・４区包含層Ⅰ出土遺物実測図

mの平面形は整った隅丸長方形を呈する。残存深は 0.28 mで、断面形はU字状を呈する。埋土は褐灰色シルトの単層であった。

遺物は図示した以外に、器種不詳の弥生土器や黒色土器碗、土師質土器等の小片、サヌカイト剥片が約 50 点出土した。**196** は黒色土器碗底部片である。佐藤編年中世Ⅰ－１期前後に遡り、混入資料である。**197** は肥前系染付磁器蓋。出土遺物より、18 世紀後半～ 19 世紀前半の遺構と考える。

SK09（第49図）

2区第1面北東部で検出した土坑である。第2面まで掘り下げて調査したため、SH06上面で検出した。平面形は、南北約1.2m、東西約0.76mのやや歪な隅丸長方形を呈し、残存深は約0.07mと浅い。主軸方向N29.5°Eに配される。

遺物は図示した以外に、器種不詳の弥生土器、土師質土器足釜、平瓦片等がコンテナ1/4箱程度出土した。**198**は京・信楽系陶器小杉碗。**199・201**は肥前系磁器染付碗。**200**は磁器碗。内外面に細かな貫入を認める。**202**は瀬戸・美濃系施釉陶器碗。**203**は肥前系磁器の徳利口縁部小片。**206**は凸面にきらこが付着する平瓦片で、図上端に径0.7cm程度の釘穴を穿孔する。**207**は丸瓦の小片。**204・205**は管状土錘。いずれも灰白色を呈する緻密な胎土で、非常に堅緻に焼成されており、同じ場所で製作されたものと考えられる。出土遺物より、18世紀後半～19世紀前半の遺構と考える。

溝・性格不明遺構

SD01・SX01（第50・51図）

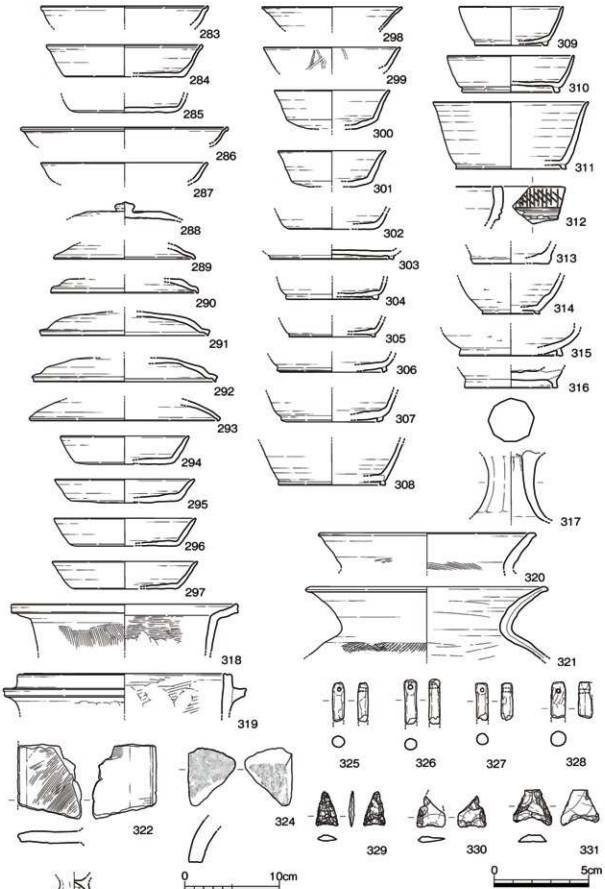
SD01は、1区東端部で検出した南北直線溝で、南端は調査区外へ延長し、北端は壊されているものの、後述するSX01へ合流するものと考えられる。延長約9.6mを検出した。流路方向N31.2°E、検出面幅0.28～0.64m、残存深0.05～0.08mを測り、断面形は概ね皿状を呈する。埋土はにぶい黄褐色シルトの単層である。

SX01は、1区北東隅部で検出された土坑で、北半及び東半部は調査区外へ延長するため、全形は不詳である。東西4.9m以上、南北4.2m以上を確認した。残存深は0.58m、断面形は緩やかな擂鉢状を呈する。埋土は2層に分層される。

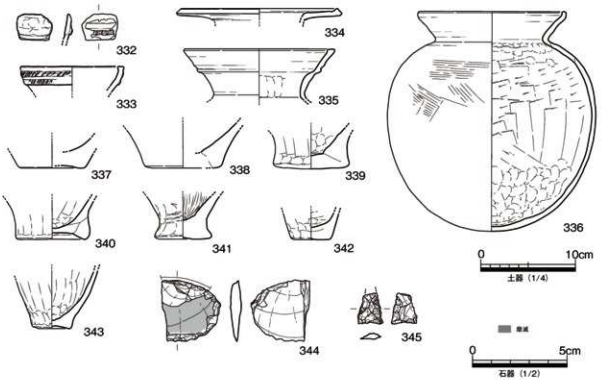
また、掘り方の中央部底面には、長軸0.2～0.4mの砂岩等の亜円礫を横長に据え置き、その南側に拳大程度の多量の円礫を敷き並べるように配した、礫敷遺構を検出した。一部2段に礫の重なりが認められ、本来は数段の石垣状に積まれていた可能性が想定され、礫敷は石積みの裏込め石と考える。上位層中からは、石積みに用いたとみられる石材が、散乱した状態で出土し、埋没に際して石積みを壊しながら埋め戻した可能性が想定される。

SD01からは、器種不詳の弥生土器、須恵器、土師質土器、瓦質土器甕等の小片が数十点のほか炭化物等が、SX01からは、器種不詳の弥生土器、土師器のほか、須恵器杯、土師質土器皿・杯・足釜・鍋、瓦質土器羽釜、瓦器碗、堺・明石系焼締陶器擂鉢、備前系焼締陶器甕、平瓦等の小片、サヌカイト剥片、拳大程の安山岩円礫がコンテナ1箱程度、それぞれ出土した。SD01の遺物の大半は小片化しており、図化可能な資料は少ない。**208**は和泉型瓦器碗口縁部小片で、混入資料であろう。一方、SX01からは完形に近く復元可能な資料等が、まとまって出土している。**209**～**233**がSX01出土の資料である。

222は土師質土器鍋。佐藤編年中世Ⅱ期に遡る。**209**は白磁皿Ⅵ類。内面の釉は被熱のためか剥落が顕著である。**210**は龍泉窯系青磁皿Ⅰ類である。**218**は備前焼壺。乗岡編年中世Ⅳ期か。以上はいずれも中世に遡り、混入資料であろう。**211**は肥前系陶器の灰釉皿。**212**～**215**は肥前系染付磁器碗。**216**は同蓋物。**217**は京・信楽形陶器の鍋蓋。**220・221**は備前焼擂鉢。いずれも内面はよく使いこまれ、磨滅する。**219・224・225**は同甕の底部片か。**219**の外面には自然釉が垂れ、**224**の内面には自然釉がかかる。**223**は同水屋甕の体部小片。外面に断面三角形状の突帯1条と、その上に粘土紐2本を捩り巻き付けた把手を貼付する。



第 54 図　３・４区包含層Ⅱ出土遺物実測図



第 55 図　6 区包含層Ⅲ出土遺物実測図 1

226 は瓦質土器羽釜。**227** は管状土錘である。瓦類は瓦質焼成の平・丸瓦片が少量出土している。**230** は凸面に離れ砂の付着する平瓦片で、中世後半代に遡る。**229** は凸面にきらこが付着する平瓦小片。**228** は玉縁部を欠損した丸瓦小片である。**231** ～ **233** は、いずれも直方体の箱状を呈するとみられる焼土塊で、器表面の大半は被熱のため黒化している。図化したもの以外にも出土しており、おそらくは一個体に接合するとみられるが、復元できなかった。器表面に成形時の板ナデもしくは棒状タタキ痕を認める。

図示した以外にも多数の中世後半代の遺物が出土しており、近接して当該時期の遺構が存在した可能性が考えられる。それら混入資料を除いて、概ね 18 世紀後半～ 19 世紀前半の遺構であろう。

柱穴出土の遺物（第 52 図）

各調査区で検出した、建物遺構を構成しない柱穴より出土した遺物について、以下で報告する。

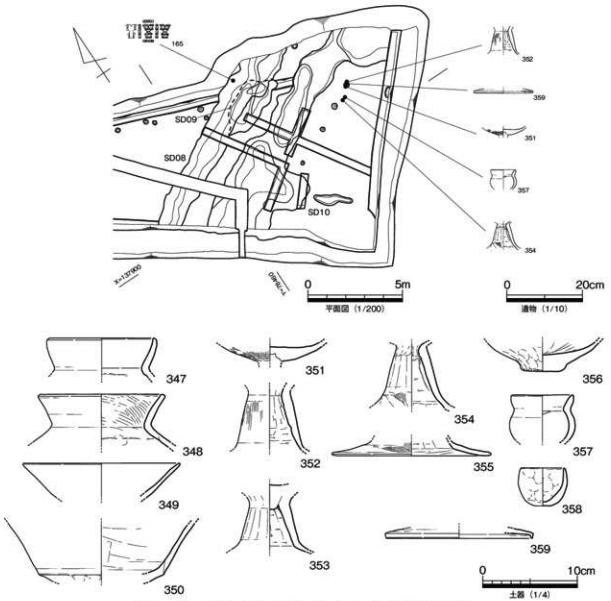
234 は 1 区 SP07 より出土した小型の弥生土器甕である。全形のほぼ半分程度が残存する。**235** は 2 区 SP06 より出土した備讃Ⅲ式の製塩土器である。**236** は 1 区 SP28 出土の須恵器杯である。SP28 は SH05 上面より掘り込まれた柱穴であり、遺物は本来 SH05 に包含されていた可能性も考えられる。**237** は 1 区 SP42 出土の須恵器高杯脚部片である。**238** は 1 区 SP02 出土の土師質土器碗である。佐藤編年中世Ⅱ－２期前後。**241** は、1 区 SP05 より出土した土師質土器風呂釜底部片で、根石裏込め土に破砕して埋められていた。外面には煤が付着し、使用中に破損したためか廃棄されたものと考えられる。

240 は 1 区 SP16 出土の鉄製刀子で、切先を欠損する。**239** は 2 区 SP05 出土のサヌカイト製打製石鏃である。

第 56 図　６区包含層Ⅲ出土遺物実測図２

包含層の遺物（第 53 ～ 58 図）

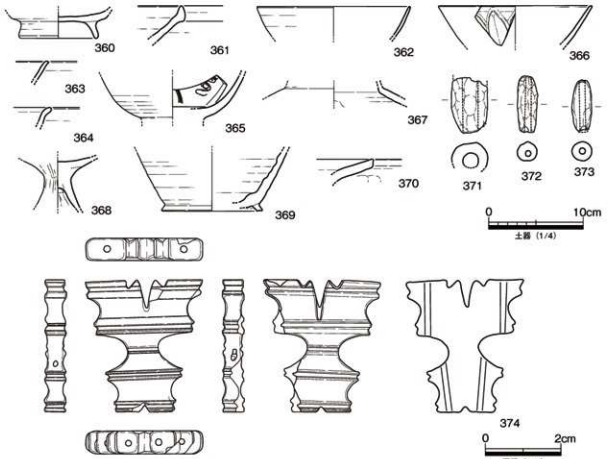
第 53 図は、３・４区包含層Ⅰ出土遺物である。**242** ～ **244** は土師質土器皿。**246** は同杯である。**245** は和泉型瓦器皿、**255** は同碗である。尾上編年Ⅱ期後半～Ⅲ期前半を中心とする時期と考える。**248** は、近江産とみられる緑釉陶器碗である。底部は貼付輪高台で、胎土は浅黄橙色を呈し、軟質である。**249**・**250** は土師質土器碗。佐藤中世Ⅰ－１～Ⅱ－１期と幅を認める。**251** ～ **253** は黒色土器碗。**253** を除いて、佐藤編年中世Ⅰ－２～Ⅰ－３期と思われる。**254** は十瓶山周辺窯産の須恵器碗。同中世



第57図　6区包含層Ⅲ遺物出土位置・出土遺物実測図3

Ⅱ－1期前後。**256**～**258**・**260**は白磁碗Ⅳ類、**259**は同Ⅴ－4類である。**261**は龍泉窯系青磁碗Ⅰ類。**263**は瓦質土器鉢で、口縁端部を矩形に収める。同中世Ⅱ－5期に下る資料と思われる。**262**は須恵器壺の把手とみられる。**264**は同壺口縁部片。外面にヘラで斜格子文を描く。後述する包含層Ⅱ出土資料**312**と酷似するが、別個体の資料である。**265**は土師質土器火鉢とみられる脚部小片である。**266**は東播系須恵器片口鉢。森田編年第Ⅱ期第2段階、12世紀末～13世紀前葉か。**267**は備前焼擂鉢で、乗岡編年中世5期。**268**・**269**は須恵質焼成の布目平瓦片で、いずれも古代に遡る混入資料であろう。土錘は、棒状土錘**270**・**271**と管状土錘**272**～**281**が出土している。**275**は、器表面のナデ調整があまく、径4㎜程度の棒状の工具に、粘土を巻き付けて成形したことが観察できる。**282**は、岩脈として産した流紋岩ないしデイサイトの円礫を転用した磨石片として図化した。混入資料であろう。

第54図は、3・4区包含層Ⅱ出土資料を掲載した。**283**・**286**は畿内系土師器皿。**286**の内外面にはベンガラによる赤彩を認める。平城Ⅲ～Ⅴと考えられる。**284**・**285**は同杯。いずれも胎土に結晶片



第 58 図　２～４・６区包含層等出土遺物実測図

岩粒とみられる石粒を含み、阿波地域からの搬入資料の可能性がある。**288** ～ **293** は須恵器杯蓋。**294** ～ **297** は同皿、**298** ～ **311** は同杯である。これら須恵器皿杯類は、**300**・**301** が概ね飛鳥Ⅴに併行する以外は、十瓶山編年Ⅱ－４～Ⅲ－２期に位置付けられ、Ⅱ－３～Ⅱ－５期が主体を占めるようである。**312** は同壺口縁部片。**314** ～ **316** は同壺底部片。**313** も同底部片としたが、別の器種となる可能性がある。**317** は土師器高杯で、脚柱部を９角形にメントリする。**320** は十瓶山周辺窯産須恵器甕である。佐藤編年中世Ⅰ－２・３期に下り、上位層からの混入資料か。**318** は土師器甕、**319** は同羽釜である。いずれも 10 世紀代に位置付けられ、本層堆積の下限資料と思われる。**322** は移動式竈の鍔部の小片。**324** は須恵質焼成の布目丸瓦片。**323** は備讃Ⅲ式に遡る製塩土器の脚部片である。**325** ～ **328** は棒状土錘で、**326** は胎土中に角閃石や雲母粒をやや多量に含み、搬入資料の可能性が高い。**329** ～ **331** はサヌカイト製の打製石鏃である。

第 55・56 図に掲載した資料は、６区包含層Ⅲ出土遺物である。**332** は突帯文土器口縁部小片。**333** は弥生時代中期前葉の細頸壺の口縁部小片。**334** は弥生時代終末期前後の広口壺の口縁部小片で、高松香東川下流地域からの搬入土器である。**335** は古式土師器二重口縁壺の口頸部の破片。**337**・**338** は弥生時代前期に遡る壺の底部片である。**339** ～ **341** は甕の底部片である。**341** の体部内面には炭化物が付着する。**342** は小型の鉢となる可能性がある。**343** は体部の開きが弱いため鉢としたが、小型甕の可能性もある。**336** は布留系土師器甕。全形の半分程度が残る。**344** はサヌカイト製の打製石庖丁である。

上縁に潰れと、図左面に弱いマメツ痕を認める。**345** はサヌカイト製の打製石鏃。**346** は砂岩製の台石である。一部を欠損するが、ほぼ完形。厚さ6㎝程度の板状の石材を使用する。上面中央が長径9㎝程度の楕円形に浅く窪み、周囲に擦痕や敲打痕を認める。

第57図は、6区SD10東側の包含層Ⅲ出土の遺物である。包含層資料ではあるが、近接した位置より、一部を除いてほぼまとまった時期の遺物が出土しており、また既述した琴柱形石製品の時期とも近く、琴柱形石製品の性格を考察する上で必要と判断したため、まとめて掲載した。**347** は布留系土師器の小型甕の口縁部片である。**348** も布留系甕の口縁部片。**349** ～ **355** は土師器高杯である。いずれも脚柱部内面はケズリ調整がなされる。**356** は突出した底部を有する鉢で、弥生時代に遡る資料である。**357** は小型丸底土器。**358** はミニチュアの鉢である。**359** は須恵器杯蓋の小片で、混入資料であろう。

第58図は、2～4・6区の床土・旧耕土や包含層等より出土した遺物である。**360** は2区包含層出土の土師器碗。**361** は、3区床土層出土の森田編年Ⅸ期第2段階の東播系須恵器片口鉢。**362** は白磁碗である。**363** は、3区床土層出土の同碗Ⅴ－4もしくはⅧ－1・3類の口縁部小片。**364** は4区床土層出土の青磁碗。14世紀後半～15世紀前葉の資料である。**365** は、4区包含層出土の龍泉窯系青磁碗Ⅰ－4類である。**366** は、6区床土直下包含層より出土した同碗Ⅱ類。**367** は、4区床土層出土の四耳壺とみられる白磁壺の小片である。**368** は、6区東端部旧耕作土直下暗灰褐色シルト層より出土した弥生土器高杯である。**370** は6区東端旧耕土直下暗灰褐色シルト出土の土師質土器鍋。佐藤編年中世Ⅱ－2～Ⅱ－5期。**369** も **370** と同じ層出土の須恵器壺である。**371** ～ **373** は、4区包含層礫層上面出土の管状土錘である。**374** は、6区東端部の側溝掘り下げ途中で出土した琴柱型石製品。一部を欠損するのみでほぼ完形である。破断面はやや磨滅しており、使用時か埋没時に破損した可能性が考えられる。詳細な出土位置は不明ながら、6区SD08出土資料 **165** とほぼ同形・同大の資料であり、おおよその出土地点も近接していることから、本資料も同遺構より出土した可能性は高いと考えられる。

第４章　自然科学的分析の成果

第１節　田中遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

田中遺跡（東かがわ市白鳥所在）は湊川右岸の低地にあり、縄文時代末期以降の遺構、遺物が検出されている。今回は、堆積物の時代観や当時の古植生、遺物に関する情報を得る目的で、放射性炭素年代測定、珪藻分析、花粉分析、種実分析、樹種同定、赤色顔料分析を実施した。以下に調査結果について報告する。

1. 放射性炭素年代測定

1-1. 試料

試料は、6区包含層Ⅳ（第11図46層）、6区包含層Ⅳ（第11図47層）から出土した炭化材２点である。いずれも脆弱な炭化材である。

1-2. 分析方法

植物遺体は、メス・ピンセットなどにより、根や土壌など後代の付着物を、物理的に除去する。塩酸（HCl）により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム（NaOH）により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理 AAA:Acid Alkali Acid）。通常では、塩酸、水酸化ナトリウムともに1mol/Lを用いるが、試料が脆弱な場合は水酸化ナトリウムの濃度を0.001 ～ 1mol/Lの範囲内で徐々に濃くしていき、反応をみながら処理を行う。1mol/Lの水酸化ナトリウムを用いると分析に必要な炭素量が得られない可能性がある場合は、濃度の低い水溶液の時点で処理を終える(AaA と表記する)。

これらの試料を燃焼させて二酸化炭素を発生させ、真空ラインで精製する。その後鉄を触媒として還元し、グラファイトを得る。得られたグラファイトをカソードにプレスしてターゲットを作成する。タンデム加速器のイオン源に装着し、^{14}C の計数、^{13}C の濃度 ($^{13}C/^{12}C$)、^{14}C の濃度 ($^{14}C/^{12}C$) の測定を行う。測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸 (HOX-Ⅱ) とバックグラウンド試料の測定も行う。

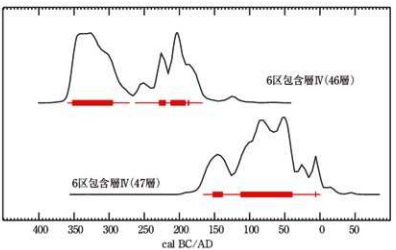
放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。

暦年較正に用いるソフトウエアはCALIB var.7.1である。また、このソフトウエアで用いられる較正曲線の最新のものは2013年に発表されたIntcal13(Reimer et al.2013)である。なお、年代測定値は、国際的な取り決めにより、測定誤差の大きさによって値を丸めるが(Stuiver and Polach 1977)、将来的な較正曲線ならびにソフトウエアの更新に伴う再計算ができるようにするため、丸めない値(1年単位)を記す。

試料名	種別	分析方法	補正年代BP(暦年較正用)	δ13C(‰)	測定年代BP	暦年較正年代					相対比	中央値	Code No.
6区包含層Ⅳ(46層)	炭化材	AAA	2060±30(2060±28)	-28.80±0.29	2120±30	σ	cal BC 153 - cal BC 138		cal BP 2,102 - 2,087		0.105	calBC 79	IAAA-151679
							cal BC 113 - cal BC 39		cal BP 2,062 - 1,988		0.888		
							cal BC 7 - cal BC 5		cal BP 1,956 - 1,954		0.007		
						2σ	cal BC 166 - cal AD 1		cal BP 2,115 - 1,949		1.000		
6区包含層Ⅳ(47層)	炭化材	AAA	2180±30(2,176±27)	-29.00±0.64	2240±30	σ	cal BC 352 - cal BC 295		cal BP 2,301 - 2,244		0.672	calBC 291	IAAA-151680
							cal BC 229 - cal BC 219		cal BP 2,178 - 2,168		0.085		
							cal BC 213 - cal BC 191		cal BP 2,162 - 2,140		0.227		
							cal BC 188 - cal BC 186		cal BP 2,137 - 2,135		0.015		
						2σ	cal BC 359 - cal BC 271		cal BP 2,308 - 2,220		0.563		
							cal BC 263 - cal BC 167		cal BP 2,212 - 2,116		0.437		

1)計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.1を使用。
2)BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
3)付記した誤差は、測定誤差σ(測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。
4)AAAは、酸、アルカリ、酸処理、AaAは、アルカリの濃度を薄くした処理を示す。
5)計算には表に示した丸める前の値を使用している。
5)1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
7)統計的に真の値が入る確率はσは68%、2σは95%である
8)相対比は、σ、2σのそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。
9)中央値は、確率分布図の面積が二分される値を年代値に換算したもの。

第1表　放射性炭素年代測定結果



第59図　放射性炭素年代測定結果

1-3. 結果

結果を、第1表、第59図に示す。

6区包含層Ⅳ(46層)の炭化材は、2060 ± 30yrBP、6区包含層Ⅳ(47層)の炭化材は2180 ± 30yrBPである。暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、及び半減期の違い(^{14}Cの半減期5730 ± 40年)を較正することによって、暦年代に近づける手法である。測定誤差2σの暦年代は、6区包含層Ⅳ(46層)の炭化材はcal BC 170 ～ AD 1、6区包含層Ⅳ(47層)の炭化材はcalBC360 ～ 170である。第59図をみてもわかるように、結果は47層の方がやや古く、層位的には調和した結果である。

これら得られた年代値は、西本編(2006・2007)による^{14}C年代値と考古年代区分との比較検討結果に基づくと、いずれも弥生時代中期頃と推定される。

2. 珪藻分析

2-1. 試料

試料は、3区北壁8a層(第7図)、3区北壁17a層(同図)、3区北壁18a層(同図)、4区北壁20層(第10図)より、採取された塊状試料4点である。3区北壁8a層を除いて、いずれの層準も出土遺物から弥生時代に形成された堆積物と推定されている。試料の層相を以下に示す。

3区北壁8a層：塊状試料には上下関係は不明であるが、オリーブ灰色シルト質細粒砂と暗褐色腐植質シルト質極細粒砂の2層が確認される。前者のオリーブ灰色シルト質細粒砂は塊状をなす。後者の暗褐色腐植質シルト質極細粒砂は微細な炭片が混じり、擾乱されている。分析は暗褐色腐植質シルト層準について実施する。

3区北壁17a層：褐～暗褐色を呈する1cm程の中礫が混じる泥質極細粒砂からなる。生物擾乱により初生の堆積構造は乱れている。

3区北壁17b層：褐～暗褐色を呈する細礫混じり泥質細粒砂からなる。生物擾乱により堆積構造は乱れている。

4区北壁20層：黒褐色を呈する細礫混じり泥質細粒砂からなり、やや腐植を含む。生物擾乱により堆積構造は乱れている。

2-2. 分析方法

湿重約3gをビーカーに計り取り、過酸化水素水と塩酸を加えて試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。次に、分散剤を加えた後、蒸留水を満たし放置する。その後、上澄み液中に浮遊した粘土分を除去し、珪藻殻の濃縮を行う。この操作を4～5回繰り返す。次に、自然沈降法による砂質分の除去を行い、検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下して乾燥させる。乾燥した試料上に封入剤のプリュウラックスを滴下し、スライドガラスに貼り付け永久プレパラートを作製する。

検鏡は、油浸600倍または1000倍で行い、メカニカルステージを用い任意に出現する珪藻化石が200個体以上になるまで同定・計数した。なお、原則として、珪藻殻が半分以上破損したものについては、誤同定を避けるため同定・計数は行わない。200個体が検出できた後は、示準種等の重要な種類の見落としがないように、全体を精査し、含まれる種群すべてが把握できるように努めた。

珪藻の同定と種の生態性については、Horst Lange-Bertalot(2000)、Hustedt(1930-1966)、Krammer & Lange-Bertalot(1985～1991)、Desikachiary(1987)などを参考にする。

群集解析にあたり個々の産出化石は、まず塩分濃度に対する適応性により、海水生、海水～汽水生、汽水生、淡水生に生態分類し、さらにその中の淡水生種は、塩分、pH、水の流動性の3適応性についても生態分類する。結果は、生態分類も含め、同定・計数結果の一覧表として表示する。

2-3. 結果と考察

結果は、第2表に示す。分析が行われた4試料のうち3区北壁8a・17a層の2試料からは、珪藻化石が検出された。他の2試料からは、全く認められない。ただし、珪藻化石が認められた北壁8a・17a層の2試料は、堆積物中に含まれる量としては少なく、2試料とも2個体が検出されたにすぎない。化石の保存状態は、すべて半壊して破片状であるだけでなく、殆ど溶解してシリカの沈着が厚い部分が残っているにすぎないことから、状態としては極々不良である。検出された分類群は、すべて淡水生種であ

種　　類	生態性			環境指標種	3区 調査区北壁			4区 調査区北壁
	塩分	pH	流水		8a層	17a層	18a層	20層
Cymbella spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	1	-	-
Fragilaria ulna (Nitzsch) Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	2	-	-	-
Fragilaria spp.	Ogh-unk	unk	unk		7	1	-	-
海水生種					0	0	0	0
海水～汽水生種					0	0	0	0
汽水生種					0	0	0	0
淡水～汽水生種					0	0	0	0
淡水生種					9	2	0	0
珪藻化石総数					9	2	0	0

凡例
塩分・ p H・流水に対する適応性
H.R.:塩分濃度に対する適応性　pH:水素イオン濃度に対する適応性　C.R.:流水に対する適応性
Euh　:海水生種　al-bi:真アルカリ性種　l-bi:真止水性種
Euh-Meh:海水生種-汽水生種　al-il:好アルカリ性種　l-ph:好止水性種
Meh　:汽水生種　ind　:pH不定性種　ind :流水不定性種
Ogh-hil:貧塩好塩性種　ac-il:好酸性種　r-ph:好流水性種
Ogh-ind:貧塩不定性種　ac-bi:真酸性種　r-bi:真流水性種
Ogh-hoh:貧塩嫌塩性種　unk　:pH不明種　unk :流水不明種
Ogh-unk:貧塩不明種

環境指標種
O:沼沢湿地付着生種（安藤，1990）、U:広適応性種（Asai,K. & Watanabe,T.1995）

第２表　珪藻分析結果

り、海水生種あるいは汽水生種等は認められない。低率に検出された種は、淡水生種で流水不定性種の Fragilaria ulna、流水不明種の Cymbella spp.、Fragilaria spp. である。これらの種群の生態性は、まず、流水不定性種の Fragilaria ulna は、貧塩不定性、好アルカリ性および流水不定であり、広域頒布種の一種で広範のさまざまな水域から比較的、高率に見出される。流水不明種の Cymbella spp.、Fragilaria spp. は、いずれも湿地に最も特徴的に認められ、主要な構成種になる属である。ただ、本分析では、極端に産出率が低いため、検出された少ない個体 (種群) から堆積環境の推定を行うのは危険であるが、前述した認められた種群と産状等を基に若干の考察を行うと以下のように考えられる。本分析結果のように化石の産出率が低く、化石の保存状態も極めて不良である場合の堆積時の環境は、経験的には、水域ではなく、好気的な環境である場合が多い。陸域の低地などにおける好気的環境、すなわち大気に曝された場所での堆積は、通常は、ほとんど堆積は無いに等しいが、低地などの場合、河川等の氾濫によって堆積が進行する。その場合、堆積速度が速いために、堆積物中の化石の絶対量は少ない傾向にある。また、群集は集水域に生育した種群を巻き込んでくるために、総じて混合群集である。以上のように、本分析試料も産出率が特に低いことから、基本的に好気的な場所であった可能性が示唆される。

3. 花粉分析

3-1. 分析試料

試料は、3 区北壁 8a 層 (第 7 図)、3 区北壁 17a 層 (同図)、3 区北壁 18a 層 (同図)、4 区北壁 20 層 (第 9 図) の 4 点である。試料の層相は珪藻分析の稿に記載しているの参照されたい。

3-2. 分析方法

花粉分析は、約試料 10g を秤量し、水酸化カリウムによる腐植酸の除去、0.25mm の篩による篩別、重液 (臭化亜鉛，比重 2.2) による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス (無

種　類	3区 調査区北壁 8a層	3区 調査区北壁 17a層	3区 調査区北壁 18a層	4区 調査区北壁 20層
木本花粉				
マツ属	-	-	1	-
シダ類胞子				
他のシダ類胞子	25	7	2	2
合　計				
木本花粉	0	0	1	0
草本花粉	0	0	0	0
不明花粉	0	0	0	0
シダ類胞子	25	7	2	2
合計(不明を除く)	25	7	3	2

第3表　花粉分析結果

水酢酸9：濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下で、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本はじめ、Erdtman (1952,1957), Faegri and Iversen (1989) などの花粉形態に関する文献や、島倉 (1973)、中村 (1980)、藤木・小澤 (2007)、三好ほか (2011) 等の邦産植物の花粉写真集などを参考にする。

3-3. 結果

結果を第3表に示す。田中遺跡の分析残渣は、全て痕跡程度であったため、全ての残渣を検鏡する。4点共に、花粉・胞子化石の保存が悪く、検出数が少ない。

3-4. 考察

田中遺跡の弥生時代を主とする3区北壁8a～18a層および4区20層の各層位では、花粉化石がほとんどみられない。花粉化石は好気的環境下による酸化に弱いことから（中村,1967)、これらの堆積物は、当時の地面が地下水位より低い湿地的環境下におかれていたわけでは無く、氾濫の際には水により堆積物がもたらされたものの、氾濫の間には乾燥していた時期もあったと考えられる。このような乾湿を繰り返す環境であったため、花粉化石が残りにくかったと思われる。

4. 種実分析

4-1. 試料

試料は、6区 SR01 の34層（第11図・試料番号1)、38層（同図・試料番号2)、38層下層（同図・試料番号3)、42層（同図・試料番号4)、43層（同図・試料番号5）より出土した種実遺体水洗済5点である。試料は水浸の状態で容器に入っている。

4-2. 分析方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、同定が可能な種実や葉などの大型植物遺体を抽出する。大型植物遺体の同定は、現生標本や石川 (1994)、中山ほか (2010)、鈴木ほか (2012) 等の図鑑類を参考に実施し、部位・状態別の個数を数えて、結果を一覧表と図版で示す。また、一部の種実遺体を対象として、デジタルノギスを用いて、長さ、幅、厚さを計測し、結果を一覧表で示す。

分析後は、種実遺体を分類群別に容器に入れ、約70%のエタノール溶液で液浸保存する。分析残渣は、

確認された種類を一覧表の下部に「+」で示し、袋に入れて保管する。

4-3. 結果

結果を第4表に示す。主な種実遺体の計測値を第5表に示す。

分析に供された5試料を通じて、裸子植物2分類群(針葉樹のモミ、カヤ)1個の葉、1個の種実と、被子植物31分類群(広葉樹のヤマモモ、コナラ節、イチイガシ、シラカシ、アカガシ亜属、コナラ属、スダジイ、エノキ属、クスノキ、ヤブツバキ、ヒサカキ属、サクラ節、ノイバラ節、アカメガシワ、カラスザンショウ、イヌザンショウ、サンショウ、イロハモミジ類、ブドウ属(エビヅルの可能性)、ノブドウ、ウドカズラ、イイギリ、クマノミズキ、クロバイ、クサギ、草本のミクリ属、フトイ類、カナムグラ、ヤナギタデ近似種、アオツヅラフジ、コウホネ属)352個の種実の、合計354個の大型植物遺体が同定される。4個は同定ができず、同分類群の果実(萌果)の破片と考えられるため、不明Aとしている。

大型植物遺体群は、5試料とも圧倒的な木本主体の組成を示し、栽培種は確認されない。以下、層位別状況を述べる。

·43層(試料番号5)

常緑高木のクスノキの種子の破片が1個同定される。

·42層(試料番号4)

木本10分類群(常緑高木のイチイガシ、アカガシ亜属、ヤブツバキ、常緑または落葉高木のコナラ属、落葉高木のエノキ属、サクラ節、イロハモミジ類、クマノミズキ、落葉低木のクサギ、落葉藤本のブドウ属、ノブドウ)104個、草本3分類群(抽水性のフトイ類、コウホネ属、落葉藤本のアオツヅラフジ)7個の、計111個が同定される。分析残渣は、木材、双子葉類の葉片、芽、植物片、昆虫類などが確認される。種実遺体群は、コナラ属アカガシ亜属が34個と最多で、ヤブツバキとイロハモミジ類が18個と次いで多く、幼果や殻斗、果実、種子など複数部位が確認される。

·38層下層(試料番号3)

木本8分類群(常緑高木のイチイガシ、アカガシ亜属、スダジイ、ヤブツバキ、常緑または落葉高木のコナラ属、落葉高木のコナラ節、落葉低木のノイバラ節、落葉藤本のノブドウ)43個が同定される。分析残渣は、双子葉類の葉片、植物片、昆虫類(ハエ類の蛹含む)などが確認される。種実遺体群は、イチイガシを含むコナラ属アカガシ亜属が34個と最多で、出土個数の79%を占め、幼果や殻斗、果実など複数部位が確認される。

·38層(試料番号2)

木本21分類群(常緑高木のモミ、カヤ、ヤマモモ、シラカシ、アカガシ亜属、クスノキ、ヤブツバキ、常緑または落葉高木のコナラ属、落葉高木のアカメガシワ、カラスザンショウ、イロハモミジ類、イイギリ、クマノミズキ、常緑小高木のクロバイ、常緑小高木または低木のヒサカキ属、落葉低木のイヌザンショウ、サンショウ、クサギ、落葉藤本のブドウ属、ノブドウ、ウドカズラ)193個、草本3分類群(抽水性のミクリ属、湿生のヤナギタデ近似種、つる性のカナムグラ)5個の、計198個が同定される他に、不明Aが4個確認される。分析残渣は、木材、炭化材、双子葉類の葉片、植物片、菌核、昆虫類、砂礫類などが確認される。

大型植物遺体群は、5試料中最多の分類群数、個数から成る。クスノキが73個と最多で、ヤブツバキが34個、イロハモミジ類が16個と次いで多い。なお、ミクリ属の果実1個は炭化している。

分類群	部位	状態	6区 SR02-1 34層 1	38層 2	38層下層 3	42層 4	43層 5	備考
本木								
モミ	種子	完形	-	1	-	-	-	種子翼上部欠損
カヤ	葉	破片(頂部)	-	1	-	-	-	
ヤマモモ	核	完形	-	2	-	-	-	
コナラ節	幼果	完形	-	-	1	-	-	
イチイガシ	幼果	完形	-	-	3	-	-	
	果実・殻斗	完形	-	-	1	-	-	未熟
	花柱	破片	-	-	1	-	-	
シラカシ	果実	破片(頂部)	-	1	-	-	-	未熟
アカガシ亜属	幼果	完形	-	1	6	3	-	
		破片	-	-	1	-	-	
	果実	破片(頂部)	-	-	2	1	-	
	果実・殻斗	完形	-	-	1	2	-	未熟
	殻斗	完形	-	-	-	7	-	
		破片	-	-	14	19	-	
コナラ属	果実	完形	-	-	1	-	-	アカガシ亜属の可能性
		破片(基部)	-	3	3	2	-	アカガシ亜属の可能性
		破片	-	3	1	-	-	アカガシ亜属の可能性
スダジイ	果実	破片(頂部)	-	-	1	-	-	
エノキ属	核	完形	-	-	-	3	-	
		破片(頂部)	-	-	-	1	-	
		破片	-	-	-	11	-	
クスノキ	種子	完形	1	5	-	-	-	
		完形　食痕	-	1	-	-	-	
		破片	-	67	-	-	1	
ヤブツバキ	果実	破片	-	-	-	1	-	
	種子	完形	-	3	-	4	-	
		破片(基部)	-	5	1	3	-	
		破片	-	26	4	10	-	
ヒサカキ属	種子	完形	-	1	-	-	-	
サクラ節	核	破片	-	-	-	4	-	
ノイバラ節	偽果	完形	-	-	1	-	-	
アカメガシワ	種子	完形	-	10	-	-	-	
		完形　食痕	-	1	-	-	-	
カラスザンショウ	種子	完形	-	3	-	-	-	
イヌザンショウ	種子	完形	-	3	-	-	-	
		破片	-	1	-	-	-	
サンショウ	種子	完形	-	1	-	-	-	
		破片	-	1	-	-	-	
イロハモミジ類	果実	完形	-	4	-	11	-	
		破片	-	12	-	7	-	
ブドウ属	種子	完形	-	11	-	1	-	エビヅルの可能性
		破片	-	1	-	1	-	
ブドウ属?	種子	破片(腹面)	-	2	-	-	-	
ノブドウ	種子	完形	-	6	1	6	-	
		破片(背面)	-	1	-	-	-	
ノブドウ?	種子	破片(腹面)	-	4	-	1	-	
ウドカズラ	種子	完形	-	1	-	-	-	
イイギリ	種子	完形	-	2	-	-	-	
クマノミズキ	核	完形	-	3	-	5	-	
		破片	-	3	-	-	-	
クロバイ	核	完形	-	1	-	-	-	
クサギ	核	完形	-	1	-	1	-	13層背面下部欠損
		破片	-	1	-	-	-	
草本								
ミクリ属	果実	完形　炭化	-	1	-	-	-	
フトイ類	果実	完形	-	-	-	1	-	
カナムグラ	核	完形	-	1	-	-	-	
		破片	-	1	-	-	-	
ヤナギタデ近似種	果実	破片	-	2	-	-	-	半分
アオツヅラフジ	核	完形	-	-	-	3	-	
コウホネ属	種子	完形	-	-	-	3	-	
不明A	果実	破片	-	4	-	-	-	萼果4~5室
合計								
木本種実・葉			1	193	43	104	1	計342個
草本種実			-	5	-	7	-	計12個
不明種実			-	4	-	-	-	計4個
合計(不明を除く)			1	198	43	111	1	計354個
分析残渣								
木材			-	+	-	+	-	
炭化材			-	+	-	-	-	
双子葉類の葉片			-	+	+	+	-	
草			-	-	-	+	-	
植物片			-	+	+	+	-	
齧核			-	+	-	-	-	
昆虫類			-	+	+	+	-	13層下層ハエ類蛹確認
砂礫類			-	+	-	-	-	

第4表　種実分析結果

分類群	部位・状態	遺構	層位	試料番号	計測番号	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	図版番号	備考
ヤブツバキ	種子	6区 SR01	38層	2		19.3	16.5	12.3	14	胴径3.1mm
サクラ節	核	6区 SR01	42層	4	-	4.6	4.5	2.7 +	15	頂部丸い
ノイバラ節	偽果	6区 SR01	38層下層	3	-	6.2	5.1	3.3	16	果柄残存長29mm,幅1.3mm
ブドウ属	種子	6区 SR01	38層	2	1	4.5	3.6	2.7	23	基部尖る,合点窪まない
ブドウ属	種子	6区 SR01	38層	2	2	4.4	3.3	2.3	-	基部尖る,合点窪まない
ブドウ属	種子	6区 SR01	38層	2	3	3.9	2.7	2.1	-	基部尖る,合点窪まない
ブドウ属	種子	6区 SR01	38層	2	4	3.9	3.2	2.1	-	基部尖る,合点窪まない
ブドウ属	種子	6区 SR01	38層	2	5	4.4	3.3	2.2	-	基部尖る,合点欠損
ブドウ属	種子	6区 SR01	38層	2	6	3.7	2.9	2.1	-	基部尖る,合点欠損
ブドウ属	種子	6区 SR01	38層	2	7	4.0	3.4	2.0	-	基部尖る,合点欠損
ブドウ属	種子	6区 SR01	38層	2	8	3.7	3.0	2.1	-	基部尖る,合点欠損
ブドウ属	種子	6区 SR01	38層	2	9	3.6	2.6	1.8	-	基部尖る,合点欠損
ブドウ属	種子	6区 SR01	38層	2	10	4.0	2.8	2.2	-	基部尖る,合点含む背面一部欠損
ブドウ属	種子	6区 SR01	38層	2	11	3.6 +	2.7 +	2.2	-	基部～側腹面一部欠損,合点窪まない
ブドウ属	種子	6区 SR01	42層	4	-	3.9 +	3.5	2.8	-	基部僅かに欠損,合点欠損
ブドウ属	種子(背面)	6区 SR01	42層	4	-	4.4	3.3	-	-	基部尖る,合点欠損,腹面欠損
ミクリ属	炭化果実	6区 SR01	38層	2	-	3.6	2.4	-	30	損傷体
フトイ類	果実	6区 SR01	42層	4	-	1.8	1.4	0.4	31	
不明A	断果片	6区 SR01	38層	2	1	8.1	4.7	2.4	36	果皮厚1.2mm
不明A	断果片	6区 SR01	38層	-	2	8.0	5.0	1.7	-	果皮厚1.0mm

第5表　主な種実遺体の計測値

·34層(試料番号1)

常緑高木のクスノキの種子が1個同定される。

4-4. 考察

田中遺跡の6区 SR01の34～43層より得られた大型植物遺体群は、常緑針葉樹で高木になるモミ、カヤ、常緑広葉樹で高木になるヤマモモ、イチイガシ・シラカシなどを含むコナラ属アカガシ亜属、スダジイ、クスノキ、ヤブツバキ、常緑小高木のクロバイ、常緑小高木のヒサカキ属、落葉広葉樹で高木になるコナラ節、エノキ属、サクラ節、イロハモミジ類、イイギリ、クマノミズキ、アカメガシワ、カラスザンショウ、低木のノイバラ節、イヌザンショウ、サンショウ、クサギ、藤本のブドウ属(エビヅルの可能性)、ノブドウ、ウドカズラ、アオツヅラフジ、抽水性草本のミクリ属、フトイ類、コウホネ属、湿生草本のヤナギタデ近似種、つる性のカナムグラから成り、圧倒的な木本主体の組成を示した。

沿海地の常緑広葉樹林(照葉樹林)に生育する樹種や、河畔林要素の落葉樹が多いことから、田中遺跡が立地する湊川集水域の森林植生を反映していると考えられる。38層から確認された針葉樹のモミは、後背地の丘陵から山地に生育していたと考えられる。

また、調査区周辺域には、42層から確認されたフトイ類、コウホネ属、38層から確認されたミクリ属などの抽水植物が生育可能な水深1m以内の浅い水湿地の存在が推測される。

5. 樹種同定

5-1. 試料

試料は、SR01およびSD02から出土した木材（自然木）6点(樹種-1～6)である。

5-2. 分析方法

剃刀を用いて木口（横断面)·柾目（放射断面)·板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム·クロラール（抱水クロラール, アラビアゴム粉末, グリセリン, 蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および

試料番号	管理番号	地区	遺構	層位	状態	種類
樹種-1	NTK-R2011	2区	SD02	下層	生木	ヤナギ属
樹種-2	NTK-R6023	6区	SR01	38層	生木	ヒノキ科
樹種-3	NTK-R6061	6区	SR01	38層下層	生木	トネリコ属＜根＞
樹種-4	NTK-R6038	6区	SR01	38層	生木	カエデ属
樹種-5	NTK-R6061	6区	SR01	38層下層	生木	カエデ属
樹種-6	NTK-R6067	6区	SR01	42層	生木	カヤ

第６表　樹種同定結果

独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東 (1982)、Wheeler 他 (1998)、Richter 他 (2006) を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林 (1991) や伊東 (1995,1996,1997,1998,1999) を参考にする。

5-3. 結果

樹種同定結果を第６表に示す。田中遺跡の木材は、針葉樹２分類群（ヒノキ科・カヤ）と広葉樹３分類群（ヤナギ属・カエデ属・トネリコ属）に同定された。このうち、トネリコ属は根材である。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・ヒノキ科（Cupressaceae）

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、１～10 細胞高。

・カヤ（Torreya nucifera Sieb. et Zucc.）　イチイ科カヤ属

軸方向組織は仮道管のみで構成され、樹脂道および樹脂細胞は認められない。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。仮道管内壁には２本が対をなしたらせん肥厚が認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はトウヒ型～ヒノキ型で、１分野に１～４個。放射組織は単列、１～10 細胞高。

・ヤナギ属（Salix）　ヤナギ科

散孔材で、道管は単独または２～３個が複合して散在し、年輪界付近で径を減少させる。道管は、単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、単列、１～15 細胞高。

・カエデ属（Acer）　カエデ科

散孔材で、道管は単独または２～３個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列～交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、１～３細胞幅、１～30 細胞高。木繊維が木口面において不規則な紋様をなす。

・トネリコ属＜根材＞（Fraxinus <root wood>）　モクセイ科

環孔性を帯びた散孔材で、道管は単独また２～３個が放射方向に複合して散在し、年輪界に向かって径を減少させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、１～２細胞幅、１～20 細胞高。

5-4. 考察

木材は、SD02 下層がヤナギ属、SR01 の 42 層がカヤ、38 層下層がトネリコ属とカエデ属、38 層がヒノキ科とカエデ属であった。ヤナギ属には、河畔等に生育するカワラヤナギ等が含まれており、SD02

下層の時期の周囲に生育していたと考えられる。

一方、SR01についてみると、カヤが出土した42層は、種実分析でアカガシ亜属、ヤブツバキ等の常緑広葉樹が多く検出されている。カヤは確認されていないが、暖温帯性常緑広葉樹林に生育する種類であり、アカガシ亜属やツバキ属と共に生育していたことが推定される。

38層および38層下層では、トネリコ属が根材としての出土であり、出土地点の近くに生育していたと考えられる。また、カエデ属は、種実分析で38層からイロハモミジ類の果実が産出しており、近くに生育していたことが推定される。カエデ属の木材を組織から細分することは難しいが、種実分析の結果を考慮すれば、イロハモミジ類の木材に由来する可能性がある。なお、ヒノキ科については、材や種実で確認されている分類群の構成からみると異質である。ヒノキ科に有用材であるヒノキ、サワラ、アスナロ等が含まれることを考慮すると、人によって利用された木材に由来する可能性がある。

6. 赤色顔料分析

6-1. 試料

分析対象は、赤色顔料-5～7である。時期は赤色顔料-6が弥生時代終末期、残り2点は古代とみられている。

6-2. 分析方法

実体顕微鏡下で、セロハンテープに赤色部分を極少量採取して分析試料とする。分析装置はエネルギー分散型蛍光X線分析装置である（株）堀場製作所製分析顕微鏡 XGT-5000Type Ⅱを使用した。装置の仕様は、X線管が最大50kV・1mAのロジウムターゲット、X線ビーム径が100 μ mまたは10 μ m、検出器は高純度Si検出器(Xerophy)である。検出可能元素はナトリウム～ウランであるが、ナトリウム、マグネシウムといった軽元素は蛍光X線分析装置の性質上、検出感度が悪い。

本分析での測定条件は、50kV、0.82～1.00mA（自動設定による）、ビーム径100 μ m、測定時間500sに設定した。定量分析は、標準試料を用いないファンダメンタル・パラメータ法（FP法）による半定量分析を装置付属ソフトで行う。

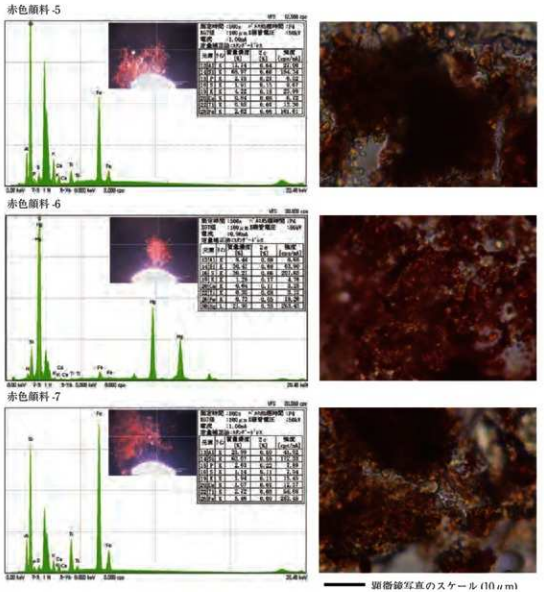
さらに、蛍光X線分析用に採取した試料を観察試料として、生物顕微鏡で赤色顔料の粒子形状を確認する。

6-3. 結果

分析により得られたスペクトルおよびFP法による半定量分析結果を第7表、第60図に示す。赤色顔料-6からは、硫黄（S）、ケイ素（Si）、水銀（Hg）が主に検出され、他にアルミニウム（Al）、カリウム（K）、カルシウム（Ca）、チタン（Ti）、鉄（Fe）が少量検出された。その他2点（赤色顔料5、7）からは、ケイ素（Si）、アルミニウム（Al）等が主に検出され、他にリン（P）、硫黄（S）、カリウム（K）、

試料番号	遺物番号	出土遺構	器種	顔料付着位置	時期	試料採取位置	主な検出元素	顔料種類
赤色顔料-5	286	4区包含層Ⅱ	土師器・皿	内外面	古代	外面	Si,Al (Fe)	ベンガラ
赤色顔料-6	46	2区SH06	弥生土器・鉢	内面	弥生時代終末期	内面	S,Si,Hg	水銀朱
赤色顔料-7	106	2区SD02	土師器・坏	口縁部内面	古代	口縁部内面	Si,Al (Fe)	ベンガラ

第7表　蛍光X線分析結果



第60図　蛍光X線分析結果

カルシウム（Ca）、チタン（Ti）、鉄（Fe）等が検出された。また、生物顕微鏡観察により得られた画像も図に示したが、いずれの試料においても、赤色パイプ状の粒子は観察されなかった。

6-4. 考察

赤色顔料の代表的なものとしては、朱（水銀朱）とベンガラが挙げられる。水銀朱は硫化水銀（HgS）で、鉱物としては辰砂と呼ばれ、産出地はある程度限定される。ベンガラは狭義には三酸化二鉄（Fe_2O_3、鉱物名は赤鉄鉱）を指すが、広義には鉄（Ⅲ）の発色に伴う赤色顔料全般を指し（成瀬，2004）、広範な地域で採取可能である。また、ベンガラは直径約1μmのパイプ状の粒子形状からなるものも多く報告されている。このパイプ状の粒子形状は鉄バクテリア起源であると判明しており（岡田，1997）、含水水酸化鉄を焼いて得た赤鉄鉱がこのような形状を示す（成瀬，1998）。鉄バクテリア起源のパイプ状粒子は、湿地などで採集できる。

今回分析した試料のうち、赤色顔料-6からは水銀と硫黄が多く検出され、水銀朱と判明した。なお、

ヒ素（As）は、水銀（Hg）のピークの一部と重複するため、水銀を多く含む物質からの検出は困難である。アルミニウム（Al）、ケイ素（Si）、カリウム（K）、カルシウム（Ca）、チタン（Ti）、鉄（Fe）といった胎土や土砂中に一般的に含まれる元素を除くと、その他微量元素は特に検出されなかった。残り2点は、いずれもケイ素など土中成分に由来すると考えられる元素は検出されたものの、水銀は検出されなかった。鉄が検出されており、赤い発色は鉄によるものと推定できる。すなわち、顔料としてはベンガラにあたる。なお、鉄の含有量はそれほど多くなく、鉄化合物以外の不純物を多く含んでいる。いずれも褐色で、赤みはそれほど強くない。

引用文献

Erdtman G.,1952.Pollen morphology and plant taxonomy: Angiosperms (An introduction to palynology. I).Almqvist&Wiksells,539p.

Erdtman G.,1957. Pollen and Spore Morphology/Plant Taxonomy: Gymnospermae, Pteriodophyta, Bryophyta (Illustrations) (An Introduction to Palynology. II),147p.

Faegri K. and Iversen Johs.,1989.Textbook of Pollen Analysis.The Blackburn Press,328p.

西本豊弘編.2006. 新弥生時代のはじまり　第1巻弥生時代の新年代．雄山閣.143p.

西本豊弘編.2007. 新弥生時代のはじまり　第2巻縄文時代から弥生時代へ．雄山閣.185p.

藤木利之・小澤智生.2007. 琉球列島産植物花粉図鑑．アクアコーラル企画.155p.

Horst Lange-Bertalot., 2000. ICONOGRAPHIA DIATOMOLOGICA : Annotated diatom micrographs. Witkowski,A.,Horst Lange-Bertalot, Dittmer Metzeltin: Diatom Flora of Marine Coasts Volume 1.　219 plts. 4504 figs. 925 pgs.

Hustedt, F., 1930. Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. under Berucksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz. 7, Leipzig, Part 1, 920p.

Hustedt, F., 1937-1938, Systematische unt okologische Untersuchungen mit die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra. Ⅰ～Ⅲ . Arch. Hydrobiol. Suppl., 15, 131-809p. 1-155p, 274-349p.

Hustedt, F., 1959, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. under　Berucksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz. 7, Leipzig, Part 2, 845p.

Hustedt, F., 1961-1966, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. under Berucksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeres-gebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig, Part 3, 816p.

石川茂雄.1994. 原色日本植物種子写真図鑑．石川茂雄図鑑刊行委員会.328p.

伊東隆夫.1995. 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ：木材研究・資料.31, 京都大学木質科学研究所.81-181.

伊東隆夫.1996. 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ：木材研究・資料.32, 京都大学木質科学研究所.66-176.

伊東隆夫.1997. 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ：木材研究・資料.33, 京都大学木質科学研究所.83-201.

伊東隆夫.1998. 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ：木材研究・資料.34, 京都大学木質科学研究所.30-166.

伊東隆夫.1999. 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ：木材研究・資料.35, 京都大学木質科学研究所.47-216.

近藤繁三.2010. プラント・オパール図譜．北海道大学出版会.387p.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1985, Naviculaceae. Bibliothyca Diatomologica, vol. 9, p. 250.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1986, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa, 2(1) : 876p.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1988, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2(2): 596p.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1990, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2(3):　576p.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1991, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2(4): 437p.

Lowe, R. L., 1974, Environmental requirements and pollution tolerance of fresh-water daitoms. In Environmental Monitaing Ser. EPA-670/4-74-005. Nat. Environmental Res. Center office of Res. Develop. U. S. Environ. Protect. Agency. cincinati. 1-344.

松居俊典・石塚正秀・此松昌彦.2012. 各川県綾川町ボーリングコアの花粉分析による最終氷期以降の古植生．第四紀研究.5135-43.

三好教夫・藤木利之・木村裕子.2011. 日本産花粉図鑑．北海道大学出版会.824p.

望月明彦.1998. 黒耀石の原産地を推定する蛍光X線分析法．石器・土器・装飾品を探る『文化財を探る科学の眼-2』．平尾良光・山岸良二編．国土社.15-20.

中村　純.1967. 花粉分析．古今書院.232p.

中村　純.1974. イネ科花粉について．とくにイネ（Oryza sativa）を中心として．第四紀研究.13,187-193.

中村　純.1980. 日本産花粉の標徴　Ⅰ　Ⅱ（図版）.大阪市立自然史博物館収蔵資料目録　第12,13集.91p.

中山至大・井之口希秀・南谷忠志.2010. 日本植物種子図鑑（2010年改訂版）.東北大学出版会.678p.

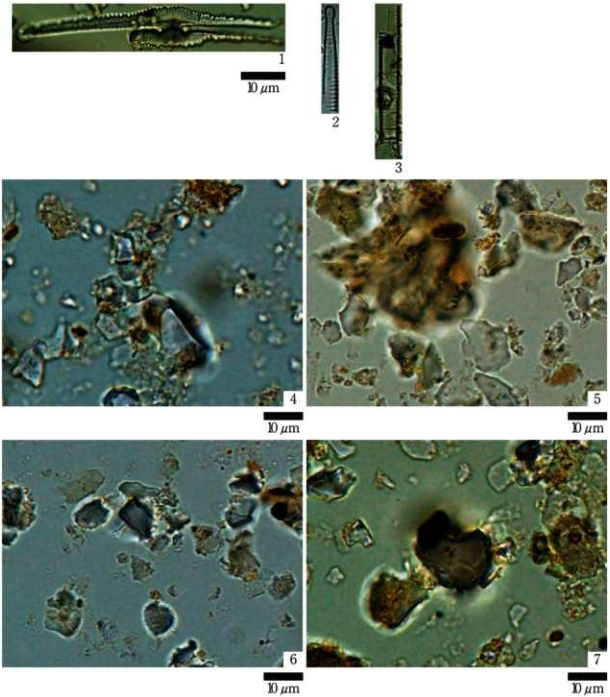
成瀬正和.1998. 縄文時代の赤色顔料Ⅰ―赤彩土器―．考古学ジャーナル.438, ニューサイエンス社.10-14.

成瀬正和.2004. 正倉院宝物に用いられた無機顔料．正倉院紀要.26, 宮内庁正倉院事務所.13-61.

岡田文男.1997. パイプ状ベンガラ粒子の復元．日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集.38-39.

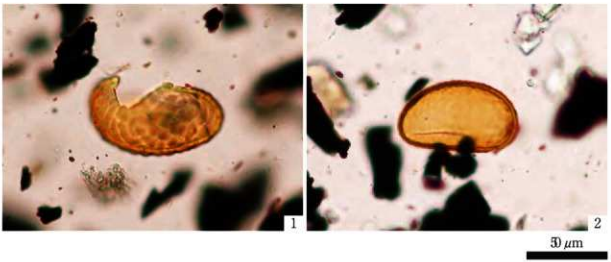
Reimer PJ, Bard E, Bayliss A, Beck JW, Blackwell PG, Bronk Ramsey C, Buck CE, Cheng H, Edwards RL, Friedrich M, Grootes PM, Guilderson TP, Haflidason H, Hajdas I, Hatté C, Heaton TJ, Hoffmann　DL, Hogg AG, Hughen KA, Kaiser KF, Kromer B, Manning SW, Niu

図版1　珪藻化石顕微鏡写真



1．*Cymbella* spp.(3区北壁;8a層)
2．*Fragilaria ulna*　(Nitzsch) Lange-Bertalot(3区北壁;8a層)
3．*Fragilaria*　spp.(3区北壁;8a層)
4．状況写真(3区北壁;8a層)
5．状況写真(3区北壁;17a層)
6．状況写真(3区北壁;18a層)
7．状況写真(4区北壁;20層)

図版2　花粉化石顕微鏡写真



1. 状況写真 シダ類胞子(3区北壁;17a層)
2. 状況写真 シダ類胞子(4区北壁;20層)

M. Reimer RW, Richards　DA, Scott EM, Southon JR, Staff RA, Turney CSM, van der Plicht J. 2013.IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0–50,000 years cal BP. Radiocarbon ,55,1869–1887.

Richter H.G,Grosser D,Heinz I. and Gasson P.E.（編）.2006. 針葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部　久・内海泰弘（日本語版監修）, 海青社 ,70p.［Richter H.G,Grosser D,Heinz I. and Gasson P.E.(2004)IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification］.

林　昭三 .1991. 日本産木材　顕微鏡写真集 . 京都大学木質科学研究所 .

烏地　謙・伊東隆夫 .1982. 図説木材組織 . 地球社 .176p.

烏倉巳三郎 .1973. 日本植物の花粉形態 . 大阪市立自然科学博物館収蔵目録　第5集 .60p.

Stuiver　Minze and Polach A Henry.1977. Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of 14C Data. Radiocarbon , 19, 355-363.

鈴木庸夫・高橋　冬・安延尚文 .2012. ネイチャーウォッチングガイドブック　草木の種子と果実－形態や大きさが一目でわかる植物の種子と果実 632 種－ . 誠文堂新光社 .272p.

Van Landingham, S.L., 1970. Origin of an early non-Marine Diatomaceae Deposit in Broad water County, Montana, U. S. A. Diatomaceae II Nova Hedwigia Heft 31, p. 449-473.

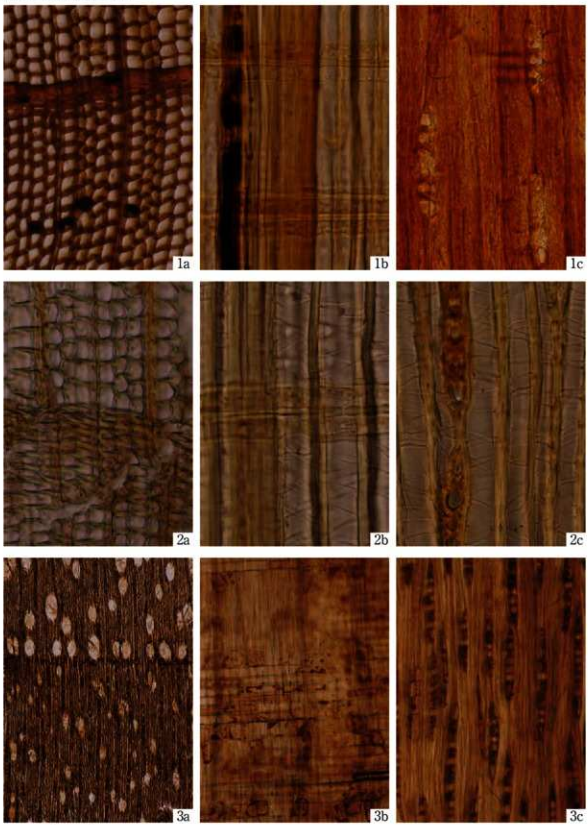
Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編）.1998. 広葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト . 伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修）, 海青社 ,122p.［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989)IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification］.

図版３　大型植物遺体

1．モミ 種子(6区 SR01 38層)
2．カヤ 葉(6区 SR01 38層)
3．ヤマモモ 核(6区 SR01 38層)
4．コナラ節 幼果(6区 SR01 38層下層)
5．シラカシ 果実(6区 SR01 38層)
6．イチイガシ 果実・殻斗(6区 SR01 38層下層)
7．イチイガシ 幼果(6区 SR01 38層下層)
8．コナラ属 果実(6区 SR01 38層下層)
9．スダジイ 果実(6区 SR01 38層下層)
10．エノキ属 核(6区 SR01 42層)
11．クスノキ 種子(6区 SR01 34層)
12．ヒサカキ属 種子(6区 SR01 38層)
13．ヤブツバキ 果実(6区 SR01 42層)
14．ヤブツバキ 種子(6区 SR01 38層)
15．サクラ節 核(6区 SR01 42層)
16．ノイバラ節 偽果(6区 SR01 38層下層)
17．ノイバラ節 果実(6区 SR01 38層下層)
18．アカメガシワ 種子(6区 SR01 38層)
19．カラスザンショウ 種子(6区 SR01 38層)
20．イヌザンショウ 種子(6区 SR01 38層)
21．サンショウ 種子(6区 SR01 38層)
22．イロハモミジ節 果実(6区 SR01 38層)
23．ブドウ属 種子(6区 SR01 38層)
24．ノブドウ 種子(6区 SR01 38層)
25．ウドカズラ 種子(6区 SR01 38層)
26．イイギリ 種子(6区 SR01 38層)
27．クマノミズキ 核(6区 SR01 38層)
28．クサギ 核(6区 SR01 42層)
29．クロバイ 核(6区 SR01 38層)
30．ミクリ属 果実(6区 SR01 38層)
31．ソトイ節 果実(6区 SR01 42層)
32．カナムグラ 核(6区 SR01 38層)
33．ヤナギタケ近似種(6区 SR01 36層)
34．アオツヅラフジ 核(6区 SR01 42層)
35．コウホネ属 種子(6区 SR01 42層)
36．不明A 果実 (6区 SR01 38層)

5mm (6,8,9,11,13,14)
5mm (1,3,5,16,22,36)
5mm (4,7,15,17-21,23-25,27,28,32,34,35)
2mm (2,10,12,26,29-31,33)

図版4　木材顕微鏡写真（1）



1.ヒノキ科(樹種-2;NTK-R6023)
2.カヤ(樹種-6;NTK-R6067)
3.ヤナギ属(樹種-1;NTK-R2011)
a :木口,b:柾目,c:板目

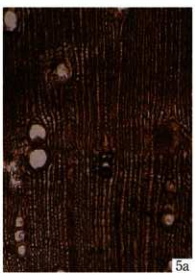
100μm:3a
100μm:1-2a,3b,c
100μm:1-2b,c

図版５　木材顕微鏡写真（２）

4a

4b

4c


5a

5b

5c

4.カエデ属(樹種-4;NTK-R6038)
5.トネリコ属＜梣＞(樹種-3;NTK-R6061)
　a :木口,b:柾目,c:板目

100μm:a
100μm:b,c

第2節　樹種同定

株式会社イビソク

1　試料と方法

分析試料は、SD02出土の板材159である。分析に際して、切片採取前に木取りの確認を行った。生材の樹種同定では、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について、カミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラールで封入して永久プレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡にて40～1000倍で検鏡および写真撮影を行った。同定は、木材構造の特徴および現生標本との対比によって行った。

2　結果

分析の結果、本試料は　モミ属　Abies　マツ科　と同定された。以下に、顕微鏡写真と同定根拠となった特徴を記す。

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は比較的緩やかである。放射柔細胞の分野壁孔は、小型のスギ型で1分野に1～4個存在する。放射柔細胞の壁が厚く、じゅず状末端壁を有する。放射組織は単列の同性放射組織型を示す。

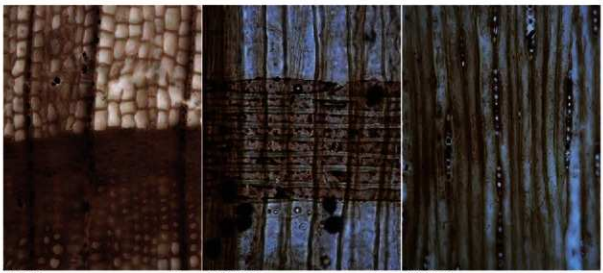
以上の特徴より、モミ属に同定される。日本に自生するモミ属は5種であり、温帯性のモミ以外に亜寒帯性のウラジロモミ、トドマツ、シラビソ、オオシラビソがある。常緑高木で高さ45m、径1.5mに達する。材は保存性が低く軽軟であるが、現在では多用される。

3　所見

同定の結果、本試料はモミ属であった。モミ属は耐朽性・保存性が低いが、軽軟で加工が容易な材である。また、割裂性が大きいため板状の材に加工しやすく、古代より形代や斎串、曲物底板、木簡、建築部材などに利用された。なお、四国ではモミ属の同定例は少ないが、香川県下川津遺跡（古墳時代末期～平安時代初期）では形代や斎串などの祭祀具にはヒノキに次いでモミ属が多く用いられている。また、徳島県の黒谷川宮ノ前遺跡（平安時代）では折敷に用いられた。本試料は用途不明の板材であり、割裂加工が容易なモミ属が選材されたと考えられる。なお、モミ属には温帯性と亜寒帯性の樹種があり、本試料は温帯性のモミと考えられ、当時の遺跡周囲もしくは周辺地域に生育し用いられたと考えられる。

技術協力：（社団）文化財科学研究センター

図版６　樹種同定試料の光学顕微鏡写真



横断面　0.1mm　放射断面　0.1mm　接線断面　0.1mm
モミ属　SD02中層出土板材159

第３節　動物遺存体の同定

広島大学総合博物館　　石丸　恵理子

田中遺跡より出土した動物遺存体の同定結果は下表のとおりである。

番号	調査区	遺構	層位	取上番号	種名	部位	部分	左右	その他	備考
1	6区	SD08			不明　哺乳類（ウシ・ウマなど大型種）	不明破片				
2	6区	SD08			ウシもしくはウマ	遊離歯破片				
3	6区	SD08			ウマ？	遊離歯　臼歯破片				
4	1区	SX01			ウシ	遊離歯　前臼歯破片				
5	1区	SX01			ウシ	遊離歯　下顎後臼歯破片				
6	1区	SX01		B3	ウシ？	遊離歯　臼歯破片				
7	6区	SD08		B-03	ウシもしくはウマ	遊離歯　臼歯破片				
8	6区	SD08			ウシ	遊離歯　臼歯破片				

※「ウシ？」はウシの可能性は高い。「ウシもしくはウマ」はどちらかの可能性があるが、特定できないもの。

第８表　動物遺存体一覧

第5章　まとめ

第1節　遺構の変遷

弥生時代前期以前

当該期の明確な遺構は、調査においては確認されていない。6区第2面のベース層である黄色系シルト層より、縄文時代晩期から弥生時代前期の土器・石器が少量出土した。遺跡周辺での当該期の遺構が展開する可能性を示唆する資料と思われる。出土した遺物には泥質片岩製の大形石棒片1点が含まる。本地域では、原間遺跡SRB07出土の縄文時代中期や晩期の土器に、結晶片岩粒を含む土器片が出土（香川県埋蔵文化財センター2005）し、徳島県吉野川流域からの搬入の可能性が想定されている。第2章で既述したように、讃岐山脈を介しての両地域の関係を物語る資料と考える。

なお、同層から出土した炭化物片2点について、放射性炭素年代測定を実施した。測定結果は、前章に既述したとおり、いずれも弥生時代中期の年代を示しており、調査による考古学的な年代観とは異なるものであった。撹乱等による、混入の可能性が考えられる。

弥生時代後期後半～終末期

当該期には、2区東端部より6区西端部において旧河道SR01が北へ流下し、その西側微高地では竪穴建物3棟（SH01・03・06）が検出された。SR01は土層断面より、複数の流路が重複して流下しており、出土遺物より比較的短期間に流下・埋没したことが想定される。流路の東西の微高地上で、当該期の遺構が検出された。

そのうち西側微高地は、東辺をSR01に、西辺を湊川の段丘崖によって画された、南北に細長い微高地で、当該期の集落は調査区の南北に広く展開するものと考えられる。3棟の竪穴建物は、SH06が弥生時代後期末に、SH03が弥生時代終末期新相～古墳時代前期初頭に、SH01が古墳時代前期前葉にそれぞれ位置付けられ、短期的な小集落であったと考えられる。なお、SH06より出土した弥生土器鉢内面には、多量の水銀朱の付着が分析の結果明らかとなっており、集落内での赤色顔料を用いた祭祀行為が行われていたことを実証するものと考える。

また、SR01について、土地利用や周辺の植生環境を明らかにするため、珪藻、花粉、種実、樹種の各分析・同定を実施した。珪藻、花粉分析については、埋積の進んだ河道低地を利用した水田等の可能性を想定したが、残念ながら花粉や珪藻化石の保存状態が悪く、明らかにすることはできなかった。種実、樹種同定では、沿海地の常緑広葉樹林や、河畔林要素の落葉樹が多く確認され、花粉分析では明らかにできなかった、遺跡周辺で照葉樹を中心とした林地が残存する景観が明らかとなった。また、少数検出された針葉樹は、湊川集水域の森林植生や、利用のための人為的な搬入の可能性が考えられる。

古墳時代中期

当該期も明確な遺構は、調査においては確認されていない。6区東端部の包含層より布留式新相の古式土師器甕・高杯等の土器類とともに、中世の溝SD08周辺より琴柱形石製品2点が出土した。琴柱形石製品は、後述するように土器類と共伴する可能性が高い。琴柱形石製品が集落内より出土する例は、東日本を中心に8例が認められ、いずれも祭祀と結び付けられて理解されている。本遺跡出土資料は、遊離資料であり、本来の出土位置を示す資料ではなく、どのような目的で本遺跡に持ち込まれたものかは明らかにできなかった。周辺に所在した古墳の副葬品が混入した可能性は否定できないが、現状でそうした古墳の所在が確認できない状況では、集落内での祭祀行為に伴う資料の可能性を想定しておきたい。

古代

当該期の遺構は、1区において竪穴建物3（SH02・04・05）、3区において掘立柱建物1（SB02）、6区において柱穴列1（SA03）、3・4区において溝4（SD03～SD06）を検出した。3棟の竪穴建物は、いずれもTK217型式併行期を前後する時期のもので、西側微高地の利用が、当該期に再開されたことを示している。弥生時代の流路SR01上面で検出された掘立柱建物SB02は、出土遺物が乏しく時期を特定することは困難だが、上面包含層出土資料の時期より、遅くとも10世紀代に遡る可能性がある。包含層中からは、緑釉陶器や布目瓦等の遺物が多量に出土しており、弥生時代の流路跡（SR01）は高燥化して、周辺が集落として利用可能となったことを示している。また、SD03・06は周辺の条里型地割の方向に概ね合致して配された溝で、遺跡周辺での地割の施工が11世紀以前に遡ることが明らかとなった。

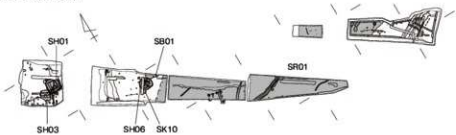
中世

当該期の遺構は、1・2区と6区で検出され、柱穴列2（SA01・02）、土坑3（SK07・11・12）、溝5（SD02・07～10）がある。出土遺物より、大きく11～13世紀と16世紀後半の2時期にわけられる。中世前半期は溝等を中心として遺構密度は低く、当該期の屋敷地の縁辺を確認したと考えられる。讃岸を伴う中世の溝は、県内ではまんのう町大堀城跡SA001（13世紀前半）等がある。

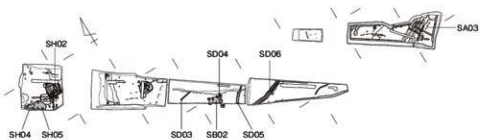
弥生時代の流路SR01上面に堆積した包含層は、混入と考えられる少数の中世後半期に下る資料を除けば、概ね12世紀後半～13世紀前葉の資料を下限とし、周辺屋敷地に伴う耕地として利用されていた可能性が考えられ、当該期までには低地部

縄文時代晩期～弥生時代前期

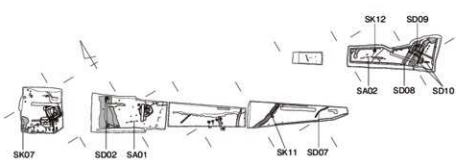
弥生時代後期～古墳時代前期



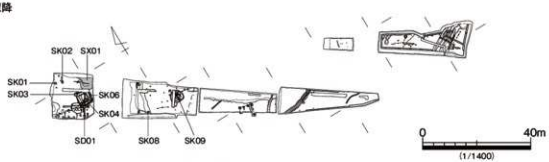
古代



中世



近世以降



第 61 図　遺構変遷図

番号	遺跡名	所在地	出土遺構	遺物番号	計測値（cm・g）				残存	石材	規格	型式	時代	備考	出典
					現存長	最大径	最小径	重量							
1	庵の谷遺跡	東かがわ市引田町黒羽	SH01	195	5.1	1.6	0.6	7.97	欠損	泥質片岩	小形	Ⅰ	弥生時代中期後葉	石刀の可能性	香川県教委2000
2	田中遺跡	東かがわ市白鳥	6区包含層Ⅳ	10	18.7	6.5	4.7	953.04	欠損	泥質片岩	大形	Ⅰ	縄文時代晩期後葉	転用	本書
3	成重遺跡	東かがわ市白鳥	Ⅴ区包含層	第521図2786	9.4	4.4+	1.2+	70.4	欠損	泥質片岩	大形	Ⅰ	弥生時代中期中葉～後期後半	単頭もしくは無頭	香川県教委2005
4	金毘羅山遺跡	東かがわ市水主	Ⅰ区③北側上面精査	1204	4.1	4.3+	1.0+	22.57	欠損	緑色片岩？	大形	ⅠBa	縄文時代晩期～弥生時代中期中葉？	頭部小片	香川県教委2000
5	鴨部・川田遺跡	さぬき市志度町鴨部	SK1030	4504	11.6	4.6	2.8		欠損	泥質片岩	大形	Ⅰ	弥生時代前期中～後葉	基部片	香川県教委2002
6	新田本村遺跡	高松市新田町	SD1006	324	26.6	8.7+	5.0+	1,490	欠損	泥質片岩	大形	ⅠCa？	古代	混入	高松市教委2006
			SD5002	1458	4.5	3.7+	1.8+	53	欠損	点紋緑色片岩	小形	Ⅰ	古代	混入	
7	前田東・中村遺跡	高松市前田東町	D区SR01	414	9.0	4.1+	3.1+	195	欠損	点紋緑色片岩	大形	ⅠBa？	縄文時代後期～弥生時代後期中葉	両頭の可能性もある	香川県教委1995
8	井手東Ⅱ遺跡	高松市伏石町	SD01	第14図	29.0	6.5			欠損	片岩	大形	ⅠBa	縄文時代晩期後葉～弥生時代前期中葉		高松市教委1995
9	東中筋遺跡	高松市桜町	SR01	S1	26.3	6.7	4.6	1,620	欠損	泥質片岩	大形	ⅠCa	縄文時代晩期後葉	敲打痕	高松市教委2004
10	中の池遺跡	丸亀市金蔵町	SD031	Fig023-36	16.9	7.0			欠損	片岩	大形		弥生時代前期中～後葉	敲打痕	丸亀市教委2003
			SD090	Fig035-61		2.7	1.4		欠損	片岩	小形				
			SD203	Fig19-33	10.8	6.5	3.1	342.0	欠損	点紋黒色片岩	大形		弥生時代前期		丸亀市教委2005
			暗褐色土	Fig68-8	8.4	4.7	1.8	133.7	欠損	緑白色泥質片岩			弥生時代前期		
			SD220	Fig47-9	8.3	3.9	2.5	119.5	欠損	緑色片岩			弥生時代前期		丸亀市教委2006
11	龍川五条遺跡	善通寺市原田町	SD50	846	8.3	2.3	1.4	39.0	欠損	泥質片岩	小形	ⅠCa	弥生時代前期中～後葉		香川県教委1996
			SR04	1120	15.1	3.4	2.0	117.7	欠損	泥質片岩	小形	Ⅰ	弥生時代前期中葉	端部欠損	
			SD49	2520	7.6	1.4	1.1	24.09	欠損	点紋緑色片岩	小形精製	Ⅰ	弥生時代前期中葉	端部欠損	香川県教委1998
			SR05	3351	7.8	1.7+	1.3+	24.20	欠損	泥質片岩	小形粗製	Ⅰ？	弥生時代前期中葉	端部欠損	
			SR06	3463	9.6	4.2	2.2	141.83	欠損	黒色片岩	小形	ⅡCb	弥生時代前期中葉～11世紀代		
12	旧練兵場遺跡	善通寺市仙遊町	F区SR01	2333	11.4	5.8	4.2	419.02	欠損	泥質片岩	大形	ⅠCa	弥生時代前期前半	敲打痕	香川県教委2011
			SH3001	第24図9	35.2	7.0	4.95	2006.0	欠損	泥質片岩	大形	ⅠCa	弥生時代中期後半	敲打痕	香川県教委2013
			SH3007	第729図10	5.5	2.9	1.65	32.16	欠損	泥質片岩	小形	ⅠCa	TK217型式併行	混入	
13	中村遺跡	善通寺市中村町	包含層	第29図	36.0	12.5+	8.0+	5,318	欠損	点紋緑色片岩	大形	ⅠBa	縄文時代後期初頭	両頭の可能性もある	香川県教委1987
14	西白方瓦谷遺跡	仲多度郡多度津町西白方	SX01	578	10.7	1.8	1.08	32.1	完存	泥質片岩	小形精製	ⅠCa	弥生時代終末期	混入	香川県教委2012
15	一の谷遺跡群	観音寺市古川町ほか	SX314	第178図2	16.1	5.7	3.0	47.6	欠損	泥質片岩	大形	ⅠBa	弥生時代前期後葉	両頭の可能性もある	香川県教委1990

第9表　香川県内出土石棒一覧

分の堆積は概ね終焉していた可能性が高い。おそらくは湊川河床の下刻による段丘の形成により、段丘上への土砂の供給量が減少し、削奪環境へ変化したことがその主な要因と考えられる。

なお、SD02や包含層から出土した多数の土錘や、6区SD08から出土したウシの遊離歯からは、臨海部の村落に暮らした遺跡周辺の人々が、農業とともに漁労にも携わり、生計の糧を得ていたことを示しているものと考える。

近世

当該期の遺構は、1区を中心に検出した。柱穴や土坑7（SK01～04・06・08・09）、溝1（SD01）、性格不明遺構1（SX01）が検出された。建物遺構は確認されなかったが、1区が屋敷地として利用されていたと考えられる。出土した遺物より遺構の時期は、近世後半期に位置付けられるが、より遡る時期の遺物も含まれており、既述した中世末の遺構の所在も含めて、中世末より継続して屋敷地として利用されていた可能性も考えられる。

第2節　香川県内出土の石棒について

1　はじめに

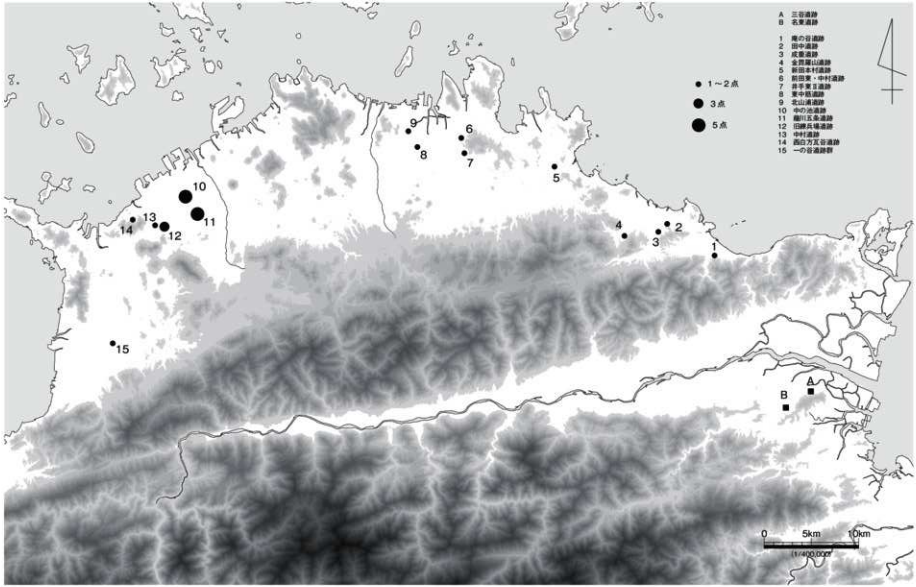
6区第2面のベース層である黄色系シルト層より、泥質片岩製の石棒片1点が出土した。同層中より出土した遺物より、縄文時代晩期後葉～弥生時代前期前葉の資料と考えられる。頭部を欠くため、型式は不明だが、長径約6.5cmの断面楕円形の石材を利用し、器表面には凹凸が顕著に認められる大形の粗製品である。

以下では、香川県内の資料の集成をおこない、当遺跡出土石棒の位置付けについて、若干の考察を加えることとしたい。

2　香川県内の資料

香川県内で石棒とされる資料は、15遺跡から26点の出土が確認されている(註1)。2000年の中村豊の集成（中村2000）では、県内出土資料として3遺跡3点が掲載されており、以後の調査の進展により飛躍的に増加したことがわかる。

その分布は、第62図に示したように、東讃地域（1～4）、



第 62 図　石棒出土遺跡分布（国土地理院の電子地区（数値地図 2500）を 6.3% に縮小し一部改変して掲載）

出土遺構	出土石器点数	打製石斧		磨製石斧		石皿		叩き石		石錘	
		出土点数	結晶片岩製品	出土点数	結晶片岩製品	出土点数	結晶片岩製品	出土点数	結晶片岩製品	出土点数	結晶片岩製品
SR9501 X層	49	20	1	2	1	0	0	1	1	0	0
SR9507 Ⅲ層	16	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0
SR9507 Ⅳ層	5	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
SR9507 Ⅴ層	4	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
SR9507 Ⅵ層	6	2	0	0	0	2	0	1	0	0	0
SR9507 Ⅶ層	16	6	0	0	0	1	0	0	0	0	0
SR9507 Ⅷ層	3	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
E-8・9 深掘りトレンチⅡ層	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
F-10 サブトレンチ	3	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
SR9503 Ⅱ層	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
SR8604 Ⅳ層	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
SR8604 Ⅴ層下部・Ⅵ層上部	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
SR8604 Ⅷ層	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
SR8604 Ⅸ層	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
SR8604 X層	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
SR8601 Ⅱ層	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
SR8601 Ⅲ層	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
SR8601 Ⅳ層	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
SR8601 Ⅴ層	13	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0
SR8601 Ⅵ層	2	1	0	0	0	1	1	0	0	0	0
D-14 下層	19	1	0	1	1	8	0	0	0	0	0
SR8602E-15S・F-15W Ⅰ層	7	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
E-15SR8602 Ⅱ層	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
SR8602E-15S・F-15W Ⅲ層	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
SR8602E-15S・F-15W Ⅴ層	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
SR8602E-15S・F-15W Ⅵ層	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
SR8602E・F-15・16 Ⅱ層	4	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
SR8602E・F-15・16 Ⅲ層	3	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
SR8602E・F-15・16 Ⅳ層	9	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
SR8602E・F-15・16 Ⅵ層	12	1	0	0	0	0	0	1	1	0	0
SR8602E・F-15・16 Ⅶ層	3	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0
SR8602E・F-15・16 Ⅷ層	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
SR8602E・F-15・16 Ⅸ層上部	4	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
SR8602E-F-15-16 Ⅸ層（下層Ⅰ）	6	1	0	0	0	2	0	0	0	0	0
SR8602E-F-15-16 X層（下層Ⅱ）	10	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
SR8602E-F-15-16 X層（下層Ⅳ）	24	5	0	0	0	14	0	0	0	0	0
SR8603 Ⅱ層	10	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0
SR8603 Ⅲ層	3	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
SR8603 Ⅳ層	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
B・C-18 包含層	10	2	0	1	1	1	0	0	0	0	0
17 列～22 列包含層Ⅰ層	35	3	0	1	0	11	0	0	0	0	0
17 列～22 列包含層Ⅱ層	112	14	0	2	1	10	0	1	1	0	0
17 列～22 列撹乱不明	17	0	0	1	0	0	0	0	0	1	1
E-20 包含層Ⅰ層	9	2	0	0	0	3	0	0	0	0	0
E-20 包含層Ⅱ層	27	6	0	0	0	7	0	0	0	0	0
E-20 包含層Ⅲ層	19	4	0	0	0	1	0	0	0	0	0
E-20 包含層Ⅳ層	27	7	0	0	0	2	0	0	0	2	0
SR8606 河川内堆積土	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
SR8606 下層	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	524	104	1（1%）	9	4（44%）	67	1（1.5%）	4	3（75%）	3	1（33.3%）

第10表　永井遺跡における結晶片岩製石器の出土組成

鴨部川流域（5）、高松平野北部（6～9）、丸亀平野北西部（10～14）、西讃地域（15）の概ね県内5地域にまとまり、鴨部・川田遺跡と一の谷遺跡を除いて、いずれも海浜部に近い平野部に位置する集落遺跡である点で共通する。図に示されるように、平野奥部の地域での石棒の不在は明瞭で、その分布には明瞭な飛行性を認めることができる。現状での分布の偏在が、今後の調査の進展によりどの程度解消されるのかは不詳だが、すべての集落に石棒が搬入されていた可能性は低いのではなかろうか。例えば石棒分布域に隣接し、縄文時代晩期から弥生時代前期初頭の木製農具類がまとまって出土した遺跡として著名な高松市林・坊城遺跡や、前期中～後葉の土坑や溝、自然河川が検出された同市空港跡地遺跡では、複数次にわたる調査においても、これまで石棒は1点の出土も報告されていない。集落内における調査地の位置関係や後世の削平等による影響等、一概に判断することはできないが、同一平野部内の小地域集団単位での石棒祭祀受容の有無や、近隣の集落から人々が集まり、中核的な集落で石棒祭祀が実践されていた可能性等が想定されよう。

また、現状では大半の遺跡で、1遺跡からの出土数は1点のみである。しかし、丸亀平野西部の遺跡群では、調査面積等の問題もあり単純に比較はできないが、3～5点と他の地域の遺跡にはない多量の保有が認められる。本地域の集団が石棒祭祀に積極的に関与した可能性とともに、集中保有と周辺集落への分配といった流通の結節点となる集団でもあった可能性も考えられる。

時期的には、明らかな混入と考えられる資料も多いが、大きく縄文時代後期（前田東・中村、中村）と、晩期から弥生時代前期（本遺跡、東中筋、井手東Ⅱ、中の池、龍川五条Ⅰ、旧練

遺跡名	石器総数	片岩製石器数	磨製石庖丁	打製石庖丁	片刃石斧	両刃石斧	磨製石斧	打製石斧	磨製石鑿	石錘	スクレイパー	石棒	石剣	磨製石錘	円盤状石製品	砥石率	石錘	敲石	磨石	凹石	不明
熊部・川田遺跡	1,404	153（109%）	35	16	80	5			1	6	2		1		1			1		1	4
林・坊城遺跡	100	5（5%）			2		1	1											1		
下川津遺跡	63	5（79%）	1	1										1		1				1	
中の池遺跡	640	50（78%）	10		15	5	9		1			5	1			1	1	1	1		1
龍川五条遺跡	415	43（104%）	10		36	4			2		1	6	1			3					1
計	2,622	256（98%）																			

第11表　縄文時代晩期～弥生時代前期の結晶片岩製石器の占有率と器種組成

兵場Ⅱ、一の谷）の大きく2時期のものが認められる。

以下では、縄文時代晩期から弥生時代前期の石棒資料について、検討をおこなうが、混入資料についても、やや強引ながらも時期を推定して、考察に加えることとしたい。

3　石材と加工

次に、石棒に利用された石材についてみてみよう。本県から出土した石棒は、そのすべてが三波川帯の広域変成帯である結晶片岩を使用している[注2]。結晶片岩には、変成作用を受ける前の原岩の種類や、変成により生成された含有鉱物の種類により、様々な分類がなされている。中村は、「考古学的に意味のある分類」として、原岩の種類により塩基性片岩等の4種に大別し、含有鉱物によりさらに細分する分類案を提示している（中村2012）。基本的には、中村の分類案を支持するが、名称については中や煩雑さを避けて、中村の「藍閃石－塩基性片岩」を「青色片岩」、「緑色の塩基性片岩」を「緑色片岩」、紅簾石を多く含む珪質片岩を「紅簾片岩」などのように、呼び替えて使用したい。

第9表に示したように、本県から出土した石棒は、泥質片岩を主体として、緑色片岩や珪質片岩が利用されている[注3]。本県にあっては搬入品であることには間違いないが、いずれも三波川帯のなかでは広く産出する石材であり、理化学的な分析に拠らなければ、細かな産地を特定することは不可能である。

隣接する徳島県では、徳島市三谷遺跡と同名東遺跡で未成品が出土しており、石棒製作に関連した遺跡の可能性が指摘されている（中村2001）。しかし、中村も指摘するように、「三波川帯の無数の遺跡で無秩序に製作されたという考え方は賢明ではない」が、両遺跡以外の地域での生産の可能性を否定することもまたできない（中村2001）。ここでは地理的な要因を考慮して、徳島県吉野川流域の遺跡から搬入されたとするにとどめておきたい。

4　製作技術

既述したように、石棒の素材としては、泥質片岩を主体として、緑色片岩や珪質片岩が利用されており、いずれも片理が発達し、薄く板状に割れる特性を有する。この性質を利用して、石棒の製作がなされるのだが、その工程については、三谷遺跡や名東遺跡より出土した未成品資料をもとに、中村により復元がなされている（中村2001）。それによると、厚さ10cm程度の板状素材を分割して、方柱状の素材を作成（第一工程）し、その稜線部分を中心に剥離を加えて横断面が多角形状を呈するように加工（第二工程）し、さらに全面に敲打を加えて形を整え（第三工程）、最後に研磨を加えて（第四工程）完成に至る。また、同遺跡からは完成品も多数出土しており、未成品が流通した可能性は否定できないが、製作地で完成品にまで仕上げた製品が流通したことも事実であろう。

さて、近畿地方北部の兵庫県見蔵岡遺跡、あるいは岐阜県塩屋金清神社遺跡では、柱状節理の発達した流紋岩や安山岩等の火成岩を利用した石棒が製作されている（大下2001・林2007）。前者は縄文時代中期末から後期初頭、後者は後期前葉にそれぞれ位置付けられるとされる。こうした原石の段階で方柱状の素材が得られる地域では、上述した第一工程が省略され、第二工程より作業が開始されるが、基本的な製作技術に大差はなく、石棒製作に特化した特殊な技術が用いられた形跡もどうやらなさそうである。また、時期はそれぞれ異なるものの、いずれも素材産地に近接した場所に営まれている点も共通する。

以上のように、石材の相違や時代、地域を超越して、その製作技術は概ね共通することがわかった。ここで注意しておかなければならないこととして、柱状節理の発達した火成岩は、香川県下では瀬戸内火山岩類の分布域で容易に入手することが可能な点である。つまり、石棒製作が可能な地域であるにもかかわらず、現状では瀬戸内火山岩類を用いた石棒は1点も出土しておらず、すべて搬入品で賄っている。本地域の火山岩類は、石棒の素材としての資格を何らかの理由で欠いていたのであろう。本地域では、結晶片岩と関係を取り結ぶことによってはじめて、石棒に呪術的な機能と象徴的な意味が付与されたと考えられ、外部より搬入される祭器である必要があったのである。

5　本地域における結晶片岩製石器利用の推移

ここで視点を変えて、縄文時代の石材利用についてみてみたい。本地域において、縄文時代の遺跡のまとまった調査報告例はそれほど多くはない。ここでは、善通寺市永井遺跡（香川県教育委員会1990b）での石材利用についてみてみることとしよう。

第10表に、縄文時代後期を下限とする遺構・包含層出土の報告書掲載の石器のうち、剥片や楔形石器等を除いた定型石器について遺構別に、さらに結晶片岩製石器は打製石斧や磨製石斧、石皿、叩き石、石錘にみられることから、これら器種につ

いては、器種別にそれぞれ集計した。遺構や器種毎に差が認められるが、掲載された縄文時代後期以前の石器524点のうち、結晶片岩製石器は僅かに10点（1.90％）に過ぎない。大半は、サヌカイト等の瀬戸内火山岩類や和泉層群の堆積岩類、領家帯の深成岩類等の、いずれも遺跡から半径15km圏内で入手可能な石材で製作された石器が使用されている。不掲載資料の内容や永井遺跡での様相を他の遺跡に普遍化できるか等課題はあるものの、概ね全体的な傾向を示しているものとして、以下論を進めよう。永井遺跡にみられた縄文時代後期以前の石器は、基本的に自給可能な石材で製作されており、遠隔地からの搬入行為は低調であったと結論付けることができよう。

こうした状況に大きな変化が生じるのは、縄文時代晩期以降である。加工斧や石庖丁等を新たに組成に加え、第11表[註4]に示したような結晶片岩製石器が多量に搬入・使用される。遺跡により、結晶片岩製石器の組成に異なりを見せるものの、片岩製石器の占有率は約5～10.9％と、先に見た永井遺跡の5～9倍を占めるまでに増加する。また、片岩製石器製は、在地産の火成岩製によっても各々同器種が製作されていることをみれば、石棒祭祀の本地域への導入は、片岩製石器製作集団による市場の開拓のための戦略的意図さえ感じさせるものがある[註5]。本地域の弥生時代人が、どのような論理で多様な石材による石器を装備する必要があったのかは、残念ながら明確な解答を示せないが、石材の種類による「使い分け」といったことがなされていたのかもしれない。

6　型式分類

石棒の分類については、中村の分類案（中村2001）に依拠しつつ、これに直径5cmを基準（後藤1987）とする大きさの区分を加えて細別を行った。結果は、第9表のとおりである。

まず大形石棒では、断面形が楕円形で頭部を段によって表現するⅠBa類[註6]が多数を占め、次いで無頭で端部の丸いⅠCa類や、断面形が長方形を呈するⅡ類がある。これら大形石棒は、中の池遺跡や旧練兵場遺跡FSR01、一の谷遺跡群SX314出土資料より、弥生時代前期中葉までは使用されていたと考えられる。

製作地である三谷・名東遺跡では、ⅠCa類が多数を占め、ⅠBa・ⅠBb類が少数出土しており、Ⅱ類は出土していない。こうした点は、三谷・名東遺跡での石棒製作が縄文時代晩期末から弥生時代前期初頭に限られ、時期的にややずれる点と、後述する小形石棒の出土ともあわせて、三谷・名東遺跡以外あるいは同遺跡内での地点を違えた場所での製作の可能性を示唆するものといえよう。また、B類の有頭式は無頭式とともに前期中～後葉までに製作・使用されており、それは中の池遺跡SD083のⅠBa類を模した石棒形木製品（丸亀市教育委員会2004）の出土からも実証される。

次に小形石棒であるが、現在6遺跡11点の出土が確認できる。Ⅰ類が多数を占め、Ⅱ類は龍川五条遺跡SR06出土の1点のみである。頭部形状は基本的に無頭で、Ⅰ類のものはCa類、Ⅱ類のものはCb類となるが、これは断面形状に規定された要因が大きい。全面を丁寧に磨いて仕上げた精製品が多数を占める（龍川五条遺跡SR06、同SD50、旧練兵場遺跡SH3007出土資料等）が、自然面を多く残した粗製品に近い資料（龍川五条遺跡SR04出土資料）も認められる。時期が特定されるものは、弥生時代前期中葉の資料があり、当該時期までには出現していたと考えられる。以後、前期後葉まで継続して使用されたと考えられるが、中期にまで使用が継続するかどうかは、いま少し良好な資料の増加が必要であろう。現状では、前期後葉を画期として急速に衰退したとするのが妥当と思われる。

さて、小形石棒については、寺前直人により近畿から東海地方の動向が整理され、前期後葉以降に近畿地方から東海地方全体での主体的な使用が指摘されている（寺前2007）。本地域での小形石棒の出土は、寺前の指摘した分布エリアをより西へ延伸させるものであり、さらに本地域においては、小形石棒とともに大形石棒も共伴して使用されている。この点を踏まえるなら、本地域の小形石棒は大形石棒と共に、徳島県吉野川流域の遺跡で製作され、搬入されたと考えるのが妥当であろう。大形石棒は本地域での縄文時代晩期からの伝統の上に継続されたものであり、小形石棒は縄文時代晩期後葉～弥生時代前期前葉に東からの影響により新たに祭祀体系に組み入れられたものと考えられ、既述した中の池遺跡での石棒形木製品をも加えて、本地域ではそうした重層的な祭祀儀礼が成立していたと考えられる[註7]。

7　石棒祭祀について

祭祀儀礼の復元は、文字史料を欠く時代にあっては、考古学がもっとも不得手とする研究分野である。以下、若干の見通しを述べて、小稿を閉じることとしたい。

さて、本地域の石棒は、そのほとんどが破砕された状態で出土している。先学も多く指摘しているように、儀礼終了後は破砕・分割されたと考えられ、こうした破砕行為も儀礼に含まれていたと考えられている。そうした儀礼行為の具体的内容について光本順は、津島岡大遺跡第23次調査河道3環周辺から弥生土器壺とともに出土した大形石棒を、取水口祭祀に用いた可能性を指摘（光本2006）する。本地域でも、中の池遺跡出土資料を中心に、溝や河川からの出土例は多く、儀礼行為と出土地点が近接していたことを前提とするなら、水辺の祭祀としての石棒の使用も想定可能だろう。また、出土した多くの石棒に敲打痕が認められる。こうした敲打痕も儀礼との関係が指摘され（戸田1997・中島2011）、小林青樹は「丸い形状と凹むという特徴から…石皿同様に女性の象徴であり、男根の象徴でありながら対極的である女性的な意味を付加し、同居させている」として、そこに山田康弘が指摘（山田1994）した「儀礼的生殖行為」

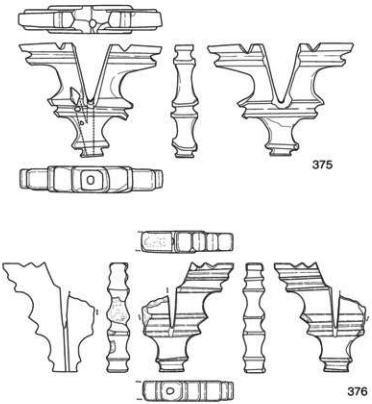
の実践をみる（小林 2011）。石棒の儀礼が生殖行為と関係し、溝や河川からもっぱら出土していることを踏まえるなら、その儀礼の目的が用水を利用した水稲栽培に関係するものであった可能性は高いと考えられよう。

こうした石棒の破砕行為は、小形石棒においても認められ、さすがに敲打痕は認められないが、西白方瓦谷遺跡出土資料は中央部が剥離して浅く凹んでおり、象徴的な行為は引き継がれたと考えられる。なお、破砕後意図的に埋納したという形跡は認められず、その点で石棒祭祀衰退後に導入された、青銅祭器とは大きく相違する点として指摘でき、縄文的な祭祀具の取り扱われ方を引きずっているともみられる。

縄文時代晩期における大形石棒の復活について小林は、「西方の弥生文化系要素を「接合」しつつも、一方、東方の複雑な様相の中からも選択的に外来要素を導入して「接合」し、一時的に新たな祭祀形態を形成」したものであり、「縄文系と弥生系の文化の融合がはじまった集団」による「祭祀強化」策とする（小林 2000）。

石棒は、上記したように、縄文時代晩期以降に出現した多様な結晶片岩製石器の一つとして、本地域に搬入された。自らの集団が製作した器物ではないが、石棒が呪具である以上、それを共有する集団間にあっては、精神的なアイデンティティを表示する道具として利用されたことは十分想像される。集団間の紐帯を強く示唆する道具であったが、既述したように三波川帯産石棒の広域的な分布とは対照的に本地域にあっては分布は畿行的で、面的な拡がりを未だ達成していない可能性も想定され、地域間での石棒保有数にも顕著な相違が認められる。

とはいえ、石棒祭祀の導入は、小林の指摘するように、儀礼的行為を通じた集団間の紐帯を強めたことが想像される。雛波洋三は、菱環鈕式と外縁付鈕1式銅鐸の分布から、銅鐸の「古い型式が製作の中心地であったと考えられる畿内の特定地域に集中するような傾向は、今のところみられない」とし、その背景に「銅鐸祭祀成立以前に、銅鐸祭祀に継承されていくなんらかの共通の祭祀によって、…まとまった地域圏をすでに形成していた可能性」を考える（雛波 2000）。弥生時代前期後葉の小形石棒に象徴される儀礼行為を共有するエリアの広がりは、雛波が指摘する「まとまった地域圏」に概ね合致する可能性があるのではなかろうか。



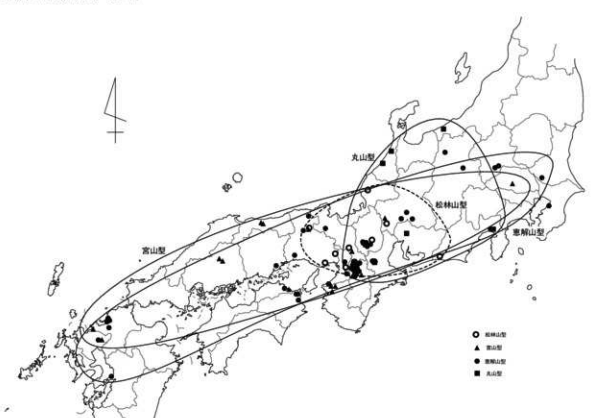
第 63 図　琴柱形石製品実測図

第3節　琴柱形石製品の基礎的研究

1　はじめに

本文中にも記載したが、6区 SD08 及び側溝掘り下げ中に、琴柱形石製品2点が出土した。本県では、これまでにさぬき市津田町羽立峠西古墳より1点が出土しており、2遺跡3点の出土となった[註8]。また、徳島県吉野川下流地域で3基の古墳より6点が出土しており、本遺跡出土例を含め、後述するように四国北東部地域にややまとまった分布を示す。

本遺跡から出土した琴柱形石製品は、形態的にはいわゆる宮山型[註9]に分類されるが、上端中央がV字状に深く刳り込まれ、この点で恵解山型の影響を受けたものと考える。管見による限り類例に乏しい。類似した資料に、岐阜県西野古墳出土資料があるが、西野古墳例は丸山型に近く、本例とはやや異なる。既述したように、本遺跡出土資料は、中世の遺構からの混入資料として出土したものであり、時間的な位置付けも困難である。以下、全国の琴柱形石製品について、研究史をふまえた上で分類案を提示し、本遺跡出土資料をその中に位置付け、適切な評価を与えることとする。しかしながら、既出の資料をすべて実見できたわけではなく、多くは報告書や他の研究者の観察記録



第64図　琴柱形石製品分布図

を頼りとした記述となる。その点で、小稿は予察的な研究であり、多くは今後の課題としておきたい。

2　分類

亀井は琴柱形石製品を集成して詳細に検討し、分類、用途、年代等について、その後の研究の基礎となる成果を提示した。まず、川柳・松林山・恵解山・丸山・宮山・石上・茶臼山・本村の8型式に分類した。そして、恵解山型は松林山型から派生したもの、丸山型は「石上型の一部分を省略、誇張して」成立したもの、宮山型は「丸山型の縦軸の小さい突起が省略され」たものと系譜関係を整理し、つまり松林山型、石上型をそれぞれ祖型として、恵解山型と丸山・宮山型がそれぞれ成立するとした。

また、その用途については、盲孔[注10]が穿たれた松林山型や石上型は、玉杖やその小型化、形式化したものとし、貫通孔のある恵解山型や丸山型、宮山型は、護符や宝器的な性格を認めつつも、頸飾の可能性も想定する。

北條芳隆は、雪野山古墳出土資料等の新出資料の追加により、亀井の分類案を再検討し、独自の変遷案を提示した（北條1996）。まず、松林山型を「標識となった資料がかならずしも典型例ではないこと」から「雪野山類型」と改め、「角状突起の反りによって代表される表裏の区分表示の有無」を基準に、雪野山古墳出土資料→松林山古墳出土資料→城の山古墳出土資料といった3段階の型式変化を明らかにした。また、亀井の指摘と同様に、松林山型と恵解山型との間に親縁性を認め、雪野山類型の城の山古墳出土資料と恵解山類型の富雄丸山古墳出土資料の間に、「なお1段階程度の空白」を認めながらも、「形態上の類似は他のいかなる資料群にもまして高い」ことから、雪野山・恵解山類型を設定して、「琴柱形石製品全体の形式的変遷のなかで、これら2類型が本流を形成した」と評価した。その上で、石上型、丸山型、宮山型については、亀井の解釈とはやや異なり、雪野山・恵解山類型から派生して成立したものと捉える。

確かに北條の指摘するように、丸山型と宮山型との間には、共通する特徴が認められるものの、形態的な差異はなお大きなものがあるように思われる。

松林山型については、北條の示した視点を継承しつつも、北山峰生により再検討がなされている（北山2004）。北山は、縦軸における沈線の有無により大別し、さらに横軸の簡略化と沈線の省力化を指標に、松林山型を5類型に分類し、それぞれの変遷案を提示した。

琴柱形石製品は、恵解山型を中心に各々の型式内で属性の変

古墳（遺跡）名	所在地	遺跡種別	墳形	規模（m）	埋葬施設・出土遺構	型式	分類案	数量	石材	副葬品（供伴遺物）	備考	出典
下河原崎谷中台遺跡	茨城県つくば市下河原崎	集落	−		土坑	恵解山	A-1	1		土器	完形	茨城県教育財団 2007
七廻古墳	千葉県千葉市中央区生実町北生実	古墳	円		木棺直葬					銅鏡、鉄刀、鉄剣、鉄鉾、鉄鎌、鉄斧、銅		
剣崎天神山古墳	群馬県高崎市剣崎町	古墳	円	30	粘土槨？	恵解山	B	2		滑石製模造品（鏡・杵・坩・槽・手斧・鎌・刀子）	完形	
茶臼山古墳	群馬県高崎市					恵解山						
女堀Ⅱ遺跡	埼玉県川越市鯨井	集落	−		土坑	宮山		1		臼玉、剣形滑石製模造品	欠損	埼玉県埋文事業団 1987
鳥羽山洞穴遺跡	長野県上田市腰越	埋葬	−		岩陰	恵解山	B	2		馬具、鉄剣、鹿角装刀子、鉄鏃、鹿角製鳴鏑、鉄斧、鉋、鑿、鹿角製紡錘車、管玉、臼玉、ガラス玉、石釧、須恵器、土師器	完存	
川柳将軍塚古墳	長野県長野市篠ノ井石川	古墳	方円	93	竪穴式石室	川柳		2		銅鏡、銅鏃、筒形銅器、勾玉、管玉、小玉、筒形石製品		
東坂古墳	静岡県富士市増川	古墳	方円	60	粘土床	恵解山	A-1	2		銅鏡、鉄刀、鉄剣、鉄鏃、石釧、勾玉、管玉、臼玉、小玉	完存	
						丸山	B	1			完存	
松林山古墳	静岡県磐田市新貝	古墳	方円	107	竪穴式石室	松林山	A-1	1	碧玉	銅鏡、短甲、刀、剣、刀子、鉾、鉄鏃、銅鏃、斧、鎌、巴形銅器、勾玉、管玉、石釧、貝釧他	完存	
笛吹田遺跡	新潟県糸魚川市東寺町	集落（生産）			溝	丸山	A	1	蛇紋岩		完存	糸魚川市教委 2007
					竪穴建物	丸山	A	1	蛇紋岩		欠損	
雨の宮1号墳	石川県鹿島郡中能登町	古墳	方方	64	粘土槨	恵解山		1			完存	
戸水C遺跡	石川県金沢市戸水町	集落	−		溝	丸山	B	1		管玉、土器	欠損	石川県埋文 1986
畝田・寺中遺跡	石川県金沢市寺中町	集落（生産）			溝	松林山？		1	緑色凝灰岩		未成品	金沢市 2013
漆町遺跡	石川県小松市漆町	集落（生産）				丸山		1			欠損	石川県埋文 1982
足羽山山頂古墳	福井県福井市足羽山	古墳	円		竪穴式石室	松林山	B	1		銅鏡、管玉	欠損	
白山古墳	岐阜県可児市広見	古墳	円	42	粘土槨			6		銅鏡、刀、管玉、小玉、石釧、石製合子、鍬形石		
西野古墳	岐阜県不破郡垂井町宮代	古墳	円		不明	宮山		1		銅鏡、剣、勾玉、管玉、土師器	完存	
象鼻山1号墳	岐阜県養老郡養老町	古墳	方方	40	木棺直葬	松林山	A-1	3		銅鏡、鉄刀、鉄剣、鉄鏃、土器	完存	養老町教委 1998
											一部欠損	
椀ノ木洞遺跡	岐阜県関市下有知	集落				恵解山					完存	
坊の塚古墳	岐阜県各務原市鵜沼羽場町	古墳	方円	120	竪穴式石室	恵解山	A-2	1		勾玉、管玉、臼玉、滑石製模造品（斧・刀子）	完存	籔下 1991
味鋺古墳群？	愛知県名古屋市北区楠町味鋺	古墳				丸山	B	2	滑石		完存	早野 2006
塚之越遺跡	滋賀県守山市古高町	古墳	方	19	−	恵解山	A-2	1		土器	完存	守山市教委 2005
雪野山古墳	滋賀県東近江市上羽田町	古墳	方円	70	竪穴式石室	松林山	A-1		碧玉		完存	
水口町所在古墳	滋賀県甲賀市水口町	古墳	不明		不明	恵解山		1		管玉		
八重谷古墳	滋賀県蒲生郡竜王町	古墳	不明		不明	恵解山		1		銅鏡、管玉		
安養寺大塚越古墳	滋賀県栗東市安養寺	古墳	方円	75	粘土槨	宮山	B	1		銅鏡、短甲、刀、剣、斧、巴形銅器、勾玉、管玉、臼玉、棗玉	完存	
岩畑遺跡	滋賀県栗東市林	集落			土坑	恵解山	A-1a	1	滑石		欠損	栗東町事業団 1993
真野1号墳	滋賀県大津市真野	古墳	円	20	粘土槨	恵解山	A-1	1		銅鏡、短甲、刀、剣、刀子、斧、槍、勾玉、管玉	一部欠損	大津市教委 2016
久米山6号墳	三重県伊賀市久米町	古墳	円	17	粘土槨	恵解山	A-1	2		銅鏡、直刀、剣、刀子、鏃、斧、鎌、鉋、鉄釧、玉類、有孔円板	完存	伊賀市 2005
石山古墳	三重県伊賀市才良	古墳	方円	120	粘土槨	松林山	B-1	25		短甲、刀、剣、鏃、盾、靭、弓、斧、鉋、鍬、針、勾玉、管玉、臼玉、棗玉、櫛	完存	
						恵解山	A-1・A-2					
						丸山	B				完存	
八ヶ谷古墳第2主体	京都府福知山市前田八ヶ谷	古墳	方	23	箱式石棺	恵解山	A-1	1		勾玉、丸玉、算盤玉、青色ガラス玉、		山城考古研 1983
八ヶ谷古墳第3主体					箱式石棺	恵解山	A-1	3		鏡、刀、刀子、勾玉、管玉、ガラス玉、櫛		
木津川河床遺跡	京都府八幡市八幡焼木	集落？			包含層	宮山		1			欠損	京都府埋文 2007
寺戸大塚古墳	京都府向日市寺戸町	古墳	方円	98	竪穴式石室	松林山	B-3	1		鏡、刀、剣、鏃、銅鏃、斧、鎌、紡錘車、管玉	完存	
瓢箪山古墳	奈良県奈良市佐紀町衛門戸	古墳	方円	96	粘土槨	丸山	B	3		玉類	完存	河上 1995
日葉酢媛命陵	奈良県奈良市山陵町	古墳	方円	207	竪穴式石室	松林山	B-2	2		鏡、管玉、石釧、鍬形石、車輪石、石製斧、石製臼、石製合子、石製高杯、椅子形石製品、貝型石製品、鹿角装刀子形石製品、不明石製品	一部欠損	
三陵墓西塚古墳	奈良県奈良市南之庄町	古墳	円	40	粘土槨	恵解山	A-1	7以上		鉄刀、鉄剣、鉄槍？、鉄鏃、有袋鉄斧、鉄鎌、鉋、鑿、勾玉、管玉、櫛	完存	都祁村教委 1999
古市方形墳	奈良県奈良市古市町	古墳	方		粘土槨	恵解山	B	4		鏡、剣、刀子、斧、鎌、鑿、勾玉、管玉、臼玉、棗玉、ガラス玉	完存	
富雄丸山古墳	奈良県奈良市大和田町丸山	古墳	円	86	粘土槨	松林山	D	1		鏡、銅薄板、銅製有鉤釧、管玉、石製刀子、石製斧、石製鉋、石製鑿、鍬形石、石製合子	完存	奈良県教委 1973a
						恵解山	A-1	3			一部欠損	
							B	1			完存	
						丸山	A・B	6			完存	
石上神宮禁足地	奈良県天理市布留	祭祀	−			石上		1		籠手残片、環頭大刀、鋒身及び柄残欠、鈴、玉類	完存	
豊田町	奈良県天理市豊田町	古墳				石上		1				

第12表　琴柱形石製品出土遺跡一覧（1）

古墳（遺跡）名	所在地	遺跡種別	墳形	規模（m）	埋葬施設・出土遺構	型式	分類案	数量	石材	副葬品（供伴遺物）	備考	出典
赤土山古墳	奈良県天理市櫟本町	古墳	方円	106.5		松林山	D	1		刀子、勾玉、管玉	一部欠損	
萱生千塚内	奈良県天理市朝和	古墳	−			石上		1				
三輪山	奈良県桜井市三輪	祭祀	−			恵解山		1				
						宮山		1				
池ノ内5号墳第3棺	奈良県桜井市池ノ内	古墳	円	16	木棺直葬	恵解山	A-2	4		鉄刀、鉄剣、筒形銅器、滑石製紡錘車、滑石製勾玉、管玉、垂飾具、櫛	完存	奈良県教委 1973 b
北原古墳	奈良県宇陀市大宇陀野依・平尾	古墳	方	16	木棺直葬	宮山		2		刀、剣、刀子、鎌、斧、鎌、鉋、鍬先、鉄鏃、玉類、櫛	完存	大宇陀町 1986
新沢千塚500号墳主槨	奈良県橿原市一町	古墳	方円	62	粘土槨	丸山	A・B	2		（主槨）勾玉、管玉、丸玉、小玉　（副槨）鏡、八ツ手葉形青銅鏡、短甲、刀、剣、刀子、槍、鏃、　銅鏃、斧、鎌、鉋、鑿、紡錘車、銅釧、筒形銅器、石釧、鍬形石、車輪石、石製坩、筒形石製品	完存	
鳥の山古墳						宮山						
佐味田宝塚古墳	奈良県北葛城郡河合町佐味田	古墳	方円	111	竪穴式石室	恵解山	A-1	1		鏡、刀子、銅鏃、鎌、鑿、巴形銅器、勾玉、管玉、石製剣、鍬形石、石釧、石製合子、其の他	一部欠損	
大輪田	奈良県北葛城郡河合町大輪田？		−			丸山	A	1		石製刀子、石製合子等		
讃岐神社境内古墳	奈良県北葛城郡広陵町三吉	古墳	円？			恵解山	A-1	7		鏡、刀、勾玉、管玉、臼玉、棗玉、石製坩、筒形石製品、有孔石製品	完存	
王寺町	奈良県北葛城郡王寺町		−			石上		1				
室宮山古墳	奈良県御所市室	古墳	方円	238	竪穴式石室、長持形石棺	宮山		2	滑石	鏡、甲冑、直刀、小刀、剣、銅器片、玉類、石製刀子、石製斧頭、棒状石製品、板状石製品、異形石製品、土師器片	完存	
オサカケ古墳	奈良県御所市柏原	古墳	方円？		粘土槨	恵解山		7～8		鏡、刀、剣、勾玉、管玉、車輪石、石製合子		島本 1938
掖上鑵子塚古墳	奈良県御所市柏原掖上	古墳	方円	150	竪穴式石室	恵解山	A-2	5(?)		金銅製透彫帯金具、金銅製垂飾金具、鉄製垂飾金具		
交野東車塚古墳	大阪府交野市寺南野	古墳	方方	65+	粘土槨	恵解山	A-1・A-2・B	5		銅鏡、勾玉、棗玉、管玉、石釧、臼玉、三角板皮綴襟付短甲、三角板皮綴衝角付冑、鉄刀、鉄剣、巴形銅器、筒形銅器、鏃、鑿、鉋、鉄斧、鎌、手鎌、鹿手刀子、刀子、鋸、鋤、鍬先等	完存	交野市教委 2000
闘鶏山古墳	大阪府高槻市氷室町	古墳	方円	88	竪穴式石室					銅鏡、鍬形石・鉄刀		高槻市教委 2009
七観音古墳	大阪府堺市堺区旭ヶ丘北町	古墳	円	32.5	−	石上		1	碧玉			森 1973
玉手山9号墳	大阪府柏原市旭ケ丘	古墳	方円		竪穴式石室	松林山	A-2	1	碧玉	鉄剣、勾玉	完存	北山 2004
							B-1	1	緑色凝灰岩		一部欠損	
磯山B1号墳	大阪府泉南郡岬町	古墳	−									
丸山古墳（玄英寺古墳）	和歌山県紀の川市貴志川町上野山	古墳	円	25	箱式石棺	宮山		1		短甲、冑、鉄刀、鉄鋌、鉄鉢、勾玉、管玉、丸玉、小玉		和歌山県 1983
八王子山8号墳	和歌山県和歌山市橘谷	古墳	不明		木棺直葬	宮山		2		銅鏡、鉄剣、刀子、瑪瑙勾玉、碧玉製管玉、水晶製丸玉、滑石製小玉	完存	関西大学 1979
城山古墳	和歌山県	古墳	円？	10？	箱式石棺					銅鏡、鉄剣、銅鏃		南部町 1992
坂田遺跡	和歌山県和歌山市坂田	集落			包含層	宮山		1		滑石製勾玉、片岩製有孔円板、土製紡錘車	一部欠損	和歌山県文センタ 2011
城の山古墳	兵庫県朝来市和田山町東谷	古墳	円	36	木棺直葬	松林山	A-1	1		銅鏡、刀、剣、刀子、斧、鉇、勾玉、管玉、石釧、石製合子	完存	
梅田1号墳	兵庫県朝来市和田山町久留引	古墳	円	20	木棺直葬	宮山				銅鏡、大刀、刀子、鉄鏃、鉄鎌、櫛、勾玉、管玉、針	完存	兵庫県教委 2002 b
田和2号墳	兵庫県養父市大屋町夏梅	古墳	円		箱式石棺	恵解山		2		刀子、鉄製棒状品、管玉、人骨	完存	
五反田遺跡	兵庫県豊岡市祥雲寺	集落			包含層	恵解山	A	1			欠損	兵庫県教委 2002 a
万籟山古墳	兵庫県宝塚市長尾山	古墳	方円	64	竪穴式石室	松林山		1		鏡、斧、管玉、石釧、車輪石、十字形石製品	完存	
二本松古墳	兵庫県神戸市兵庫区湊川町	古墳	方円	55	竪穴式石室	松林山	C	1		銅鏡、鉄刀、短剣、刀子、鏃、短冊形鉄斧、袋状鉄斧、鉄鎌、鉋、鉄錘？	一部欠損	
新宮東山2号墳	兵庫県龍野市揖西町新宮	古墳	方	14.5	木棺直葬	恵解山	A-1	2	滑石	鉄刀、刀子、勾玉、管玉、ガラス小玉、臼玉、竪櫛	完存	
東福寺山上古墳	岡山県瀬戸内市邑久町山田庄	古墳	円		竪穴式石室	恵解山	A-1	1		管玉、臼玉、ガラス小玉	欠損	
大将塚古墳	鳥取県倉吉市上神字柴栗	古墳	円	25	箱式石棺	宮山		4		銅鏡、鉄刀、鉄剣、鉄鏃、鉄槍、鉄斧、鍬形遺跡、管玉、臼玉	完存	
夏谷遺跡	鳥取県倉吉市和田	集落			竪穴建物	宮山		1		管玉	破砕	倉吉市教委 1996
畑原開山9号墳	広島県三次市大田幸町畑原	古墳	円	10？	箱式石棺	宮山		2	蛇紋岩	銅鏡、鉄刀、玉		本村 1963
大久保5号墳	広島県三次市西酒屋町	古墳	円	22	割竹形木棺	宮山		2		鉄剣、刀子、不明鉄器、滑石製小玉、土師器	完存	広島県教委 1979
宮尾神社西山古墳	徳島県鳴門市姫田字小森	古墳	円		箱式石棺	宮山		2			完存	
谷口山古墳群内	徳島県鳴門市桧	古墳	不明		箱式石棺？	恵解山	A-1	1		銅鏡、勾玉、管玉		
恵解山2号墳西棺	徳島県徳島市八万町下福万	古墳	円	25	箱式石棺	恵解山	A-2	4		短甲、冑、肩甲、頸甲、剣、管玉、櫛、人骨	完存	徳島県教委 1966
田中遺跡	香川県東かがわ市白鳥	集落			包含層等	宮山		2	滑石		完存	本書
羽立峠西古墳	香川県さぬき市志度町羽立峠	古墳	不明		箱式石棺	恵解山	A-2	1	滑石	銅鏡、短剣、鉄釧、銅釧	完存	
花見2号墳	福岡県古賀市古賀町久保	古墳	円		割竹形木棺	恵解山		2		勾玉、管玉、ガラス玉、滑石臼玉、櫛	完存	古賀町教委 1984
南原5号墳	福岡県古賀市	古墳				恵解山		1				古賀町教委 1989
七夕池古墳	福岡県糟屋郡志免町田富七夕池	古墳	円	29	竪穴式石室	恵解山		2		鏡、刀、鹿手刀子、釧、銅環、勾玉、管玉、臼玉、ガラス小玉、櫛	完存	志免町教委 2001
塚田3号墳	福岡県糸島市二丈深江	古墳	円		竪穴式石室	宮山		1		刀、刀子、櫛	完存	福岡県教委 1982
人丸古墳	福岡県糟屋郡新宮町	古墳	円	20	箱式石棺	恵解山	A-2	2		銅鏡、鉄剣、鉄刀、鉄鏃、刀子、針、臼玉、櫛		新宮町教委 1991

第13表　琴柱形石製品出土遺跡一覧（2）

古墳（墳群）名	所在地	墳形	規模（m）	埋葬施設・出土状態	前方	分割	配置	石材	副葬品（装飾品）	備考	出典
神宿6号墳	遠賀郡岡垣町	前方後円	全長22	竪穴式石室	造出?			勾玉	勾玉	全長約22m	岡垣町教育委員会1992
入塚本丸山遺跡ST002古墳	宮若市宮若市入塚本丸山入塚	古墳	126	横穴式石室	造出	4		勾、管、玉、水、晶、滑、石系統製品、鉄鏃、矛玉、小玉、鉄鉗	全径	全長約126m	宮若市教委1996
津ノ上古墳	宮若市宮若市犬鷲町津ノ上	古墳	円？ 不明	竪穴式石室	造出?	2以上	1	鏃、鉄鉗、刀子、鍬、鉄斧、鎌、人骨			宮若市教委1989
城ノ下古墳	福岡県京都郡苅田町城ノ下	古墳	円？ 25	横穴式石室	造出?	2以上	2	勾、管、玉、刀子、鏃、矛、鎌片、釣、滑石製品、土師器片、鉄製品			苅田町教育委員会2001

第14表　琴柱形石製品出土遺跡一覧（3）

異幅が大きく、多様な形で隣接型式からの影響も認められるため、基準となる属性の抽出と、それに基づいた組列の設定作業に困難を伴うのが実情と考える。研究者により、多様な系譜やその変遷案が提出されるのも、そうした点に原因が求められよう。

以下では、先学の示された視点を継承しつつも、後継型式への連続を念頭に、新たな分類案の提示を試みよう。そのうち、北條の指摘（北條1996）にあるように、「琴柱形石製品と呼ばれるもののなかでも明らかに系譜の異なる」川柳・茶臼山・本村の3型式は、今回は検討から外しておく。

最初に、松林山型については、岡寺が指摘（岡寺2005）するように、角状突起の間にある小突起の有無に注目し、小突起のあるものをA類、ないものをB類とする[注11]。また、中央の突起が大きく伸長し、山型となる二本松古墳出土資料をC類、角状突起に匂玉状の装飾を伴う赤土山古墳や富雄丸山古墳出土資料をD類とする。C・D類については、岡寺はA類第4段階の資料とするが、岡寺がA類第3段階とする象鼻山1号墳出土資料等との相違は大きく、別型式を設定すべきと考えた[注12]。さらにA類は、下側の横軸の下に明瞭な縦軸が伸びるものを1類、それが不明瞭なものを2類に細分する。B類は、西島庸介の指摘（西島2007）を参考に、角状突起の中央付近に節のあるものを1類、ないものを2類、角状突起が緩く湾曲して開くものを3類に細分する。上記した分類に、反り具合や長さの比率、小型化や広角化といった北條・北山が指摘する指標により、第65図に示したような変遷案を想定する。岡寺は、B類の変遷について、梶田亜友美が指摘（梶田1998）した「縦軸の匙面・沈線の加工の省略」や横軸Ⅰと角状突起との接合方法を指標に、3段階の変遷案を提示した。これに対して私案は、各型式を貫いて小型化と反りの消滅という方向性は維持されているものと考える。

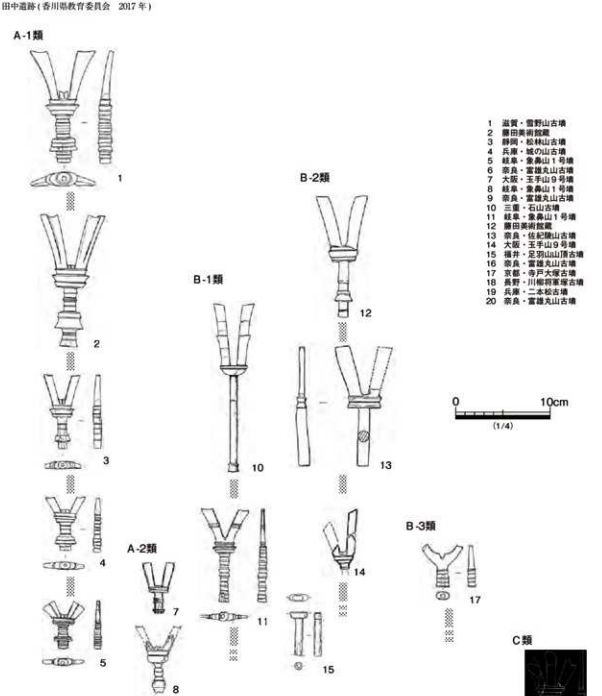
この点に関連して、石材の問題にも触れておこう。岡寺は、A類型は材質Ⅰ±Ⅱ、B類型の第1段階のものが材質Ⅱ、B類型の第2・3段階のものが材質Ⅲでそれぞれ製作されていること、材質Ⅲの製作集団は、「北陸産の緑色凝灰岩を用いて腕輪形石製品を大量生産した」集団で、B類型の最古型式を象鼻山1号墳出土資料に求め、「B類型のモチーフはA類型の製作集団によって生み出され、そのモチーフがその後、材質Ⅲを使用する製作集団に採用され、一定量が製作された」と、石材と自らの変遷案を矛盾なく説明する。一方で、A類型である「象鼻山1号墳№3」資料は、材質Ⅲで製作されている可能性を指摘するものの、A・B類型ともに材質Ⅲの製作集団の関与の可能性については触れられていない。

私は、岡寺とは逆に、A類型とB類型の製作集団は、当初は別々に製作を開始し、その最終段階になって、相互にモデルの共有が生じたと理解した。また、玉手山9号墳でのB類の出土例より、B類製作の開始時期はⅠ期前葉[注13]に遡ることは確実であり、私案では石山古墳や佐紀陵山古墳におけるⅡ期の副葬には、製作後の伝世を一定期間想定する必要があり、確かに岡寺の変遷案の方がより整合的ではある。こうした点の実証には、なお製作地での様相を明らかにする必要があり、今後の課題としておきたい。

さて、各型式間の併行関係については、各資料を実見して検討したものではないため、正確なものではない。北山の指摘するように、各型式が「それぞれ密接な連絡を保ったうえで形態変化を生じさせていた」ことは事実であろう[注14]し、その併行関係に若干の齟齬があるにしても、琴柱形石製品出現期より、多様な型式が生み出されていたことが指摘できる。しかし、各型式間で基本的属性は共有されており、原体を石製品に写す段階で既に取捨選択により、原体との相関は一定度失われているとも考えられるため、模造する原体の細別型式の差の可能性はあるものの、原体そのものの相違であるとは考えない。

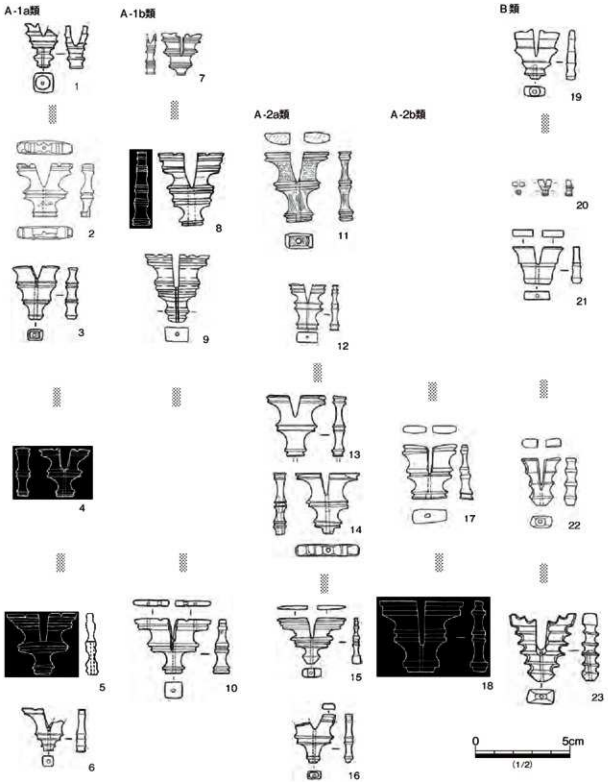
また、藤田美術館所蔵資料、雪野山、石山、佐紀陵山の各古墳出土資料の5点は、いずれも全長11cmを超える大型品であり、その他の中・小型の資料とは明確に規格が異なる。中・小型品の製作の段階で、多様な型式が創出されていることからすれば、大型品の製作段階と、中・小型品の製作段階との間で、画期が指摘できそうである。北山が「ほとんど時期差をともなうことなく一時的に生じた現象」と指摘するように、そこに大きな時間差を見積もることはできないかもしれないが、配布対象を含めた何らかの差が存在した可能性があるのではなかろうか。

最後に、後継型式との関係ではあるが、第65図に示したように、A類は丸山型に、B-1・2類は恵解山型に、B-3類は川柳型にそれぞれ継承される可能性を想定する[注15]。A類は、終始上下2条の横軸表現を維持し、それを誇張した型式として丸山型が成立すると考え、また、B類は総じて角状突起が大きく、



第 65 図　松林山型の分類と変遷

B類からは軸部よりも角状突起を専ら表現した恵解山型が創出されたと考えた。とはいえ、北條も指摘するように、現状では松林山型と恵解山型、丸山型を「連続的につなげることは不可能で」ある。その間に未発見の石製品を挿入するよりも、むしろ鈴木裕明が指摘（鈴木 2002）した、後述する使用形態や材質転換を機に、思い切った型式の創出がなされた可能性を支持し



1　奈良・富雄丸山古墳
2　滋賀・真野1号墳
3　静岡・東阪古墳
4　奈良・池ノ内5号墳
5　京都・八ケ谷古墳
6　徳島・谷口山古墳
7　奈良・富雄丸山古墳
8　徳島・恵解山2号墳
9　滋賀・塚之越古墳
10　三重・久米山6号墳
11　茨城・下河原崎遺跡
12　佐賀・森の上古墳
13　岐阜・坊の塚古墳
14　熊本・城2号墳
15　奈良・三陵墓西古墳
16　岡山・東福寺山古墳
17　大阪・交野東車塚古墳
18　奈良・鑵子塚古墳
19　奈良・富雄丸山古墳
20　石川・雨の宮1号墳
21　奈良・古市方形墳
22　大阪・交野東車塚古墳
23　長野・鳥羽山洞穴

第66図　恵解山型の分類と変遷

たい。具体的な時期は、富雄丸山古墳での松林山型D類と恵解山型A-1類、丸山型の共伴例より、Ⅰ期末からⅡ期前葉と考えられる。

恵解山型については、既述した特徴より、上半部中央に施されたV字状の刺り込みにより、器体の上半分程度の大きな角状の突起を有するものを分類する。したがって、北條が恵解山型に含めた西野古墳出土資料は、やはり宮山型に含めておきたい。恵解山型については、中央部の横帯が明瞭なもの（A類）と不明瞭なもの（B類）に大別する。さらにA類については、角状突起上辺部に刻みを施すもの（1類）と、上辺部が平坦なもの（2類）に細分し、さらに突起間のV字状の刺り込みが、中央部横帯まで届かないもの（a類）と、横帯を穿って2分するもの（b類）とに細分する。B類も角状突起上辺部の刻みの有無により細分可能だが、出土数が乏しいため、細分はしないでおく。A類の細分型式は、その分布に差があるとする意見（中村1986・西島2007）もあるが、明確な差は認められそうにない。A-1類とB類は、いずれも富雄丸山古墳出土資料にあり、A-2類はA-1類を省略化する過程で、やや遅れて成立したものと考える。なお、B類は、その後半期には国立歴史民俗資料館所蔵の石上型（国立歴史民俗博物館2012）の影響を受けて[註16]、多段化していく。また各類に共通して、角状突起上端の幅と下端部の幅の差が小さく、上端と下端の厚さが比較的均一なもの（ⅰ、滋賀県真野1号墳出土資料等）と、角状突起が大きく誇張され、下端部に比して角状突起上端が薄く作られているもの（ⅲ、京都府八ケ谷古墳出土資料等）、その中間形態のもの（ⅱ、奈良県池ノ内5号墳出土資料等）が認められる。すべての資料について実見していないため、製作技術や仕上げの状態等、細かな比較・検討をする材料を持たないが、富雄丸山古墳出土資料は、ⅰの特徴を有しており、ⅰからⅲへの形式変化を想定する。

次に、丸山型であるが、上下端に細長い横軸を有し、それらとは明瞭に区別される中央の縦軸で工字状に連結されているものを分類する。亀井の丸山型に、宮山型に分類されている滋賀県安妻寺古墳出土例と岐阜県西野古墳出土資料を加えて分類する。下端に縦軸の短い突起を有するもの（A類）と、それを欠くもの（B類）に大別する。上端のV字状の突起より、北條の指摘するように、松林山型（雪野山類型）A類の横軸を細長く強調することにより、本型式が成立した可能性を想定する。A類は松林型A類の中央小突起を、B類は同角状突起をそれぞれ強調したものと考える。石上型からの成立を想定する意見もある（亀井1973・西島2007）が、石上型は縦軸を幅広く成形する点に特徴があり、丸山型の志向性とは異なると考える。ただし、石上型も松林山型からの派生型式であることを考慮すると、石上型のモチーフを参考にした可能性はある。全長6cm以上で、中央軸部が細長く、上下横帯の幅がほぼ同じもの（ⅰ、奈良県富雄丸山古墳出土資料等）と、全長6cm以下で、軸部が短くて太く、下位横帯幅が上位横帯幅よりやや短いもの（ⅱ、静岡県東坂古墳出土資料等）があり、後者に上端のV字状の突起を欠落する三重県石山古墳出土例が含まれることから、ⅰ→ⅱへの変遷が想定される。

最後に、宮山型であるが、上下に横軸を有し、その左右両端に縦方向に小円孔を穿孔する点は、丸山型に通じるものがあるが、上下横軸の形状や、それを連結する縦軸部の形状等、形態的には丸山型と相当な開きがあるとみざるを得ない。亀井が指摘するように、石上型を祖型とし、富雄丸山古墳出土資料中に認められないことからも、他の石製品よりやや遅れて成立するものと考える。成立時に、既に成立していた丸山型の穿孔方法を取り入れたのであろう。宮山型には、上下横帯の幅が比較的近似しているもの（ⅰ・奈良県宝宮山古墳出土資料等）と、上方横帯が下方より幅広いもの（ⅱ・島根県大将塚出土資料等）があり、既述した恵解山型や丸山型の型式変化を参考にすれば、ⅰ→ⅱへの変遷が想定される。

以上のように、松林山型、恵解山型、丸山型、宮山型それぞれについて、細分案と変遷観を提示した。恵解山型以下3型式は、それぞれ独自に変化しているのではなく、上端幅に対して下端幅がいずれの型式も小型化する傾向があり、一定の変化の方向性を共有していることが認められた。また、宮山型には、祖型とした石上型にはない、中央部の沈線が刺まれており、それは丸山型と共通する特徴である。さらに、岐阜県西野古墳出土資料や本遺跡出土資料のように、形態的には丸山型や宮山型の特徴を有しているが、上端にV字状の刺り込みが施され、恵解山型の影響を認めるものも存在する。あるいは、丸山型Ⅰ類に見られる下端部の縦軸の突起は、富雄丸山古墳出土の松林山型D類に近似し、さらにそれは三陵墓西古墳出土資料等の恵解山型の一部に受け継がれる。このような型式を越えた共通性は、各製作工人間で、情報を共有する関係が成立していたこと、つまりは製作工房の管理が一元化されていた可能性を物語ると考える。この点の実証には、石材や細かな製作技術の観察を必要とするため、今後の課題としておきたい。

3　分布

次に、上記した恵解山型・丸山型・宮山型を中心とした石製品の分布について考えてみたい。管見の及ぶ範囲で、現在88古墳（遺跡）より200点以上の出土を集成した[註17]。集成漏れや、今後の資料の追加等により変更は予想されるが、現状でのから分布から読み取れることについて考えてみたい。

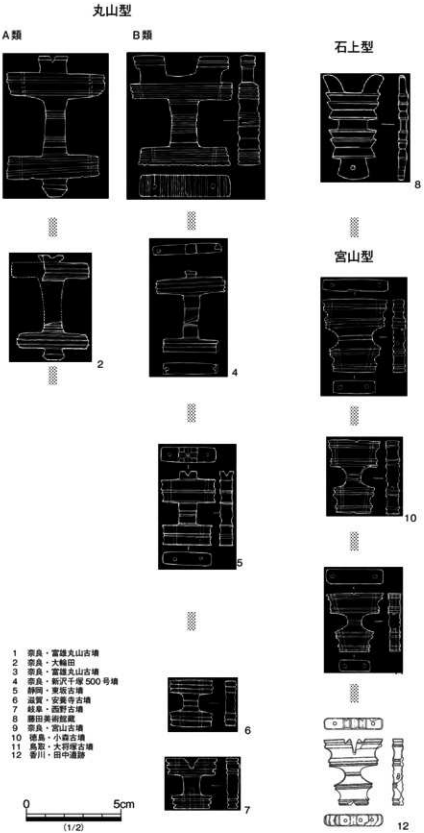
まず、松林山型（雪野山類型、組み合せ式、長軸型）は、現在14古墳18点が確認され、畿内以東にやや多く分布し、第64図に示されるようにその分布範囲は、主要型式のなかで最も狭い。福井県足羽山山頂古墳を除いて、墳長40ｍ以上の前方後円墳もしくは前方後方墳に副葬され、静岡県松林山古墳や三重県石山古墳等、墳長100ｍクラス以上の大型墳を含む。石材は

碧玉やグリーンタフが使用されている。出土古墳からは、地域の上位階層の首長層の副葬品であった可能性が想定される。

次に、恵解山型、丸山型、宮山型の分布では、関東・北陸以北、中国北西部、四国南西部、九州南東部に一部出土のみられない地域があるものの、松林山型に比べると分布域は大きく拡大する。先学の指摘にあるように、いずれも奈良県に極度に集中し、一見して分布の核が奈良県にあることがわかる。また、滋賀県琵琶湖南岸、紀伊北部、四国北東部、北部九州に、やや分布の集中する地域がみられる。そうした集中域の多くは、恵解山型と宮山型が混在して出土しており、必ずしも型式的に統一された分布の偏在は示していない。これは各古墳の被葬者の石製品の入手経路に係る問題であろう。

型式別では、恵解山型と宮山型は関東から北部九州にかけて東西に帯状に広く分布域を有するのに対して、丸山型は奈良県を中心に、北陸や東海地方において出土がみられる。北陸での分布は、すべて生産遺跡やその周辺集落からの出土であり、古墳の副葬品として出土したものではない。こうした北陸での分布を除けば、奈良県を中心に、東海地域に少数分布し、恵解山型や丸山型の分布域に包摂される。西日本に分布を拡げない点で、恵解山型や丸山型とは大きく相違する。この点は、製作地の問題とも係る可能性があり、今後の課題としておきたい。

一方で、1基の古墳に複数個の石製品が副葬される場合、その型式は、東坂古墳と石山古墳、富雄丸山古墳等のいくつかの古墳を除いて、必ず同一型式のもので統一される。細別型式が共通する例もまま認められ、各古墳の被葬者単位にまでセット関係を保持したまま配布がなされたことと、おそらく後述する懸垂品として使用した場合の見た目を重視した、両方の理由が考えられる。また、興味深いことに、奈良県讃岐神社出土資料と、岐阜県坊の塚古墳出土資料は、同じ恵解山型Ⅰａ1類に属し、



第67図　丸山・宮山型の分類と変遷

細部の形状まで酷似する。おそらくは同一工房で近接した時期に製作されたものであることは疑いない。恵解山型は、既述したように出土点数も多く、細部のマイナーチェンジを繰り返して、多様な製品が製作されている。この点は、宮山型や丸山型にはみられない特徴である。おそらくは需要の度に必要数が製作され、それが各古墳へと配布されたと考えられる。先の讃岐神社例は、配布時期が重複したか、副葬数の多い讃岐神社の被葬者から再分配された可能性が考えられる。

恵解山型等が出土する古墳は、静岡県東坂古墳や奈良県室宮山古墳等、前方後円墳や前方後方墳を含むものの、径20～30mの円墳の比重が増え、埴輪施設も粘土郭や箱式石棺等がみられるようになる。松林山型よりも、副葬する被葬者の階層は大きく拡がったと考えられる。

また1基の古墳に副葬される石製品の点数は、1点の場合が多いものの、複数副葬される例も一定数あり、その場合2ないし4点といった偶数個副葬される場合が散見され、岸本道昭は「通常は2個がセットとして機能した可能性」を指摘する（岸本1996）。確かに偶数個使用する例は散見されるが、1個のみの出土例も一定数ある点にも留意が必要であろう。後述するように、他の玉類と組み合わせて懸垂品として使用されたのであれば、複数個出土している例には、勾玉や管玉も複数出土している例も多く、おそらくは琴柱形石製品の副葬数は、こうした玉類を組み合わせた連の数に対応する可能性が考えられる。

北條は、丸山類型と宮山類型の穿孔状態は、「懸垂にもっとも適したもの」と考え、両類型の出現が、「琴柱型石製品の使用形態のうえに生じた大幅な変化と連動した現象」で、「立て置き品から懸垂品への移行」として評価した。また、雪野山・恵解山類型においても、「下端部の穿孔が突起部の根本まで貫通する事例や、丸山類型や宮山類型のように左右の横軸に同じような縦方向の穿孔を施す事例が数多く認められる」ことから、「前段階の製作手法を基本的には踏襲しつつも、使用形態の変化に引きずられる格好で穿孔方法に漸次手直しが加えられた」とする。

松林山型の使用形態については、今後の課題としたいが、貫通孔を穿つ製品については、懸垂品とする北條の指摘を支持したい。しかし、松林山型はその出現の当初より、小型化の指向性をもって製作が継続しており、撥形石や石鋼など、他の碧玉や緑色凝灰岩製の石製品とはやや異なる属性を帯びている。

既述したように、上記した石材の変化や小型化、使用形態の変化は、その副葬する階層を大きく拡大させるものでもあったと考えられる。しかも地方においては、当該期の大型墳に伴う確率は低く、むしろ中・小型墳に副葬される傾向が強く認められる。また、北條が指摘するように、石材の材質の変化は「各種滑石製模造品の出現と連動」するものの、群馬県剣崎天神山古墳や岐阜県坊の塚古墳等の少数例を除いて、他の滑石製模造品類と琴柱形石製品が共伴して副葬されることはない。

琴柱形石製品が、奈良盆地に分布の中心があり、多様な型式の最古段階の製品が盆地内で出土していることからすれば、盆地内の集団がその製作と配布に大きく関与していた可能性が考えられる。また、古市・百舌鳥古墳群からは、現状では琴柱形石製品の出土は、七観音古墳より出土したとされる石上型1点に限られる。「各種滑石製模造品の出現と連動」しながらも、その生産と配布には、他の滑石製模造品にはない特殊な背景が想定される。

この点で、富雄丸山古墳から松林山型D類とともに、恵解山型A-1・B類や丸山型A・B類が出土している点に注目したい。富雄丸山古墳出土の恵解山型は、盲孔である点と、角状突起の形状より、現在確認されているなかでは、最も古い形式に位置付けられると考えられ、丸山型も同様である。つまり、恵解山型や丸山型の創出に、富雄丸山古墳の被葬者の集団が深く関与した可能性を示唆するものと考えたい。

4　出土遺跡の性格

琴柱形石製品は、古墳等の副葬品として出土するのが一般的で、全出土遺跡数の約90%以上を占める。近年、集落遺跡から出土する資料が増加し、北陸の生産遺跡やその周辺での丸山型未成品等の出土例を除いても、管見で8遺跡8点を数えるまでになった。型式別の内訳は、恵解山型4遺跡4点、宮山型4遺跡4点で、松林山型や石上型の出土例はない[21][18]。また、1遺跡（遺構）1点のみの出土が大半を占める。古墳を含めた全体的な型式別の割合から考えても、宮山型の出土例が多いことが指摘できる。なお、丸山型は、古墳出土資料以外は、生産遺跡を含む北陸地域からの出土に限られ、恵解山・宮山の各型式にはない特徴的な分布を呈する。

出土した遺構は、土坑から出土したものは3遺跡3点であり、以外は明確な遺構に伴わない包含層等からの出土である[21][19]。包含層以外からの出土資料は、鍛冶以東に限られる。

出土した石製品は、下河原崎谷中台遺跡と惣の木洲遺跡出土資料が完存、坂田遺跡と木津川河床遺跡出土資料が一部欠損、それ以外は大きく欠損している。破損資料については、報告書の記載からは、意図的に破砕したものか、埋没や調査時に破損した偶発的なものか判断できないものを含むが、女堀Ⅱ遺跡第76土壙出土資料は、半截され、残りの部分は土坑から出土しておらず、また剣型石製品や臼玉と供伴することから、祭祀儀礼との関係が想定され、意図的に破砕された後投棄された可能性が考えられる。

また、戸水C遺跡では管玉5点が、夏谷遺跡では破損した管玉1点が、それぞれ近接して出土しており、五反田遺跡や坂田遺跡では、同一調査区から、滑石製有孔円盤や勾玉が出土している。意図的に破砕された資料を含み、また共伴する遺物の内容から、これら集落出土資料が、集落内での祭祀儀礼に使用された可能性は高いと判断される。恵解山・宮山・丸山型の創出は、

材質や使用形態の硝新に加えて、儀礼的な内容の追加をも含むものであり、他の石製模造品とその点では連動しつつも、北山浦の玉類と共伴し、装身具の一部を構成するという石製模造品にはない異なる側面も有していた。

本遺跡出土資料については、周辺に古墳の存在が確定できない現状においては、周辺での包含層から多数の完形に近い土器群が出土していることを踏まえて、祭祀儀礼に伴う投棄された可能性を指摘しておきたい。

5　さいごに

以上、分類や変遷、分布、使用方法等、琴柱形石製品の有する多様な側面について、雑多な論を展開してきた。本遺跡出土の琴柱形石製品は、集落祭祀に使用された可能性が高く、宮山型のうちで最も後出する資料と評価したい。最後に、四国北東部域に多数の琴柱形石製品が出土する背景について見通しを示しておきたい。

羽立峠西古墳に隣接する津田湾沿岸地域は、古墳時代前期初頭から中期前葉にかけ前方後円墳が継続して築造される地域である。本地域では、前期後葉から高松市鷲の山石製石棺製作集団の影響下に、火山において割り抜き式石棺の製作が開始される（蔵本 2012）。その石棺や石材は、徳島県大代古墳や、岡山県鶴山丸山古墳、そして佐紀陵山古墳へと搬出されている。また、こうした石棺製作と同時に、円筒埴輪が導入されるが、岩崎山４号墳に樽立された埴輪には、鰭付円筒埴輪等が認められ、奈良盆地北部集団の強い関与が想定されてきた。

こうした本地域での琴柱形石製品の配布面の状況から、本地域での琴柱形石製品のまとまった分布は、こうした古墳時代前期後葉以降の本地域と奈良盆地の集団との関係性のもとに成立したものと考えられ、恵解山２号墳や本遺跡出土資料より、それは津田湾周辺での前方後円墳築造終了直後まで継続されていた可能性が考えられる。

補註

註１　未報告資料だが、このほか中の池遺跡に隣接する丸亀市平池南遺跡から、弥生時代前期の資料３点が出土している。また、鴨部・川田遺跡 SK1030 出土資料は、両刃石斧として報告されているが、石斧類には多用されない石材が選択され、敲き石に転用したとみられる敲打痕も認められることから、石棒の可能性を考え集計に加えた。なお、北山浦遺跡 SK27 出土資料（高松市教育委員会 2012）は、報告書では石棒とされるが、実見の結果、磨製片刃石斧片と判断した。

註２　徳島県大柿遺跡（徳島県教育委員会 2001）と愛媛県大渕遺跡（松山市教育委員会 2000）で、砂岩製の大形石棒が各１点出土している。後者については石棒としてよいか疑問で、また非常に限られた資料でもあり、大きく評価することはできないと考える。

註３　報告書で「結晶片岩」や「片岩」と記載されているものについては、私が肉眼で観察して種別を判断したが、誤認の可能性もあることを記しておく。また、泥質片岩としたものは、いずれも珪質に近い変成度の高いものである。

註４　第 11 表は、鴨部・川田遺跡（香川県教育委員会 1997・同 2002）、林・坊城遺跡（香川県教育委員会 1993）、下川津遺跡（香川県教育委員会 1990）、中の池遺跡（丸亀市 1998・同 2000・丸亀市教育委員会 2003・同 2004・同 2005・同 2006）、龍川五条遺跡（香川県教育委員会 1996・同 1996）に両収の縄文時代晩期から弥生時代前期の遺構出土資料を集計して作成した。

註５　三波川帯の結晶片岩製石棒は、縄文時代晩期後葉～弥生時代前期前葉に大阪湾岸周辺を中心とした関西地域への搬出例が多く確認されている（大下 2001）。このほか、岡山県から広島県東部地域を中心とした山陽地域にも搬入されており、久保穂二朗は因幡地域の大形石棒が三波川帯産のものが含まれる可能性を指摘する（久保 2011）。非常に広範な分布を示しており、弥生時代の同石材の流通経路は、こうした縄文時代の交易関係を、何らかの形で継承したものとも考えられる。

註６　大形品はすべて破損しており、両頭か単頭か判断不能だが、中村も用いているように、単頭として分類する。

註７　当該期の小形石棒は山陰地方にも分布する（小南 2011）。しかし、山陰地方の小形石棒は、縄文時代後期中葉～晩期中葉の系譜を引く有頭式のものであり、本地域の無頭式石棒とは形態が異なる。一方、近畿から東海地域の小形石棒は、無頭式を含み、大形品から小形品への変遷をみても、本地域の石棒のあり方と調和的である。本地域の小形石棒の出現に、山陰地域の集団が関与した可能性は考えられるものの、上述した理由から、東からの影響を重視したい。

註８　以上のほかに、出土地不詳の当センター所蔵の１点がある。また、羽立峠西古墳出土資料については、広島大学大学院文学研究科教授　野島永先生の寛大なご高配により、実測・掲載のご許可を頂き、当センター所蔵資料とともに第 63 図に掲載した。記して感謝いたします。

註９　琴柱形石製品の分類は、亀井正道の分類案（亀井 1973）を以下踏襲するが、各研究者の論文を引用する際には、やや慣雑とはなるが、その研究者の分類名称を使用する。

註 10　「盲孔」という語は、『広辞苑』（新村 1991）や『日本語大辞典』（梅棹ほか 1989）、『日本考古学事典』（田中・佐原 2003）等に記載はなく、おそらく貫通していない孔を意味する造語か、他の学問の専門用語の借用である可能性が考えられる。適切な表現ではないが、琴柱形石製品の孔の形状を示す用語として多くの研究者に使用され、既に定着しているとみられることから、以下小稿でも使用する。

註 11　足羽山山頂古墳出土資料については、角状突起を欠くが、軸部の形状より、B -1 もしくは B-2 類に分類されると考える。

註 12　D 類については、白井久美子の指摘（白井 1991）にあるように、後にその意匠が石製立花に取り込まれた可能性を想定したい。

註 13　年代表記は、円筒埴輪編年（鐘方 2003）の年代表記を使用する。

註 14　北山は、「密接な連結」の根拠として、象鼻山１号墳出土資料や寺戸大塚古墳出土資料等にみられる角状突起先端の外傾形態を挙げる。私はむしろ、象鼻山１号墳Ｂ -1 類資料と寺戸大塚古墳出土資料にみられる、角状突起間基部中央の細かな U 字状の刳り込みや、松林山古墳出土資料や象鼻山１号墳出土Ｂ -1 類資料等にみられる、角状突起頂部の浅い抉りに、型式を越えた意匠上の共通性を認めたい。

註 15　両寺は、雨の宮１号墳出土資料を雪野山Ｂ類型としたうえで、「首飾りのような垂飾として使用」され、「恵解山類型の使用方法につながる」ことから、「雨の宮１号墳例が恵解山類型につながる型式」とする。しかし、雨の宮１号墳例については貫通孔が穿たれることから、西島の指摘にもあるように、恵解山型に分類するのが妥当であろう。

註 16　石上型については、関西大学考古学等資料室所蔵出土地不明資料 102（関西大学工業技術研究所 1990）のように鉸紋岩製のものがあり、その製作が Ⅱ 期以降にまで継続するものと考えられる。

註 17　博物館等に所蔵され、出土地の不詳なものについては多くを除いた。また、集成に際して、亀井 1973、西島 2007 等の作業を参照した。

註18　石上神宮禁足地出土の石上型を除く。
註19　夏谷遺跡出土例は、竪穴建物から出土しているが、埋土の上層より出土しており、包含層出土に含める。

引用・参考文献

梅棹忠夫・金田一春彦・阪倉篤義・日野原重明 1989『日本語大辞典』, 講談社
大下明 2001「近畿地方における大型石棒の受容と展開（上）－頭部笠状二段大型石棒の創出－」縄文・弥生移行期の石製呪術具3　考古学資料集18』, 国立歴史民俗博物館春成研究室
岡寺良 2005「琴柱形石製品の型式学的研究」『待兼山考古学論集　－都出比呂志先生退任記念－』
梶田亜友美 1998「琴柱形石製品」『象鼻山1号古墳　－第2次発掘調査の成果－』, 養老町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室
亀井正道 1973「琴柱形石製品考」『東京国立博物館紀要』第8号
河上邦彦 1995「瓢箪山古墳」『日本古代遺跡事典』, 六興出版
北島大輔 2008「琴柱形石製品の用途と祖形」『地域と文化の考古学』II
北山峰生 2004「玉手山古墳群にみる石製品の様相」『玉手山古墳群の研究IV　－副葬品編－』, 柏原市教育委員会
岸本道昭 1996「各種副葬品の検討」『新宮東山古墳群』, 龍野市教育委員会
久保穣二朗 2011「鳥取県の精神文化関連遺物および遺構集成とその概要」『中四国地方縄文時代の精神文化』, 中四国縄文研究会
蔵本晋司 2012「讃岐産刳抜式石棺の成立とその背景」『ミニシンポジウム　海からみた四国の古墳時代』, 公益財団法人徳島県埋蔵文化財センター
後藤信祐 1986・1987「縄文後晩期の刀剣形石製品の研究」（上）（下）『考古学研究』第33巻第3・4号
小林青樹 2000「中四国における大型石棒の受容と展開に関する予察」『縄文・弥生移行期の石製呪術具1　考古学資料集12』, 国立歴史民俗博物館春成研究室
小林青樹 2011「東日本の縄文祭祀」『中四国地方縄文時代の精神文化』, 中四国縄文研究会
小南裕一 2011「中四国地方における縄文祭祀に関する覚書　－九州・近畿地方との比較検討を中心として－」『中四国地方縄文時代の精神文化』, 中四国縄文研究会
島本　一 1938「琴柱形石製品の新例」『考古學雑誌』第二十八巻　第六號　考古學會
白井久美子 1991「石製立花と石枕の出現　－枕造り付け木棺考－」『古代探叢III　－早稲田大学考古学研究会創立40周年記念考古学論集－』
新村出 1991『広辞苑（第四版）』, 岩波書店
鈴木裕明 2002「石製品の変化」『政権交代　－古墳時代前期後半のヤマト－』, 橿原考古学研究所附属博物館
戸田哲也 1997「石棒研究の基礎的課題」『堅田直先生古稀記念論文集』, 真陽社
中島将太 2011「大形石棒に加えられた行為」『縄文時代の大形石棒』, 國學院大學学術資料館
中村五郎 1986「鹿角（わさづの）考　－鹿角・杖・蓋・琴柱形石製品－」『福島考古』第27号
中村豊 2000「四国地域（徳島県・香川県・愛媛県・高知県）の概要」『縄文・弥生移行期の石製呪術具1　考古学資料集12』, 国立歴史民俗博物館春成研究室
中村豊 2001「近畿・瀬戸内地域における石棒の終焉　－縄文から弥生－」『縄文・弥生移行期の石製呪術具3　考古学資料集18』, 国立歴史民俗博物館春成研究室
中村豊 2012『弥生時代における結晶片岩製石器生産・流通史の復原に関する研究　科学研究費補助金(若手研究(B))研究成果報告書, 平成20～23年度』
難波洋三 2000「同笵銅鐸の展開」『シルクロード学研究叢書3　－金属と文明－』, シルクロード学研究センター
西島庸介 2007「琴柱形石製品の研究」『考古学集刊』第3号
林直樹 2007「石棒製作のムラ　－塩屋金清神社遺跡－」『縄文時代の考古学6』, 同成社
早野浩三 2006「－県内遺構・遺物集成－石製模造品」『研究紀要』第7号, 愛知県埋蔵文化財センター
北條芳隆 1996「雪野山古墳の石製品」『雪野山古墳の研究』考察篇, 雪野山古墳発掘調査団
光本順 2006「堰の構築・使用過程と社会関係」『津島岡大遺跡17　－第23・24次調査－』, 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
美濃古墳文化研究会 1990『美濃の前期古墳　－前方後方墳のルーツを問う－』, 教育出版文化協会
本村豪章 1963「備後三次市畑原開山9号墳」『古代吉備』5
森浩一 1973「堺市百舌鳥古墳群内出土の琴柱形石製品」『古代学研究』68
藪下浩 1991「岐阜地域の前期古墳」『美濃の前期古墳』
山岸洋一 2012「琴柱形石製品と笛吹田遺跡」『古墳時代におけるヒスイ勾玉の生産と流通過程に関する研究　平成21～23年度科学研究費補助金若手研究（B）研究成果報告書』
山田康弘 1994「有文石棒の摩滅痕　－茨城県岩井市香取塚古墳表採品の石棒を中心に－」『筑波大学　先史学・考古学研究』第5号

報告書等

伊賀市 2005『上野市史 考古編』
石川県立埋蔵文化財センター 1982『漆町遺跡』
石川県立埋蔵文化財センター 1986『金沢市戸水C遺跡　金沢港泊地造成事業関係埋蔵文化財発掘調査報告』
糸魚川市教育委員会 2007『平成18年度笛吹田遺跡発掘調査概要報告書』
宇土市教育委員会 1981『城2号墳』
梅原末治 1973『佐味田及新山古墳研究』, 名著出版
大宇陀町役場 1986『宇陀　北原古墳』
大津市教育委員会 2016『真野遺跡発掘調査報告書II』
香川県教育委員会 1987『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1冊　中村遺跡・乾遺跡・上一坊遺跡』
香川県教育委員会 1990a『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第7冊　一の谷遺跡群』
香川県教育委員会 1990b『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第9冊　永井遺跡』
香川県教育委員会 1993『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第2冊　林・坊城遺跡』
香川県教育委員会 1995『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第3冊　前田東・中村遺跡』
香川県教育委員会 1996『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第23冊　龍川五条遺跡I』
香川県教育委員会 1997『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第7冊　鴨部・川田遺跡I』
香川県教育委員会 1998『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第29冊　龍川五条遺跡II・飯野東分山崎南遺跡』
香川県教育委員会 2000『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第36冊　金毘羅山遺跡I・塔の山南遺跡・庵の谷遺跡』
香川県教育委員会 2002『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第10冊　鴨部・川田遺跡III』
香川県教育委員会 2005『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第54冊　成重遺跡II』
香川県教育委員会 2005『県道大内白鳥インター線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　原間遺跡』
香川県教育委員会 2011『独立行政法人国立病院機構善通寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第2冊　旧練兵場遺跡II』
香川県教育委員会 2012『県道丸亀詫間豊浜線（多度津西工区）緊急地方道路整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　西白方瓦谷遺跡』
香川県教育委員会 2013『独立行政法人国立病院機構善通寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第3冊　旧練兵場遺跡III』
交野市教育委員会 2000『交野東車塚古墳〔調査編〕』
金沢市 2013『畝田・寺中遺跡VIII　－木曳野遺跡群VI－』
関西大学工業技術研究所 1990『関西大学考古学等資料室所蔵石器資料の石室調査　古文化財保存科学研究会調査報告』
関西大学考古学研究室 1979『和歌山市橘谷遺跡IV　発掘調査概要』
倉吉市教育委員会 1996『夏谷遺跡発掘調査報告書』
古賀町教育委員会 1984『花見遺跡』
古賀町教育委員会 1989『南原古墳群　福岡県糟屋郡古賀町所在古墳群の調査』
財団法人茨城県教育財団 2007『下河原崎谷中台遺跡・島名ツバタ遺跡　上河原崎・中西特定土地区画整理事業地内埋蔵文

化財調査報告書３』
財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 2007『京都府遺跡調査概報』第 122 冊
財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1987『女堀Ⅱ・東女堀原霞ケ関土地区画整理事業関係埋蔵文化財発掘調査報告１』
財団法人栗東町文化体育振興事業団 1993『栗東町埋蔵文化財発掘調査年報　1992 年度』
財団法人和歌山県文化財センター 2011『坂田遺跡発掘調査報告書　－県道三田三葛線道路改良工事に伴う発掘調査－』
佐賀県 1949『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告』第８輯
佐賀県教育委員会 1986『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書５　久保泉丸山遺跡』
志摩町教育委員会 1992『四反田古墳群２　福岡県糸島郡志摩町初川流域遺跡群の調査』
志免町教育委員会 2001『国指定史跡　七夕池古墳』
新宮町教育委員会 1991『人丸古墳　新宮町埋蔵文化財発掘調査報告書第３集』
大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館 2012『国立歴史民俗博物館資料図録８　古墳関連資料』
高松市教育委員会 1995［一般国道 11 号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第５冊　井手東Ⅱ遺跡］
高松市教育委員会 2004『都市計画道路東浜港花ノ宮線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第２冊　東中筋遺跡－第２次調査－』
高松市教育委員会 2006『都市計画道路室町新田線埋蔵文化財発掘調査報告書第３冊　新田本村遺跡』
高松市教育委員会 2012『都市計画道路木太鬼無線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第２冊　北山浦遺跡』
龍野市教育委員会 1996『新宮東山古墳群』
都祁村教育委員会 1999『三陵墓西古墳』
徳島県教育委員会 1966『眉山周辺の古墳　－恵解山古墳群　節句山古墳群－』
徳島県教育委員会 2001『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 18　大柿遺跡Ⅰ』
奈良県教育委員会 1959『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告　室大墓』
奈良県教育委員会 1973a『富雄丸山古墳　－奈良県大和田町富雄丸山古墳群発掘調査報告－』
奈良県教育委員会 1973b『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告　第 28 冊　磐余・池ノ内古墳群』
奈良県立橿原考古学研究所 1999『三陵墓西古墳』
南部町史編纂委員会 1992『南部町史　第２巻通史編』
兵庫県教育委員会 2002 a『五反田遺跡　県立コウノトリの郷公園整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
兵庫県教育委員会 2002 b『権田東古墳群Ⅰ　－播但連絡道路（５期事業）に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅱ－』
広島県教育委員会 1979『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 2』
福岡県教育委員会 1982『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第７集』
松山市教育委員会 2000『大渕遺跡　－１・２次調査－』
丸亀市 1998『中ノ池遺跡Ⅰ　丸亀市総合運動公園整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
丸亀市 2000『中ノ池遺跡Ⅱ　丸亀市総合運動公園整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
丸亀市教育委員会 2003『中の池遺跡　－第８次調査－』
丸亀市教育委員会 2004『中の池遺跡　－第９・10 次調査－』
丸亀市教育委員会 2005『中の池遺跡　－第 11 次調査－』
丸亀市教育委員会 2006『中の池遺跡　－第 12 次調査－』
守山市教育委員会 2005『塚之越遺跡発掘調査概要報告書』
山城考古学研究会 1983『舟迫の古墳Ⅰ　－由良川流域の古墳－』
妻老町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室 1998『象鼻山１号古墳　－第２次発掘調査の成果－』
和歌山県史編纂委員会 1983『和歌山県史考古資料』

挿図出典

第 65 ～第 66 図は、岡寺 2005、亀井 1973、北山 2004、西島 2007 及び各報告書より転載。それ以外は、藏本実測・作図。

報文番号	図版	遺構名	層位	種類	器種	調整 外面	調整 内面	色調 外面	色調 内面	焼成	胎土 石英・長石	胎土 角閃石	胎土 雲母	胎土 輝石	胎土 結晶片岩	計測値(cm) 口径	計測値(cm) 器高	計測値(cm) 底径	計測値(cm) その他	残存率	備考
1	29	包含層Ⅳ		縄文土器	深鉢	L1縦～頸部：ナデ・突帯貼付、体部：ケズリ	L1縦～頸部：ナデ?・マメツ、体部：板ナデ	10YR5/2灰黄褐色	10YR6/2灰黄褐色	良好	粗・並					21.0				1/8 未満	
2	29	包含層Ⅳ		縄文土器	深鉢	L1縦：ナデ、刻み目突帯貼付	L1縦：マメツ	2.5Y3/1 黒褐色	2.5Y7/1 灰白色	やや軟	粗・多					25.2				1/8	
3		包含層Ⅳ		縄文土器	深鉢	L1縦：刻み目突帯貼付、端部刻み目	L1縦：ナデ	10YR5/2灰黄褐色	10YR6/3にぶい黄橙色	良好	中・多		細・少			29.4				1/8 未満	
4		包含層Ⅳ		弥生土器	甕	体～底部：マメツ	体～底部：指オサエ・ナデ	2.5YR6/6 橙色	2.5Y3/1 黒褐色	良好	粗・多							8.9		2/8	
5		包含層Ⅳ		縄文土器	浅鉢	体部：ミガキ、底部：マメツ	体～底部：マメツ	2.5Y5/2 暗灰黄色	2.5Y5/2 暗灰黄色	やや軟	中・多							5.0		2/8	
11		SH01		弥生土器	甕	L1縦～頸部：指オサエ後ナデ、体部：タタキ後ナデ?マメツ	L1縦：ヨコナデ?マメツ、体部：ハケ?マメツ	10YR2/3にぶい黄橙色	10YR7/3にぶい黄橙色	やや軟	中・並				11.8					1/8	
12		SH01		弥生土器	甕	L1縦～頸部：ヨコナデ、体部：ハケ・マメツ	L1縦～頸部：ヨコナデ、体部：指オサエ・マメツ	10YR2/2にぶい黄橙色	10YR7/3にぶい黄橙色	やや軟	中・少				13.5					1/8 未満	阿波搬入土器
13		SH01		弥生土器	甕	L1縦～頸部：ヨコナデ、マメツ、体部：ハケ・マメツ	L1縦～頸部：ヨコナデ、マメツ、体部：指オサエ・ナデ	10YR2/3にぶい黄橙色	10YR7/3にぶい黄橙色	やや軟	中・少				15.6					1/8 未満	阿波搬入土器
14		SH01		弥生土器	甕	L1縦：ヨコナデ、押圧1、施～体部：指オサエ・ナデ、ミガキ	L1縦～頸部：ヨコナデ、体部：指オサエ・板ナデ	10YR2/3にぶい黄橙色	10YR7/2にぶい黄橙色	やや軟	中・並				14.9					2/8	
15		SH01		弥生土器	鉢	体部：タタキ後ナデ?マメツ、底部：マメツ	体～底部：指オサエ・マメツ	10YR6/1 褐灰色	10YR5/1 褐灰色	やや軟	中・並							2.4		8/8	
16	27	SH01		弥生土器	鉢	L1縦～底部：タタキ後板ナデ・ナデ	L1縦～底部：ハケ・ナデ	10YR8/4 浅黄橙色	10YR7/4にぶい黄橙色	良好	中・並				11.0	6.0			8/8	
17	27	SH01		弥生土器	鉢	L1縦～体部：タタキ後ナデ・ナデ	L1縦～底部：ハケ・ナデ	N4/ 灰色	10YR8/2 灰白色	良好	中・並				9.3	7.7			6/8	
18	27	SH01		弥生土器	鉢	L1縦～底部：板ナデ・ナデ	L1縦：ハケ後ナデ、体～底部：板ナデ・ナデ	10YR2/4にぶい黄橙色	10YR7/4にぶい黄橙色	良好	中・並				9.6	5.7			6/8	
19	27	SH01		弥生土器	鉢	L1縦～底部：タタキ後ナデ	L1縦：ナデ、体～底部：ハケ	10YR2/3にぶい黄橙色	10YR7/3にぶい黄橙色	良好	中・並				9.6	7.4			7/8	
20		SH03		弥生土器	壺	L1縦：ナデ・櫛描波状文・マメツ	L1縦：ヨコナデ・マメツ	7.5YR7/4にぶい橙色	10YR7/3にぶい黄橙色	良好	中・少				18.8					1/8 未満	
21	27	SH03		弥生土器	甕	L1縦～頸部：ヨコナデ、体～底部：タタキ後ナデ	L1縦～頸部：ヨコナデ、体～底部：板ナデ・ナデ	10YR2/4にぶい黄橙色	10YR7/4にぶい黄橙色	良好	中・並		細・少		9.7	13.5			8/8	
22		SH03		弥生土器	鉢	体部：板ナデ後ナデ、底部：ナデ	体～底部：板ナデ	10YR6/2灰黄褐色	5Y7/1 灰白色	良好	中・並							2.6		8/8	
23		SH03		弥生土器	甕	体部：ナデ、底部：ナデ	体～底部：指オサエ・ナデ	10YR2/3にぶい黄橙色	7.5YR7/4にぶい橙色	良好	中・少		細・並					3.8		4/8	
24		SH03		弥生土器	鉢	体部：板ナデ・ナデ、底部：ナデ	体～底部：ハケ後ナデ	10YR7/3にぶい黄橙色	10YR8/3浅黄橙色	良好	中・並							3.0		3/8	
25		SH03		弥生土器	甕	体部：板ナデ?マメツ、底部：ナデ	体～底部：指オサエ・ナデ・マメツ	10YR6/2灰黄褐色	10YR7/2にぶい黄橙色	やや軟	中・少		細・少					3.0		2/8	
26		SH03		弥生土器	甕	体部：ハケ、底部：ナデ	体～底部：ケズリ	2.5Y6/1 黄灰色	10YR7/2にぶい黄橙色	良好	中・並							4.1		4/8	
27		SH03		弥生土器	鉢	L1縦：ヨコナデ、体部：板ナデ後ナデ	L1縦：ヨコナデ、体部：指オサエ・ナデ	10YR6/3にぶい黄橙色	10YR6/3にぶい黄橙色	良好	中・多				8.8					1/8	
28		SH03		弥生土器	台付鉢	体部：タタキ後ケズリ・ハケ、脚台部：指オサエ・ナデ	体～底部：ハケ・ナデ、脚台部：指オサエ・ナデ	10YR2/3にぶい黄橙色	10YR8/3浅黄橙色	良好	中・並							3.6		1/8	
29		SH03		弥生土器	台付鉢	体部：ナデ、脚台部：指オサエ・ナデ	体～底部：板ナデ、脚台部：指オサエ・ナデ	10YR5/1 褐灰色	10YR8/4浅黄橙色	良好	中・並							4.5		4/8	
30		SH03		弥生土器	製塩土器	体部：ナデ?脚部：指オサエ・ナデ	体部：マメツ、脚部：指オサエ・ナデ	10YR2/3にぶい黄橙色	2.5Y6/1 黄灰色	良好	中・並							3.8		4/8	
32		SH06		弥生土器	壺	頸～体部：ハケ、底部：ナデ	頸部：ヨコハケ・ナデ、体～底部：ケズリ後指オサエ・ナデ	7.5YR5/4にぶい褐色	7.5YR6/4にぶい橙色	良好	中・少		細・多					4.8		4/8	搬入土器
33		SH06		弥生土器	壺	L1縦～頸部：ハケ・マメツ	L1縦：ヨコナデ、頸部：指オサエ・ナデ	7.5YR6/6 橙色	7.5YR6/6 橙色	やや軟	中・並	細・並	細・少		8.6					7/8	香東川下流域産
34	27	SH06		弥生土器	壺	体部：ミガキ	体部：ケズリ、底部：指オサエ・ナデ	10YR6/3にぶい黄橙色	10YR6/3にぶい黄橙色	良好	中・並	細・多	細・少							8/8	香東川下流域産

第 15 表　出土土器観察表（1）

報文番号	図版	遺構名	層位	種別	器種	調整		色調		焼成	胎土				計測値（cm）			残存率	備考
						外面	内面	外面	内面		石英・長石	角閃石	雲母	輝石	結晶片岩	口径	器高	底径	その他	
35		SI806		弥生土器	甕	L1縦～頸部：ヨコナデ	L1縦：ヨコナデ、体部：ケズリ	7.5YR6/3にぶい褐色	7.5YR4/2灰褐色	良好	中・少			細・多		13.8			1/8	搬入土器
36		SI806		弥生土器	甕	L1縦～頸部：ヨコナデ、凹線1、体部：ハケ・ヨコナデ	L1縦～頸部：ヨコナデ、マメツ、体部：指オサエ・マメツ	10YR6/2灰黄褐色	2.5YR6/2灰黄色	やや軟	粗・少					16.4			1/8	体部外面煤付着
37		SI806		弥生土器	高杯	杯部：ハケ後ナデ？マメツ、脚部：ミガキ？マメツ	杯部：マメツ、脚部：シボリ目	10YR2/3にぶい黄橙色	10YR2/2にぶい黄橙色	良好	中・少								8/8	
38		SI806	貼床層	弥生土器	高杯	脚裾部：ハケ・ヨコナデ	脚裾部：ハケ・ヨコナデ	10YR2/3にぶい黄橙色	10YR2/3にぶい黄橙色	良好	中・多							14.8	1/8	
39		SI806		弥生土器	高杯	脚裾部：ミガキ・ヨコナデ	脚裾部：マメツ	10YR2/2にぶい黄橙色	2.5YR3/2灰白色	良好	中・少							14.7	2/8	
40	27	SI806		弥生土器	高杯	脚部：ミガキ後ヨコナデ	脚部：ケズリ後ナデ	7.5YR6/4にぶい橙色	7.5YR6/4にぶい橙色	良好	中・並	細・並	細・並					18.6	8/8	香東川下流域産
41		SI806		弥生土器	鉢	L1縦～体部：板ナデ・ナデ	L1縦～体部：指オサエ・ナデ	10YR6/3にぶい黄橙色	10YR5/2灰黄褐色	良好	中・並					5.9			2/8	
42	27	SI806		弥生土器	鉢	L1縦～底部：指オサエ・ナデ？マメツ、底部：ナデ	L1縦～底部：板ナデ・ナデ・マメツ	10YR8/2灰白色	10YR8/2灰白色	やや軟	中・少					10.4	6.6	3.2	8/8	
43		SI806		弥生土器	高杯	杯部：ナデ・沈線2、マメツ	杯部：ナデ？マメツ	10YR8/3浅黄橙色	10YR8/3浅黄橙色	やや軟	中・少					13.8			2/8	
44		SI806		弥生土器	鉢	L1縦～体部：ナデ？マメツ	L1縦～体部：ナデ？マメツ	10YR7/3にぶい黄橙色	10YR7/3にぶい黄橙色	やや軟	粗・並					12.9			1/8	
45		SI806		弥生土器	鉢	L1縦：ヨコナデ、体部：指オサエ・ナデ？マメツ、底部：ナデ	L1縦～底部：指オサエ・板ナデ・マメツ	10YR2/2にぶい黄橙色	10YR8/2灰白色	やや軟	中・少					14.9	5.4	3.4	2/8	
46	27	SI806		弥生土器	鉢	L1縦～底部：ヨコナデ？マメツ、体～底部：指オサエ・ナデ？マメツ	L1縦～底部：ハケ・ハケ	10YR6/3にぶい黄橙色	2.5YR6/8橙色	良好	中・並					17.8	7.5		7/8	外面煤付着、内面本銀朱付着
47		SI806		弥生土器	鉢	L1縦～体部：タタキ後ヨコナデ、指オサエ、底部：指オサエ・ナデ	L1縦～底部：ハケ・ヨコナデ	10YR2/3にぶい黄橙色	10YR7/2にぶい黄橙色	良好	中・少					15.4	6.8	3.4	3/8	
48		SI806	貼床層	弥生土器	製塩土器	体～胴台部：指オサエ・ナデ	体部：マメツ、胴台部：ナデ	2.5YR6/6橙色	10YR7/3にぶい黄橙色	良好	中・並							3.2	4/8	
49		SI801	上層	弥生土器	壺	L1縦：ヨコナデ？マメツ、頸部：ハケ後ナデ	L1縦：ヨコナデ？マメツ、頸部：ハケ後ナデ	10YR8/2灰白色	10YR8/1灰白色	やや軟	中・並					12.2			1/8	
50	28	SI801	中層	弥生土器	甕	体部：マメツ、底部マメツ	体部：ケズリ、底部：ナデ	5YR6/2灰褐色	10YR7/3にぶい黄橙色	良好	粗・並							7.8	4/8	
51		SI801	上層	弥生土器	甕	L1縦～頸部：ヨコナデ、体部：ハケ	L1縦～頸部：ヨコナデ、体部：ハケ後指オサエ・ナデ	7.5YR7/4にぶい橙色	7.5YR7/6橙色	良好	中・並					31.0			1/8	
52		SI801	上層	弥生土器	甕	L1縦～頸部：ヨコナデ、マメツ、体部：ナデ？	L1縦～頸部：ヨコナデ、体部：指オサエ・ナデ	10YR7/3にぶい黄橙色	10YR7/3にぶい黄橙色	やや軟	中・多					14.8			1/8 未満	体部外面煤付着
53		SI801	上層	土師器	甕	L1縦～頸部：ヨコナデ？マメツ、体部：板ナデ	L1縦～頸部：ヨコナデ、体部：ケズリ	7.5YR2/4にぶい橙色	7.5YR7/4にぶい橙色	良好	中・少					13.6			2/8	
54	28	SI801	中層	弥生土器	甕	L1縦～頸部：凹線2、ヨコナデ、体部：ヨコナデ後ハケ・板ナデ	L1縦：ヨコナデ、頸～体部：指オサエ後ケズリ	10YR8/3浅黄橙色	10YR8/3浅黄橙色	良好	中・少					16.0			4/8	体部外面煤付着
55		SI801	上層	弥生土器	甕	L1縦～体部：タタキ・ナデ	L1縦：ヨコナデ？マメツ、体部：板ナデ？マメツ	10YR2/3にぶい黄橙色	10YR7/3にぶい黄橙色	良好	中・少					15.0			1/8 未満	
56		SI801	上層	弥生土器	甕	L1縦：ヨコナデ・マメツ	L1縦：ヨコナデ・マメツ	5YR5/6明赤褐色	7.5YR4/3黒色	良好	中・少	細・少				15.4			1/8 未満	香東川下流域産？
57	28	SI801	上層	弥生土器	甕	L1縦～頸部：ヨコナデ、体部：ハケ後ナデ・マメツ	L1縦～頸部：ヨコナデ、体部：ケズリ後指オサエ・ナデ	10YR8/3浅黄橙色	10YR8/3浅黄橙色	良好	粗・並					14.8			7/8	
58	28	SI801	中層	弥生土器	甕	L1縦～頸部：ヨコナデ、体部：ハケ	L1縦～頸部：ヨコナデ、体部：指オサエ・ナデ	10YR8/3浅黄橙色	10YR8/3浅黄橙色	良好	中・並					13.0			4/8	体部外面煤付着
59		SI801	中層	弥生土器	甕	体部：ハケ後ナデ、底部：ナデ	体～底部：ケズリ	10YR6/2灰黄褐色	10YR6/2灰黄褐色	良好	中・並		細・少					4.4	3/8	外面煤付着
60		SI801	中層	弥生土器	甕	体部：ハケ、底部：ナデ	体～底部：ケズリ後ナデ	2.5Y7/2灰黄色	2.5Y6/2灰黄色	良好	細・少							3.4	2/8	

第16表　出土土器観察表（2）

報告書番号	図版	遺構名	層位	種類	器種	調整		色調		焼成	胎土					計測値（cm）				残存率	備考
						外面	内面	外面	内面		石英・長石	角閃石	雲母	輝石	結晶片岩	口径	器高	底径	その他		
61		SR01	中層	弥生土器	甕	体部：ハケ後ミガキ、底部：板ナデ後ナデ	体～底部：ケズリ後ナデ	2.5Y6/2 灰黄色	2.5Y6/2 灰黄色	良好	細・少						4.2			8/8	外・内面煤付着
62		SR01	中層	弥生土器	壺	体部：ハケ・ナデ、底部：ナデ	体～底部：指オサエ・ナデ	2.5YR6/4 にぶい橙色	10YR7/2 にぶい黄橙色	良好	粗・並		細・少				6.3			7/8	外面煤付着
63		SR01	中層	弥生土器	甕	体部：ハケ後ミガキ、底部：ナデ	体～底部：板ナデ	2.5Y7/2 灰黄色	2.5Y8/3 淡黄色	良好	細・少						5.2			4/8	外面煤付着
64		SR01	中層	弥生土器	高杯	杯部：ミガキ、脚部：ハケ後ナデ・刺突文	杯部：ミガキ、脚部：シボリ目・ハケ	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	良好	中・並									8/8	
65		SR01	中層	弥生土器	鉢	口縁：ヨコナデ、体部：ケズリ後ナデ	口縁：ヨコナデ、体部：ハケ	7.5YR7/3 にぶい橙色	10YR7/3 にぶい黄橙色	良好	中・並					19.3				2/8	
66		SR01	中層	弥生土器	鉢	口縁～体部：ハケリ、底部：ハケ？ハケリ	口縁：ハケリ、体～底部：ハケ、ハケリ	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR6/3 にぶい黄橙	良好	粗・多					19.8				1/8	
67		SR01	中層	弥生土器	鉢	口縁～頸部：ヨコナデ、体部：未調整、底部：板ナデ	口縁～頸部：ヨコナデ、体～底部：ハケ後ミガキ	10YR8/3 浅黄橙色	2.5Y7/2 灰黄色	良好	中・並		細・少			36.9				1/8	外型成形
68		SR01	中層	弥生土器	製塩土器	体部：タタキ後ナデ、脚部：指オサエ・ナデ	体部：ケズリ後ナデ、脚部：指オサエ・ナデ	10YR7/2 にぶい黄橙色	10YR8/2 灰白色	良好	中・並						3.7			1/8	
69		SR01	中層	弥生土器	製塩土器	体部：板ナデ？脚部：指オサエ	体部：指オサエ・ナデ、脚部：指オサエ	10YR7/3 にぶい黄橙色	10YR7/3 にぶい黄橙色	良好	中・多									7/8	
72		SH02		弥生土器	甕	体部：ハケ後ナデ、底部：ナデ	体～底部：指オサエ・板ナデ・ナデ	7.5Y3/1 オリーブ黒色	2.5Y5/1 黄灰色	良好	中・並						3.0			7/8	
73	27	SH02		須恵器	杯蓋	天井部：回転ヘラ切り後ナデ、体～口縁部：回転ナデ	天井～口縁：回転ナデ	5Y7/1 灰白色	N7/ 灰白色	良好	中・少					12.3				3/8	
74		SH02		須恵器	杯	口縁～体部：回転ナデ	口縁～体部：回転ナデ	N6/ 灰色	N6/ 灰色	良好	細・少					12.4				1/8	
75	27	SH02		須恵器	高杯	杯部：回転ケズリ後ナデ、脚部：回転ナデ	杯・脚部：回転ナデ	5Y6/1 黄灰色	5Y7/1 灰白色	良好	中・少						9.6			4/8	脚部焼歪み
76		SH02		須恵器	高杯	脚部：回転ナデ	脚部：回転ナデ	5Y6/1 黄灰色	5Y6/1 黄灰色	良好	中・少						12.4			1/8	
77		SH02		須恵器	高杯	脚部：回転ナデ・沈線 1	脚部：回転ナデ	7.5Y6/1 灰色	7.5Y6/1 灰色	良好	中・少						12.8			1/8	
78	27	SH02		土師器	竈	体部：指オサエ・板ナデ、鍔部：指オサエ・ナデ	体部：指オサエ・ナデ、鍔部：ナデ・板ナデ	7.5YR7/3 にぶい橙色	7.5YR7/3 にぶい橙色	良好	中・少									1/8 未満	
79		SH04		土師器	杯	口縁～体部：ミガキ、底部：ケズリ	口縁～体部：放射状暗文、底部：螺旋状暗文	5YR6/6 橙色	5YR6/6 橙色	良好	細・並					13.8	4.7			1/8 未満	
80		SH04	竈壁中	土師器	甕	口縁～頸部：ヨコナデ・マメツ、体部：ハケ	口縁～頸部：ヨコナデ・ハケ・マメツ、体部：板ナデ？	7.5YR8/4 浅黄橙色	7.5YR8/4 浅黄橙色	やや軟	中・並					20.7				2/8	
81		SH04		須恵器	杯蓋	天井～口縁：回転ナデ	天井～口縁：回転ナデ	7.5Y6/1 灰色	7.5Y6/1 灰色	良好	細・少					12.4				1/8 未満	
82		SH04		須恵器	杯	口縁～体部：回転ナデ	口縁～体部：回転ナデ	10Y6/1 灰色	5Y7/1 灰白色	良好	細・少					11.0				2/8	
83		SH04		須恵器	杯	口縁～体部：回転ナデ	口縁～体部：回転ナデ	2.5Y8/2 灰白色	2.5Y8/2 灰白色	やや軟	細・少					11.0				2/8	

第 17 表　出土土器観察表（3）

報文番号	図版	遺構名	層位	種別	器種	調整		色調		焼成	胎土				計測値（cm）			残存率	備考
						外面	内面	外面	内面		石英・長石	角閃石	雲母	輝石	結晶片岩	口径	器高	底径	その他		
84		SH04		須恵器	杯	口縁～体部：回転ナデ	口縁～体部：回転ナデ	5Y7/1 灰白色	5Y6/1 灰色	良好	細・少					11.9				1/8	
85		SH04		須恵器	平瓶	口縁：回転ナデ・沈線1	口縁：回転ナデ	N6/ 灰色	N6/ 灰色	良好	中・少					6.6				2/8	
87		SH05		土師器	椀	口縁～頸部：ヨコナデ？マメツ	口縁～頸部：ヨコナデ	7.5YR6/3 にぶい褐色	5YR6/3 にぶい褐色	良好	粗・並					15.7				1/8 未満	
88		SH05		須恵器	杯	体～底部：回転ケズリ後回転ナデ	体～底部：回転ナデ	7.5Y6/1 灰色	N6/ 灰色	良好	中・少									2/8	
89		SH05		須恵器	高杯	杯部：回転ナデ、回転ヘラ切り？後ナデ	杯部：回転ナデ	2.5Y7/1 灰白色	2.5Y7/1 灰白色	良好	中・少									破片	
90		SH05		須恵器	高杯	脚部：回転ナデ	脚部：回転ナデ	2.5Y8/1 灰白色	2.5Y8/1 灰白色	やや軟	中・並							11.2		2/8	
91		SD02		黒色土器	椀	底部：高台貼付・マメツ	底部：マメツ	5YR7/6 橙色	5YR3/1 黒褐色	やや軟	中・少							6.8		1/8	
92		SD03		弥生土器	壺	底部：マメツ	底部：マメツ	10YR5/3 にぶい黄橙色	7.5YR6/3 にぶい褐色	良好	中・少	細・並	細・少					5.5		1/8 未満	香東川下流域産
93		SD03		弥生土器	高杯	脚部：ヨコナデ	脚部：ケズリ	7.5YR5/4 にぶい褐色	7.5YR5/4 にぶい褐色	良好	中・少	細・少	細・少							1/8 未満	香東川下流域産
94		SK07		土師器	杯	口縁～体部：回転ナデ、底部：指オサエ・ナデ	口縁～体部：回転ナデ後放射状暗文、底部：回転ナデ後螺旋状暗文	7.5YR2/4 にぶい橙色	7.5YR7/4 にぶい橙色	良好	細・少					11.4	3.9			1/8	畿内系
95		SK07		土師器	杯	体部：回転ナデ、底部：回転ヘラ切り	体～底部：回転ナデ	7.5YR8/3 浅黄橙色	7.5YR8/3 浅黄橙色	良好	中・少					8.1				1/8	
96		SK07		施釉陶器	皿	体部：施釉、底部：露釉・回転糸切り	体～底部：施釉	2.5Y7/2 灰黄色（釉）	10Y7/2 灰白色（釉）	良好	細・少							5.5		1/8	瀬戸・美濃系
97		SK07		土師器	鍋	口縁：ヨコナデ、把手：指オサエ・ナデ、体部：板ナデ・ナデ、底部：格子タタキ・ナデ	口縁～把手：ヨコナデ、体部：板ナデ、底部：ハケ・ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙色	7.5YR7/6 橙色	良好	中・多		細・並			29.6				1/8	外面・底部内面煤付着
98		SK07		土師器	鍋	口縁：ヨコナデ・指オサエ、体部：指オサエ・ナデ？	口縁：ヨコナデ、体部：板ナデ・ナデ	10YR5/1 褐灰色	10YR7/3 にぶい黄橙色	良好	中・多					45.2				1/8 未満	外面煤厚く付着
99		SK07		土師器	鍋	口縁：指オサエ・ナデ後ヨコナデ、体部：指オサエ・ナデ	口縁：板ナデ後ヨコナデ、体部：板ナデ	10YR5/3 にぶい黄橙色	10YR7/3 にぶい黄橙色	良好	中・並					47.0				1/8 未満	外面煤付着
100		SK07		焼締陶器	壺	口縁～頸部：回転ナデ、体部：指オサエ・ナデ？、板ナデ	口縁～頸部：回転ナデ、ナデ、体部：指オサエ・ナデ、板ナデ	5YR4/2 灰褐色	5YR4/1 褐灰色	良好	粗・並					28.0				3/8	備前焼、胴部自然釉
101		SK07		焼締陶器	壺	口縁～体部：回転ナデ	口縁～頸部：回転ナデ、体部：回転ナデ後ナデ	7.5YR4/2 灰褐色	7.5YR4/1 褐灰色	良好	粗・並					13.9				4/8	備前焼
103		SD02	上層	土師器	皿	口縁：回転ナデ・マメツ、底部：回転ヘラ切り？マメツ	口縁～底部：マメツ	2.5Y8/3 淡黄色	2.5Y8/3 淡黄色	やや軟	中・少					7.7	1.3	5.6		1/8	外底面黒化
104		SD02		土師器	皿	口縁部：回転ナデ、底部：回転ヘラ切り？後ナデ	口縁～底部：回転ナデ？マメツ	2.5YR7/4 淡赤橙色	2.5YR7/4 淡赤橙色	良好	粗・少					8.2	1.4	5.8		1/8	
105		SD02		土師器	皿	口縁：回転ナデ、底部：回転糸切り後ナデ	口縁～底部：回転ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙色	10YR7/3 にぶい黄橙色	良好	中・並					8.0	1.6	5.7		3/8	
106		SD02		土師器	杯	口縁～体部：マメツ	口縁～体部：マメツ	10YR8/2 灰白色	10YR6/2 灰白色	やや軟	中・少					20.1				1/8 未満	
107		SD02	中層	土師器	皿	体部：マメツ、底部：回転ヘラ切り？マメツ	体～底部：マメツ	2.5YR6/6 橙色	2.5YR6/6 橙色	軟	細・少							6.6		3/8	
108		SD02		土師器	杯	口縁～体部：回転ナデ？マメツ、底部：回転ヘラ切り・マメツ	口縁～底部：回転ナデ・マメツ	7.5YR8/3 浅黄橙色	7.5YR8/3 浅黄橙色	軟	細・少							5.7		4/8	
109		SD02	石垣内堆土	土師器	杯	体部：回転ナデ・マメツ、底部：回転ヘラ切り	体～底部：回転ナデ	7.5YR7/3 にぶい橙色	2.5YR6/4 にぶい橙色	やや軟	細・少							6.9		8/8	
110		SD02	上層	土師器	杯	体部：回転ナデ・マメツ、底部：回転ヘラ切り後板状圧痕	体～底部：回転ナデ・マメツ	2.5YR6/4 にぶい橙色	10YR7/2 にぶい黄橙色	良好	中・並		細・少					8.2		2/8	
111		SD02	中層	土師器	杯	口縁～体部：回転ナデ、底部：回転ヘラ切り後ナデ	口縁～底部：回転ナデ	2.5YR6/6 橙色	2.5YR6/6 橙色	良好	中・並					12.4	3.6	8.2		1/8	
112		SD02	石垣内堆土	土師器	杯	口縁～底部：回転ナデ・マメツ、底部：回転ヘラ切り後板状圧痕	口縁～体部：回転ナデ・マメツ、底部：回転ナデ・ナデ	5YR7/4 にぶい橙色	5YR8/4 淡橙色	やや軟	中・少					13.1	2.8	7.2		7/8	

第18表　出土土器観察表（4）

報告番号	図版	遺構名	層位	種類	器種	調整		色調		焼成	胎土				計測値（cm）				残存率	備考
						外面	内面	外面	内面		石英・長石	角閃石	雲母	輝石	結晶片岩	口径	器高	底径	その他	
113		SD02		須恵器	椀	体部：回転ナデ、底部：回転糸切り	体～底部：回転ナデ	N6/ 灰色	N6/ 灰色	良好	中・並							5.7		3/8	電接系
114		SD02	中層	土師質土器	皿	口縁～体部：回転ナデ？マメツ	口縁～体部：回転ナデ？マメツ	10YR7/2 にぶい黄橙色	10YR7/2 にぶい黄橙色	やや軟	細・少					15.6				1/8 未満	
115		SD02	右裾内層上	土師質土器	椀	底部：高台貼付・マメツ	底部：マメツ	2.5YR6/4 にぶい橙色	2.5YR6/6 橙色	軟	細・少							6.2		1/8	
116		SD02	中層	黒色土器	椀	体部：マメツ、底部：高台貼付・マメツ	体～底部：マメツ	10YR6/3 にぶい黄橙色	2.5Y6/2 灰黄色	軟	中・少							8.1		1/8	
117		SD02	上層	土師質土器	椀	体部：マメツ、底部：高台貼付	体～底部：ナデ後ミガキ・マメツ	2.5Y8/1 灰白色	2.5Y8/1 灰白色	やや軟	中・少							6.4		1/8	
118	28	SD02		土師器	椀	体部：マメツ、底部：高台貼付・マメツ	体～底部：マメツ	5YR7/6 橙色	5YR7/6 橙色	軟	中・少							6.9		4/8	
119		SD02	中層	黒色土器	椀	底部：高台貼付後ナデ	底部：マメツ	5YR4/1 褐灰色	5YR3/1 黒褐色	やや軟	中・少							6.4		2/8	
120		SD02	右裾内層上	黒色土器	椀	底部：回転ヘラ切り？後高台貼付・ナデ	底部：ミガキ	10YR8/3 浅黄橙色	10YR3/1 黒褐色	良好	中・少							7.4		3/8	
121	28	SD02	中層	黒色土器	椀	体部：回転ナデ、底部：高台貼付後ナデ・マメツ	体～底部：ミガキ	10YR6/2 灰黄褐色	7.5Y2/1 黒色	良好	細・並		細・少					5.8		3/8	
122		SD02	下層	黒色土器	椀	底部：高台貼付・マメツ	底部：マメツ	5YR6/4 にぶい橙色	5YR4/1 褐灰色	やや軟	中・少							7.0		1/8	
123		SD02	上層	土師器	椀	底部：高台貼付後ナデ	底部：回転ナデ？マメツ	2.5Y4/1 黄灰色	2.5Y5/1 黄灰色	やや軟	中・少							4.5		8/8	
124		SD02	上層	黒色土器	椀	体部：マメツ、底部：高台貼付後ナデ	体～底部：ミガキ	7.5YR6/6 橙色	5Y4/1 灰色	やや軟	中・少							7.2		2/8	
125	28	SD02		黒色土器	椀	口縁～体部：回転ナデ、ミガキ、底部：高台貼付後ナデ	口縁～底部：ミガキ	10YR7/3 にぶい黄橙色	2.5GY2/1 黒色	良好	中・並					15.2	5.2	8.2		3/8	
126		SD02		須恵器	椀	体部：指オサエ・ナデ後ミガキ、底部：高台貼付後ナデ	体～底部：ナデ後ミガキ	5Y7/1 灰白色	5Y8/1 灰白色	良好	細・少							6.1		2/8	十瓶山周辺窯産
127		SD02	下層	瓦器	皿	口縁：ヨコナデ、体～底部：指オサエ・ナデ	口縁～底部：ナデ後ミガキ・平行暗文	2.5Y7/1 灰白色	2.5Y7/1 灰白色	良好	中・少					8.9	2.1			1/8	和泉型
128		SD02	下層	瓦器	椀	口縁：ヨコナデ、体部：ナデ？後ナデ？後ミガキ	口縁～体部：ナデ後ミガキ	N5/ 灰色	2.5Y8/1 灰白色	良好	中・少									1/8 未満	和泉型
129		SD02		瓦器	椀	口縁：回転ナデ、体部：指オサエ・ナデ後ミガキ	口縁～体部：ナデ後ミガキ・マメツ	N6/ 灰色	N6/ 灰色	良好	細・少					14.7				1/8 未満	和泉型
130		SD02		瓦器	椀	口縁：ヨコナデ、体部：指オサエ・ナデ後ミガキ	口縁～体部：ミガキ・マメツ	N4/ 灰色	N4/ 灰色	やや軟	細・少					14.4				1/8 未満	和泉型
131		SD02	上層	瓦器	椀	底部：高台貼付後ナデ	底部：ナデ後ミガキ	N6/ 灰色	N6/ 灰色	良好	細・少							4.6		2/8	和泉型
132		SD02	中層	灰釉陶器	椀	口縁～体部：回転ナデ	口縁～体部：回転ナデ？施釉	2.5Y7/1 灰白色（釉）	2.5Y6/2 灰オリーブ色（釉）	良好	細・少					13.6				1/8 未満	
133		SD02	上層	緑釉陶器	皿	体部：施釉、底部：高台削り出し、高台内にケズリ・露胎	体～底部：施釉	7.5Y6/1 灰色（釉）	7.5Y6/3 オリーブ黄色（釉）	良好	細・少									1/8	
134		SD02	中層	土師器	要	口縁：ヨコナデ、体部：ハケ	口縁～体部：ヨコナデ	10YR5/2 灰黄褐色	10YR5/2 灰黄褐色	良好	中・少	細・並	細・並							1/8 未満	
135		SD02	上層	土師器	要	口縁：ヨコナデ、頸部：指オサエ・ナデ	口縁～頸部：ヨコナデ、ナデ	5YR5/4 にぶい赤褐色	2.5Y5/3 黄褐色	良好	中・多		細・少							1/8 未満	口縁部内面煤付着
136		SD02		土師器	要	口縁：ヨコナデ、頸部：ナデ	口縁：ヨコナデ？マメツ	10YR2/3 にぶい黄橙色	10YR7/3 にぶい黄橙色	良好	中・多									1/8 未満	
137		SD02	中層	土師器	要	口縁～頸部：ヨコナデ、体部：ハケ	口縁：ハケ後ヨコナデ、体部：板ナデ後ナデ	10YR5/3 にぶい黄橙色	7.5YR4/1 褐灰色	良好	中・並					17.8				1/8	外面煤付着
138		SD02	中層	土師器	要	口縁～頸部：ヨコナデ、体部：ハケ	口縁：ハケ後ヨコナデ、体部：ハケ後板ナデ・ナデ	10YR5/3 にぶい黄橙色	10YR5/3 にぶい黄橙色	良好	中・並		細・少			26.2				1/8	外面煤付着
139		SD02	下層	土師器	羽釜	口縁：ヨコナデ、鍔部：指オサエ・ヨコナデ、体部：指オサエ・ナデ	口縁～体部：ナデ・マメツ	10YR6/3 にぶい黄橙色	10YR6/3 にぶい黄橙色	良好	中・多		細・並							1/8 未満	
140		SD02	下層	土師器	竈？	口縁：ナデ・突帯貼付	口縁：ハケ後ナデ	10YR7/2 にぶい橙色	7.5YR7/4 にぶい橙色	良好	粗・並		細・少							1/8 未満	

第 19 表　出土土器観察表（5）

報文番号	図版	遺構名	層位	種類	器種	調整 外面	調整 内面	色調 外面	色調 内面	焼成	胎土 石英・長石	胎土 角閃石	胎土 雲母	胎土 輝石	胎土 結晶片岩	計測値（cm） 口径	計測値（cm） 器高	計測値（cm） 底径	計測値（cm） その他	残存率	備考
141		SD02	下層	須恵器	壺	口縁：回転ナデ・斜線文・沈線1	口縁：回転ナデ	2.5Y7/1灰白色	2.5Y7/1灰白色	良好	中・少									1/8未満	
142		SD02	上層	須恵器	甕	体部：タタキ後ナデ、底部：未調整	体～底部：回転ナデ・ナデ	N7/灰白色	N7/灰白色	良好	細・少							12.8		1/8	十瓶山周辺窯産
143		SD02	上層	須恵器	甕	口縁～頸部：タタキ後回転ナデ、体部：格子タタキ	口縁～体部：回転ナデ・ナデ	N7/灰白色	N7/灰白色	良好	中・少					31.2				1/8	十瓶山周辺窯産
160		SD08		弥生土器	壺	体部：ミガキ、底部：マメツ	体～底部：板ナデ・ミガキ・指オサエ・マメツ	10YR6/1褐灰色	10YR3/1黒褐色	良好	中・多							8.0		1/8	
161		SD08		須恵器	杯蓋	天井～口縁：回転ナデ	天井～口縁：回転ナデ	N8/灰白色	N8/灰白色	良好	細・少									1/8未満	
162		SD08		須恵器	壺	口縁～頸部：回転ナデ・マメツ	口縁～頸部：回転ナデ・マメツ	5Y8/1灰白色	5Y8/1灰白色	やや軟	中・少					7.6				1/8	
163		SD08		土師器	杯	口縁：マメツ	口縁：マメツ	10YR7/2にぶい黄橙色	10YR7/3にぶい黄橙色	やや軟	細・少					15.0				1/8未満	
166		SD10	上層	須恵器	杯	口縁～体部：回転ナデ	口縁～体部：回転ナデ	N7/灰白色	N7/灰白色	良好	細・少									1/8未満	
167		SD10		土師質土器	皿	口縁：回転ナデ？マメツ	口縁：回転ナデ？マメツ	2.5Y7/3灰黄色	2.5Y7/3灰黄色	やや軟	中・少					12.0				1/8	
168		SD10	上層	須恵器	皿	底部：回転ヘラ切り？後ナデ	底部：回転ナデ	N6/灰色	N6/灰色	良好	中・少							6.6		1/8	
169		SD10	中層	須恵器	皿	口縁：回転ナデ、底部：回転ヘラ切り後板状圧痕	口縁～底部：回転ナデ	10Y7/1灰白色	10Y7/1灰白色	良好	中・少					14.8	2.2	11.8		2/8	内外面火襷
170		SD10	上層	須恵器	杯蓋	天井：摘み貼付後ナデ	天井：回転ナデ	5Y7/1灰白色	5Y7/1灰白色	良好	細・少									1/8未満	
171		SD10	上層	須恵器	杯	底部：高台貼付後ナデ	底部：回転ナデ	N5/灰色	N7/灰白色	良好	中・少							9.8		1/8未満	
172		SD10	上層	黒色土器	碗	底部：高台貼付後ナデ・マメツ	底部：マメツ	5YR6/4にぶい橙色	10YR4/1褐灰色	良好	中・少							7.3		1/8	
173		SD10		土師器	甕	口縁：ヨコナデ・マメツ	口縁：ヨコナデ・マメツ	10YR6/3にぶい黄橙色	10YR6/3にぶい黄橙色	良好	中・並		細・少							1/8未満	
174		SD10	上層	須恵器	壺	口縁～頸部：回転ナデ	口縁～頸部：回転ナデ	N5/灰色	N7/灰白色	良好	細・少					10.6				1/8未満	
175		SD10		須恵器	壺	体部：回転ナデ、底部：未調整？	体～底部：回転ナデ	2.5YR6/2灰赤色	N6/灰色	良好	細・少							6.6		1/8未満	
177		SD09	下層	黒色土器	碗	底部：高台貼付・マメツ	底部：マメツ	7.5YR6/4にぶい橙色	7.5Y4/1灰色	やや軟	中・少							5.7		1/8	
179		SK03		色絵磁器	蓋物	摘部：施釉		N8/灰白色（胎）	鮮緑色（呉須）	良好										破片	
180		SK03		染付磁器	蓋	摘み端：露胎、摘み内：施釉、摘み～口縁：施釉	天井～口縁：施釉	N8/灰白色（胎）	鮮青色（呉須）	良好						9.2	2.6	3.4		4/8	肥前系
181		SK03		染付磁器	碗	体部：施釉、高台端：露胎	体部：施釉・蛇の目釉剥ぎ、高台端：露胎	N8/灰白色（胎）	淡青色（呉須）	良好								4.0		4/8	肥前系
182		SK03		染付磁器	碗	体部：施釉、高台端：露胎	体部：施釉、高台端：露胎	N8/灰白色（胎）	淡青色（呉須）	良好								3.4		6/8	肥前系
183		SK03		染付磁器	徳利	口縁～体部：施釉	口縁：施釉、頸～体部：露胎、回転ナデ	N8/灰白色（胎）	10BG4/1暗青灰色（呉須）	良好						1.9				8/8	肥前系
184		SK03		施釉陶器	鉢	体部：施釉、底部：露胎・回転ケズリ	体部：施釉、底部：蛇の目釉剥ぎ	5Y7/2灰白色（胎）	5Y6/3オリーブ黄色（釉）	良好								9.5		1/8未満	肥前系
185		SK03		土師質土器	焙烙	口縁：ヨコナデ	口縁：ヨコナデ	7.5YR4/1褐灰色	7.5YR5/1褐灰色	良好	中・少									1/8未満	外面煤付着
186		SK03		土師質土器	火鉢	体部：板ナデ後下端ケズリ、底部：ハケ後ナデ	体部：ヨコハケ後指オサエ・ナデ、底部：ナデ	7.5YR6/6橙色	7.5YR6/6橙色	良好	中・少	細・少	中・少					27.8		1/8	
187		SK03		瓦質土器	鍋	口縁：回転ナデ、体部：ヨコナデ	口縁～体部：回転ナデ	10YR3/1黒褐色	10YR4/1褐灰色	良好	中・少					41.8				1/8未満	
188	28	SK03		須恵器	甕	体部：格子タタキ後板ナデ、底部：未調整	体～底部：当て具痕・回転ナデ・ナデ	7.5Y7/1灰白色	7.5Y7/1灰白色	良好	中・少							16.8		1/8未満	十瓶山周辺窯産

第20表　出土土器観察表（6）

報文番号	図版	遺構名	層位	種類	器種	調整		色調		焼成	胎土				計測値（cm）				残存率	備考
						外面	内面	外面	内面		石英・長石	角閃石	雲母	輝石	結晶片岩	口径	器高	底径	その他	
193		SK04		染付磁器	碗	口縁～体部：施釉	口縁～体部：施釉	N8/ 灰白色	薄青色（呉須）	良好						13.5				1/8 未満	肥前系
194		SK04		染付磁器	碗	口縁～体部：施釉	口縁～体部：施釉	N8/ 灰白色	明青色（呉須）	良好										1/8	肥前系？
196		SK08		黒色土器	椀	底部：高台貼付後ナデ	底部：ミガキ・マメツ	10YR2/3 にぶい黄橙色	10YR4/1 褐灰色	やや軟	細・少						7.0			1/8	
197		SK08		染付磁器	蓋	天井～口縁：施釉	天井～口縁：施釉	N8/ 灰白色（釉）	濃藍色（呉須）	良好										1/8 未満	肥前系
198		SK09		施釉陶器	碗	口縁～体部：施釉	口縁～体部：施釉	2.5/8/1 灰白色	5Y4/3 暗オリーブ色（呉須）	良好						9.1				2/8	京・信楽系
199		SK09		染付磁器	碗	口縁～体部：施釉	口縁～体部：施釉	N8/ 灰白色（釉）	濃青色（呉須）	良好										1/8 未満	肥前系
200		SK09		染付磁器	碗	口縁～体部：施釉	口縁～体部：施釉	N8/ 灰白色（釉）	10Y7/2 灰白色（釉）	良好						11.1				1/8 未満	
201		SK09		染付磁器	碗	口縁～高台：施釉、高台端：露胎	口縁～高台内：施釉、高台端：露胎	N8/ 灰白色（釉）	藍色（呉須）	良好						11.7	6.3	6.4		3/8	肥前系広東碗
202		SK09		施釉陶器	碗	口縁～高台：施釉、高台端：露胎	口縁～高台：施釉、高台端：露胎	10YR2/6 明黄褐色（釉）	明青色（呉須）	良好						11.7	6.7	5.5		4/8	瀬戸・美濃系
203		SK09		染付磁器	徳利	口縁～頸部：施釉	口縁～頸部：施釉	N8/ 灰白色（釉）	7.5GY8/1 明緑灰色（釉）	良好						4.0				3/8	肥前系
208		SD01		瓦器	椀	口縁：ナデ後ミガキ	口縁：ナデ後ミガキ	N5/ 灰色	N5/ 灰色	良好	細・少									1/8 未満	和泉型
209		SX01		白磁	皿	体～底部：回転ケズリ・化粧土	体～底部：施釉	7.5Y7/1 灰白色（釉）	5Y7/6 黄色（釉）	良好								3.2		1/8	中国製
210		SX01		青磁	皿	口縁～体部：施釉	口縁～体部：施釉	2.5Y7/2 灰黄色（釉）	10Y5/2 灰オリーブ色（釉）	良好						12.0				1/8 未満	龍泉窯系
211		SX01		施釉陶器	皿	口縁：施釉、体部：露胎、回転ナデ	口縁～体部：施釉	10YR7/4 にぶい黄橙色（釉）	5Y6/4 オリーブ黄色（釉）	良好						13.4				1/8 未満	肥前系
212		SX01		染付磁器	碗	口縁～体部：施釉	口縁～体部：施釉	N8/ 灰白色（釉）	N8/ 灰白色（釉）	良好						11.6				1/8	肥前系
213		SX01		染付磁器	碗	口縁～体部：施釉	口縁～体部：施釉	N8/ 灰白色（釉）	濃青色（呉須）	良好						11.0				1/8	肥前系
214		SX01		染付磁器	碗	口縁～体部：施釉	口縁～体部：施釉	N8/ 灰白色（釉）	濃青色（呉須）	良好						11.0				1/8	肥前系
215		SX01		染付磁器	碗	口縁～体部：施釉	口縁～体部：施釉	N8/ 灰白色（釉）	青色（呉須）	良好						10.8				1/8 未満	肥前系
216		SX01		染付磁器	蓋物	口縁～体部：施釉	口縁～体部：露胎、体部：施釉	N8/ 灰白色（釉）	濃青色（呉須）	良好						10.8				1/8	肥前系
217		SX01		施釉陶器	蓋	口縁：露胎・回転ナデ、天井部：化粧土・回転ナデ	口縁：露胎・回転ナデ、天井部：施釉	5Y7/2 灰白色（釉）	2.5GY7/1 明オリーブ灰色（釉）	良好						16.6				1/8	京・信楽系
218	28	SX01		焼締陶器	壺	口縁～体部：回転ナデ・沈線2	口縁～体部：回転ナデ・指オサエ	N5/ 灰色	N 7/ 灰白色	良好	中・少					12.0				3/8	備前焼
219		SX01		焼締陶器	壺	体部：回転ナデ・自然釉、底部：未調整	体～底部：回転ナデ	2.5/8/2 灰白色	N7/ 灰白色	良好	中・少							18.0		1/8 未満	備前焼
220		SX01		焼締陶器	擂鉢	体部：回転ナデ、底部：未調整？	体～底部：回転ナデ・卸目	10YR5/1 褐灰色	7.5YR5/1 褐灰色	良好	中・少							14.0		1/8 未満	備前焼
221		SX01		焼締陶器	擂鉢	体部：回転ナデ・指オサエ、底部：未調整？マメツ	体～底部：回転ナデ・卸目・マメツ	7.5YR6/3 にぶい褐色	7.5YR6/3 にぶい褐色	良好	粗・並							14.0		1/8 未満	備前焼
222		SX01		土師質土器	鍋	口縁～頸部：ヨコナデ、体部：ハケ・ナデ	口縁～体部：ハケ	7.5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR6/4 にぶい橙色	良好	中・少		細・少			30.6				1/8 未満	
223		SX01		焼締陶器	水屋甕	体部：回転ナデ後突帯・把手貼付	体部：回転ナデ後指オサエ	7.5YR5/2 灰褐色	2.5YR5/2 灰赤色	良好	中・少									1/8 未満	備前焼
224		SX01		焼締陶器	甕	体部：回転ナデ、底部：未調整	体～底部：回転ナデ・自然釉	5YR4/2 灰褐色	5Y7/1 灰白色	良好	中・少							39.1		1/8 未満	備前焼
225		SX01	攪中	焼締陶器	甕	体部：回転ナデ、底部：未調整	体～底部：回転ナデ	10YR4/1 褐灰色	7.5YR5/2 灰褐色	良好	中・少									1/8 未満	備前焼
226		SX01		瓦質土器	羽釜	鍔部：回転ナデ、体部：ナデ？マメツ	体部：ナデ？マメツ	7.5YR5/3 にぶい褐色	7.5YR5/1 褐灰色	良好	細・少								27.7（鍔部）	1/8 未満	
234	27	SP07		弥生土器	甕	口縁：タタキ後ヨコナデ、体部：タタキ後ハケ、底部：ナデ？マメツ	口縁：ヨコハケ、体～底部：ハケ・指オサエ・ナデ	10YR5/1 褐灰色	10YR6/2 灰黄褐色	良好	中・並		細・少			14.0	18.4			4/8	
235	27	SP07		弥生土器	壺	口縁：タタキ後ナデ、体部：指オサエ・ナデ	体部：板ナデ・マメツ、頸台部：指オサエ・ナデ	10YR2/4 にぶい黄橙色	10YR2/4 にぶい黄橙色	良好	中・多						3.2			7/8	
236		SP28		須恵器	杯	口縁～体部：回転ナデ、底部：回転ヘラ切り後ナデ	口縁～底部：回転ナデ	5Y7/1 灰白色	5Y7/1 灰白色	良好	中・少					11.1				3/8	

第 21 表　出土土器観察表（7）

報文番号	図版	遺構名	層位	種別	器種	調整		色調		焼成	胎土				計測値（cm）			残存率	備考
						外面	内面	外面	内面		石英・長石	角閃石	雲母	輝石	結晶片岩	口径	器高	底径	その他		
237		SP42		須恵器	高杯	脚部：回転ナデ	脚部：回転ナデ	N7/ 灰白色	N7/ 灰白色	良好	中・少								5/8		
238		SP02		土師質土器	碗	底部：高台貼付後ナデ	底部：マメツ	10YR8/3 浅黄橙色	10YR8/3 浅黄橙色	良好	中・少							5.0	3/8		
241		SP05		土師質土器	風呂釜	体部：ヨコ板ナデ・ナデ、底部：板ナデ・ナデ、高台：回転ナデ	体部：ヨコ板ナデ・ナデ、底部：回転ナデ	7.5YR8/4 にぶい橙色	7.5YR8/4 にぶい橙色	良好	中・少	細・少						48.0	3/8	外面に煤付着
242	包含層 I			土師質土器	皿	口縁～体部：回転ナデ、底部：回転ヘラ切り？マメツ	口縁～底部：回転ナデ？マメツ	2.5Y8/3 淡黄色	2.5Y8/3 淡黄色	良好	中・並					8.2	1.3	6.4	1/8		
243	包含層 I			土師質土器	皿	底部：回転ヘラ切り？マメツ	底部：マメツ	10YR8/3 浅黄橙色	5Y7/1 灰白色	やや軟	中・多							7.6	2/8		
244	包含層 I			土師質土器	皿	口縁～体部：回転ナデ、底部：回転ヘラ切り後ナデ	口縁～底部：回転ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	良好	中・少					10.6	2.3	6.9	5/8		
245	包含層 I			瓦器	皿	口縁：ヨコナデ、底部：指オサエ・ナデ・マメツ	口縁：ヨコナデ・マメツ、底部：マメツ	N4/ 灰色	N4/ 灰色	やや軟	細・少					7.8	1.4		1/8 未満	和泉型	
246	包含層 I			土師質土器	杯	体部：回転ナデ、底部：回転ヘラ切り後板状圧痕・ナデ	体～底部：回転ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	良好	中・並		細・並					7.2	1/8		
247	包含層 I			土師質土器	杯	口縁～体部：回転ナデ・マメツ、底部：回転ヘラ切り？マメツ	口縁～底部：回転ナデ・マメツ	7.5YR7/6 橙色	7.5YR7/6 橙色	軟	中・少					11.2	3.6	6.0	5/8		
248	包含層 I			緑釉陶器	碗	体部：施釉、高台内：施釉	体～底部：施釉	10YR8/3 浅黄橙色（釉）	黄緑色（釉）	良好								7.4	1/8 未満	近江産か？	
249	包含層 I			土師質土器	碗	底部：高台貼付・マメツ	底部：マメツ	10YR8/4 にぶい黄橙色	10YR4/3 にぶい黄褐色	良好	中・少							5.3	2/8		
250	包含層 I			土師質土器	碗	底部：高台貼付・マメツ	底部：マメツ	10YR8/4 浅黄橙色	10YR7/4 にぶい黄橙色	良好	中・少							7.4	1/8		
251	包含層 I			黒色土器	碗	底部：高台貼付・マメツ	底部：マメツ	7.5YR8/3 浅黄橙色	10YR4/1 褐灰色	やや軟	細・少							6.4	1/8		
252	包含層 I			黒色土器	碗	体～底部：高台貼付・マメツ	体～底部：マメツ	7.5YR7/6 橙色	2.5Y4/1 黄灰色	良好	中・少							8.2	1/8		
253	包含層 I			黒色土器	碗	口縁～体部：回転ナデ後ミガキ、底部：回転ヘラ切り？後高台貼付・ナデ	口縁～底部：板ナデ？後ミガキ	10YR5/3 にぶい黄橙色	10YR3/1 黒褐色	良好	中・並					12.9	5.3	6.7	4/8		
254	包含層 I			須恵器	碗	体部：回転ナデ後ミガキ？底部：高台貼付後ナデ	体～底部：ナデ後ミガキ	5Y8/1 灰白色	5Y8/1 灰白色	良好	細・少							6.2	2/8	十稲山開道窯産	
255	包含層 I			瓦器	碗	体部：指オサエ、底部：高台貼付後ナデ	体～底部：ナデ後格子状暗文？	7.5Y6/1 灰色	7.5Y7/1 灰白色	良好	細・少							3.9	1/8	和泉型	
256	包含層 I			白磁	碗	口縁～体部：施釉	口縁～体部：施釉	7.5Y8/1 灰 白 色（釉）	7.5Y7/2 灰 白 色（釉）	良好									1/8 未満	中国製	
257	包含層 I			白磁	碗	口縁～体部：施釉・下端露胎	口縁～体部：施釉	N8/ 灰白色（釉）	7.5Y7/1 灰 白 色（釉）	良好						15.9			2/8	中国製	
258	包含層 I			白磁	碗	口縁～体部：施釉	口縁～体部：施釉	2.5Y7/3 浅 黄 色（釉）	2.5Y7/2 灰 黄 色（釉）	良好						15.5			1/8 未満	中国製	
259	包含層 I			白磁	碗	口縁～体部：施釉	口縁～体部：施釉	5Y8/1 灰白色（釉）	5Y7/2 灰白色（釉）	良好						15.7			1/8	中国製	
260	包含層 I			白磁	碗	体～底部：ケズリ・露胎	体～底部：沈線1・施釉	2.5Y8/2 灰 白 色（釉）	5Y7/3 浅黄色（釉）	良好								7.1	2/8	中国製	
261	包含層 I			青磁	碗	口縁～体部：施釉	口縁～体部：施釉・片彫文	10Y8/1 灰 白 色（釉）	2.5GY7/1 明オリーブ灰色（釉）	良好									1/8 未満	龍泉窯系	
262	包含層 I			須恵器	壺	把手：ケズリ後ナデ	体部：回転ナデ	N6/ 灰色	N6/ 灰色	良好	細・少								破片		
263	包含層 I			瓦質土器	鉢	口縁～体部：マメツ	口縁～体部：マメツ	N5/ 灰色	N5/ 灰色	やや軟	細・少								1/8 未満		
264	包含層 I			須恵器	甕	口縁：回転ナデ・櫛描文	口縁：回転ナデ	N5/ 灰色	N 7/ 灰白色	良好	中・少								1/8 未満		
265	包含層 I			土師質土器	火鉢？	脚部：指オサエ・ナデ		10YR6/3 にぶい黄橙色		良好	中・少								破片		
266	包含層 I			須恵器	片口鉢	口縁～体部：回転ナデ	口縁～体部：回転ナデ	N6/ 灰色	N6/ 灰色	良好	中・並					27.4			1/8 未満	東播系	
267	包含層 I			焼締陶器	擂鉢	口縁～体部：回転ナデ・ナデ	口縁～体部：回転ナデ後櫛目	2.5Y6/6 橙色	2.5YR5/1 赤灰色	良好	粗・少					30.0			1/8 未満	備前焼	
283	包含層 II			土師器	杯	口縁～体部：マメツ	口縁～体部：マメツ	7.5YR6/3 にぶい褐色	7.5YR5/3 にぶい褐色	やや軟	細・少					17.6			1/8 未満		

第 22 表　出土土器観察表（8）

報告番号	図版	遺構名	層位	種類	器種	調整		色調		焼成	粘土				計測値（cm）			残存率	備考
						外面	内面	外面	内面		石英・長石	角閃石	雲母	輝石	結晶片岩	口径	器高	底径	その他	
284		包含層Ⅱ		土師器	杯	口縁～底部：マメツ	口縁～底部：マメツ	5YR7/4 にぶい橙色	5YR7/4 にぶい橙色	やや軟	中・少				中・少	16.4	3.4	12.4		3/8	阿波搬入土器
285		包含層Ⅱ		土師器	杯	体～底部：マメツ	体～底部：マメツ	5YR7/4 にぶい橙色	5YR7/4 にぶい橙色	やや軟	中・少				中・少			11.2		1/8 未満	
286	28	包含層Ⅱ		土師器	皿	口縁～体部：ヨコナデ・ミガキ？マメツ	口縁～体部：沈線 1・マメツ	2.5YR6/8 橙色	5YR6/6 橙色	良好	細・少					21.8				1/8 未満	内外面赤彩
287		包含層Ⅱ		須恵器	甕	口縁～体部：マメツ	口縁～体部：マメツ	10YR7/4 にぶい黄橙色	5Y8/1 灰白色	軟	中・少					17.6				1/8	
288		包含層Ⅱ		須恵器	杯蓋	天井：回転ヘラ切り？後ツマミ貼付・ナデ・回転ナデ	天井：回転ナデ・ナデ	7.5Y7/1 灰白色	N7/ 灰白色	良好	細・少									8/8	
289		包含層Ⅱ		須恵器	杯蓋	天井～口縁：回転ナデ	天井～口縁：回転ナデ	7.5Y6/1 灰色	7.5Y8/1 灰白色	良好	細・少					14.9				1/8 未満	
290		包含層Ⅱ		須恵器	杯蓋	天井：回転ヘラ切り？後ナデ，口縁：回転ナデ	天井～口縁：回転ナデ	5Y8/1 灰白色	5Y8/1 灰白色	やや軟	細・少					15.6				1/8	
291		包含層Ⅱ		須恵器	杯蓋	天井～口縁：回転ナデ	天井～口縁：回転ナデ	N6/ 灰色	N5/ 灰色	良好	粗・少					17.6				3/8	内外面重焼痕
292		包含層Ⅱ		須恵器	杯蓋	天井～口縁：回転ナデ	天井～口縁：回転ナデ	N6/ 灰色	N6/ 灰色	良好	中・少					19.2				1/8	
293		包含層Ⅱ		須恵器	杯蓋	天井～口縁：回転ナデ	天井～口縁：回転ナデ	N5/ 灰色	N5/ 灰色	良好	中・少					19.8				1/8	
294		包含層Ⅱ		須恵器	杯	口縁～体部：回転ナデ，底部：回転ヘラ切り後ナデ	口縁～底部：回転ナデ	5Y7/1 灰白色	5Y8/1 灰白色	やや軟	細・少					13.4	3.0	10.4		2/8	
295		包含層Ⅱ		須恵器	皿	口縁～体部：回転ナデ，底部：回転ヘラ切り？マメツ	口縁～底部：回転ナデ・マメツ	7.5Y8/1 灰白色	7.5Y8/1 灰白色	軟	細・少					14.6	2.5	11.3		2/8	
296		包含層Ⅱ		須恵器	杯	口縁～体部：回転ナデ，底部：回転ヘラ切り後ナデ	口縁～底部：回転ナデ	7.5Y7/1 灰白色	7.5Y7/1 灰白色	良好	細・少					14.9	3.0	11.4		1/8	
297		包含層Ⅱ		須恵器	杯	口縁～体部：回転ナデ，底部：回転ヘラ切り後ナデ	口縁～底部：回転ナデ	7.5Y6/1 灰色	7.5Y7/1 灰白色	良好	中・少					15.2	2.9	11.2		1/8	外面火襷
298		包含層Ⅱ		須恵器	杯	口縁～体部：回転ナデ	口縁～体部：回転ナデ	N6/ 灰色	N6/ 灰色	良好	中・少					14.7				1/8 未満	
299		包含層Ⅱ		須恵器	皿	口縁～体部：回転ナデ	口縁～底部：回転ナデ	N7/ 灰白色	N7/ 灰白色	良好	細・少					14.4				1/8 未満	内外面火襷
300		包含層Ⅱ		須恵器	杯	口縁～体部：回転ナデ，底部：回転ヘラ切り後ナデ	口縁～底部：回転ナデ	7.5Y7/1 灰白色	7.5Y7/1 灰白色	良好	中・少					11.8		9.2		2/8	
301		包含層Ⅱ		須恵器	杯	口縁～体部：回転ナデ，底部：回転ヘラ切り後ナデ	口縁～底部：回転ナデ	N7/ 灰白色	N7/ 灰白色	良好	粗・少					11.4		9.6		1/8	
302		包含層Ⅱ		須恵器	杯	体部：回転ナデ，底部：回転ヘラ切り後ナデ	体～底部：回転ナデ	5Y7/1 灰白色	5Y6/1 灰色	良好	細・少							8.4		1/8	
303		包含層Ⅱ		須恵器	皿	底部：回転ヘラ切り後高台貼付・ナデ	底部：回転ナデ・ナデ	N6/ 灰色	N6/ 灰色	良好	細・少							13.1		1/8	
304		包含層Ⅱ		須恵器	杯	体部：回転ナデ，底部：回転ヘラ切り？後高台貼付・ナデ	体～底部：回転ナデ	N7/ 灰白色	N7/ 灰白色	良好	細・少							9.7		2/8	
305		包含層Ⅱ		須恵器	杯	体部：回転ナデ・マメツ，底部：高台貼付・マメツ	体～底部：マメツ	7.5Y7/1 灰白色	7.5Y7/1 灰白色	軟	中・少							9.1		3/8	
306		包含層Ⅱ		須恵器	杯	体部：回転ナデ，底部：回転ヘラ切り後高台貼付・ナデ	体～底部：回転ナデ	5Y6/1 灰色	N7/ 灰白色	良好	中・少							11.6		1/8	
307		包含層Ⅱ		須恵器	杯	体部：回転ナデ，底部：回転ヘラ切り後高台貼付・ナデ	体～底部：回転ナデ	10Y6/1 灰色	N7/ 灰白色	良好	中・少							10.7		1/8 未満	
308		包含層Ⅱ		須恵器	杯	体部：回転ナデ，底部：高台貼付後ナデ	体～底部：回転ナデ	7.5Y5/1 灰色	N6/ 灰色	良好	細・少							11.2		1/8	
309		包含層Ⅱ		須恵器	杯	口縁～体部：回転ナデ，底部：回転ヘラ切り後高台貼付・ナデ	口縁～底部：回転ナデ	N6/ 灰色	N6/ 灰色	良好	中・少					10.9	4.1	7.6		3/8	
310		包含層Ⅱ		須恵器	杯	口縁～体部：回転ナデ，底部：回転ヘラ切り後高台貼付・ナデ	口縁～底部：回転ナデ・ナデ	N6/ 灰色	N6/ 灰色	良好	中・少					13.3	3.9	10.2		3/8	

第 23 表　出土土器観察表（9）

報文番号	図版	遺構名	層位	種別	器種	調整		色調		焼成	胎土					計測値（cm）				残存率	備考
						外面	内面	外面	内面		石英・長石	角閃石	雲母	輝石	結晶片岩	口径	器高	底径	その他		
311		包含層Ⅱ		須恵器	杯	口縁～体部：回転ナデ、自然釉、底部：高台貼付後ナデ	口縁～底部：回転ナデ	7.5Y7/1 灰白色	N 7/ 灰白色	良好	細・少					16.4	7.1	11.6		1/8 未満	
312		包含層Ⅱ		須恵器	壺	口縁：回転ナデ・ヘラ描き斜格子文・沈線２	口縁：回転ナデ	N7/ 灰白色	N7/ 灰白色	良好	中・少									1/8 未満	
313		包含層Ⅱ		須恵器	壺？	体部：回転ナデ、底部：板状圧痕・未調整	体～底部：回転ナデ	N6/ 灰色	N5/ 灰色	良好	中・少							7.8		1/8	
314		包含層Ⅱ		須恵器	壺	体部：回転ケズリ後ナデ、底部：高台貼付後ナデ	体～底部：回転ナデ	N6/ 灰色	N6/ 灰色	良好	中・少							6.0		1/8 未満	
315		包含層Ⅱ		須恵器	壺？	体部：回転ケズリ後ナデ、底部：高台貼付後ナデ	体～底部：回転ナデ	N6/ 灰色	N6/ 灰色	良好	中・並							10.8		1/8 未満	
316		包含層Ⅱ		須恵器	壺	底部：回転ヘラ切り後高台貼付・ナデ	底部：指オサエ・ナデ	N8/ 灰白色	N8/ 灰白色	良好	中・並							9.8		8/8	
317		包含層Ⅱ		土師器	高杯	脚柱部：メントリ・マメツ	脚柱部：ナデ？マメツ	7.5YR8/3 浅黄橙色	7.5YR8/3 浅黄橙色	やや軟	中・少									8/8	
318		包含層Ⅱ		土師器	椀	口縁：ヨコナデ、体部：ハケ	口縁：ヨコナデ、体部：ハケ後ナデ	7.5YR7/3 にぶい橙色	10YR7/3 にぶい黄橙色	良好	中・多					23.6				1/8	
319		包含層Ⅱ		土師器	羽釜	口縁～胴部：ヨコナデ	口縁～体部：ハケ後ナデ	7.5YR5/3 にぶい褐色	7.5YR6/4 にぶい橙色	良好	粗・並					21.2				1/8	
320		包含層Ⅱ		須恵器	甕	口縁～頸部：タタキ？後回転ナデ	口縁～頸部：回転ナデ、頸部：ハケ	10Y5/1 灰色	5Y6/1 灰色	良好	細・少					23.0				1/8	千鶴山周辺窯産
321		包含層Ⅱ		須恵器	甕	口縁～頸部：回転ナデ、体部：タタキ	口縁～頸部：回転ナデ、体部：ナデ	7.5Y7/1 灰白色	7.5Y7/1 灰白色	良好	細・並					24.8				1/8	
322		包含層Ⅱ		土師器	鍋	胴部：ハケ・ヨコナデ	胴部：ハケ後ヨコナデ・ナデ	10YR5/2 灰黄褐色	7.5YR6/6 橙色	良好	粗・多									破片	外面煤付着
323		包含層Ⅱ		弥生土器	壺底上部	脚部：指オサエ・マメツ	脚部：指オサエ・マメツ	2.5YR5/6 明赤褐色	5YR5/4 にぶい赤褐色	良好	中・並							4.2		8/8	
332	29	包含層Ⅱ		縄文土器	深鉢	口縁：ヨコナデ・刻み目突帯	口縁：ナデ	10YR8/2 灰白色	2.5Y6/1 黄灰色	良好	粗・並									1/8 未満	
333		包含層Ⅱ		弥生土器	壺	口縁：刻み目突帯２・マメツ	口縁：マメツ	2.5Y8/1 灰白色	2.5Y8/1 灰白色	やや軟	中・多					10.8				2/8	
334		包含層Ⅱ		弥生土器	壺	口縁：ヨコナデ？マメツ	口縁：マメツ	7.5Y5/4 にぶい褐色	2.5Y4/1 黄灰色	良好	中・並	細・少	細・少			16.4				1/8 未満	香東川下流域産
335		包含層Ⅱ		土師器	壺	口縁～頸部：ヨコナデ？マメツ	口縁：ヨコナデ？マメツ、頸部：指オサエ？	10YR7/3 にぶい黄橙色	10YR7/2 にぶい黄橙色	やや軟	中・多					15.8				1/8	
336	29	包含層Ⅱ		土師器	甕	口縁～頸部：ヨコナデ、体～底部：ハケ・マメツ	口縁～頸部：ヨコナデ、マメツ、体～底部：ハケメツ後指オサエ・ナデ	2.5Y7/3 浅黄色	10YR7/4 にぶい黄橙色	良好	粗・並					15.2	23.2			4/8	
337		包含層Ⅱ		弥生土器	甕	体～底部：マメツ	体～底部：マメツ	2.5Y8/2 灰白色	2.5Y6/1 黄灰色	良好	粗・多							6.6		1/8	
338		包含層Ⅱ		弥生土器	壺	体～底部：マメツ	体～底部：マメツ	2.5Y7/4 淡赤橙色	10YR8/1 灰白色	やや軟	中・多							8.2		1/8	
339		包含層Ⅱ		弥生土器	甕	体部：板ナデ・ナデ、マメツ、底部：マメツ	体～底部：指オサエ・マメツ	5YR6/4 にぶい橙色	10YR7/4 にぶい黄橙色	良好	中・多							8.0		1/8	
340		包含層Ⅱ		弥生土器	甕	体部：板ナデ？マメツ、底部：指オサエ・ナデ、マメツ	体～底部：指オサエ後板ナデ？マメツ	10YR8/2 灰白色	10YR8/2 灰白色	やや軟	粗・多							7.8		4/8	
341		包含層Ⅱ		弥生土器	甕	体部：タタキ後ナデ、底部：ナデ	体～底部：ミガキ	7.5YR5/3 にぶい褐色	7.5YR8/4 浅黄橙色	良好	粗・並							6.0		7/8	
342		包含層Ⅱ		弥生土器	甕	体部：指オサエ・ナデ、底部：ナデ・マメツ	体～底部：指オサエ・ナデ	7.5YR6/6 橙色	7.5YR7/4 にぶい橙色	良好	中・並							4.2		3/8	
343	29	包含層Ⅱ		弥生土器	鉢	体部：指オサエ・板ナデ、底部：指オサエ・ナデ	体～底部：指オサエ・ナデ	7.5YR8/3 浅黄橙色	10YR6/2 灰黄褐色	良好	粗・多							4.0		8/8	
347		包含層Ⅱ		土師器	甕	口縁～頸部：ヨコナデ	口縁～頸部：ヨコナデ	10YR8/2 灰白色	10YR8/3 浅黄橙色	良好	中・多					11.0				1/8 未満	
348	28	包含層Ⅱ		土師器	甕	口縁～頸部：ヨコナデ？マメツ	口縁：ハケ後ヨコナデ、体部：板ナデ？マメツ	7.5YR7/3 にぶい橙色	10YR6/2 灰黄褐色	良好	中・並					12.7				2/8	
349		包含層Ⅱ		土師器	高杯	口縁：マメツ	口縁：マメツ	2.5Y8/2 灰白色	10YR7/3 にぶい黄橙色	やや軟	中・並					16.4				1/8 未満	
350		包含層Ⅱ		土師器	高杯	杯部：ヨコナデ・ナデ・マメツ	杯部：板ナデ・ナデ	10YR8/2 灰白色	10YR8/3 浅黄橙色	良好	中・並		細・少							2/8	
351		包含層Ⅱ		土師器	高杯	杯部：ハケ・ナデ	杯部：ミガキ・マメツ	10YR8/2 灰白色	7.5YR8/3 浅黄橙色	良好	中・多									8/8	

第 24 表　出土土器観察表（10）

報告番号	図版	遺構名	層位	種類	器種	調整 外面	調整 内面	色調 外面	色調 内面	焼成	胎土 石英・長石	胎土 角閃石	胎土 雲母	胎土 輝石	胎土 結晶片岩	計測値（cm） 口径	計測値（cm） 器高	計測値（cm） 底径	計測値（cm） その他	残存率	備考
352		包含層Ⅱ		土師器	高杯	脚柱部：ハケ・ヨコナデ・マメツ	脚柱部：ケズリ後ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙色	10YR7/3 にぶい黄橙色	良好	中・並									8/8	
353		包含層Ⅱ		土師器	高杯	脚柱部：メントリ・ヨコナデ・マメツ	脚柱部：ケズリ・ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙色	10YR7/2 にぶい黄橙色	良好	中・並		細・少							8/8	
354		包含層Ⅱ		土師器	高杯	脚柱部：メントリ・ナデ、マメツ、脚裾部：ハケ・ナデ・マメツ	脚柱部：ケズリ後ナデ、脚裾部：ナデ	2.5Y8/2 灰白色	2.5Y7/2 灰黄色	良好	粗・並									8/8	
355		包含層Ⅱ		土師器	高杯	脚裾部：ハケ・ヨコナデ・マメツ	脚柱部：ケズリ、脚裾部：マメツ	10YR7/2 にぶい黄橙色	10YR6/2 灰黄褐色	やや軟	中・少							15.0		1/8	
356		包含層Ⅱ		弥生土器	壺	体部：指オサエ・ナデ、底部：ナデ	体～底部：板ナデ・マメツ	10YR7/3 にぶい黄橙色	10YR7/3 にぶい黄橙色	良好	中・並		細・少					4.2		8/8	
357		包含層Ⅱ		土師器	小型丸底土器	口縁～体部：ナデ？マメツ	口縁：マメツ、体部：ケズリ？後ナデ	10YR8/2 灰白色	10YR8/2 灰白色	良好	中・並					6.4				1/8	未調
358		包含層Ⅱ		弥生土器	鉢	口縁：ヨコナデ？マメツ、体～底部：指オサエ・ナデ	口縁：ヨコナデ？マメツ、体～底部：指オサエ・ナデ	10YR7/1 灰白色	10YR7/2 にぶい黄橙色	やや軟	中・少					4.6	4.0			1/8	
359		包含層Ⅱ		須恵器	杯蓋	天井～口縁：回転ナデ	天井～口縁：回転ナデ	N6/ 灰色	N6/ 灰色	良好	中・少					15.4				1/8	
360	29	包含層		土師器	椀	体部：マメツ、底部：高台貼付・マメツ	体～底部：マメツ	5YR6/6 橙色	5YR7/6 橙色	やや軟	中・少							8.1		8/8	
361		包含層		須恵器	鉢	口縁～体部：回転ナデ	口縁～体部：回転ナデ	N6/ 灰色	N6/ 灰色	良好	細・少									1/8	未調	東播系
362	28	包含層		白磁	椀	口縁～体部：施釉	口縁～体部：施釉	2.5Y8/1 灰白色（釉）	2.5Y7/2 灰黄色（釉）	良好						16.1				1/8	中国産
363		包含層		白磁	椀	口縁～体部：施釉	口縁～体部：施釉	N8/ 灰白色	7.5Y7/2 灰白色（釉）・	良好										1/8	未調	中国製
364		包含層		青磁	椀	口縁～体部：施釉	口縁～体部：施釉	N6/ 灰色（釉）	7.5Y6/3 オリーブ黄色（釉）	良好										1/8	未調	中国製
365		包含層		青磁	椀	体部：施釉	体部：施釉	5Y7/1 灰白色（釉）	5Y6/2 灰オリーブ色（釉）	良好										1/8		龍泉窯系
366	28	包含層		青磁	椀	口縁～体部：施釉	口縁～体部：施釉	N8/ 灰白色（釉）	2.5GY5/1 オリーブ灰色（釉）	良好						16.2				1/8	未調	龍泉窯系
367		包含層		白磁	壺	頸～体部：施釉	頸～体部：施釉・回転ナデ	10YR/1 灰白色（釉）	7.5Y7/2 灰白色（釉）	良好										1/8	未調	中国製
368		包含層		弥生土器	高杯	杯部：ミガキ・マメツ、脚柱部：ミガキ？マメツ	杯部：マメツ、脚柱部：ナデ？	2.5Y8/2 灰白色	10YR8/3 浅黄橙色	やや軟	中・少									8/8	
369		包含層		須恵器	壺	体部：回転ケズリ後ナデ、底部：高台貼付後ナデ	体～底部：回転ナデ	5YR6/1 褐灰色	5YR7/2 明褐灰色	良好	細・少							10.6		1/8	
370		包含層		土師質土器	鍋	口縁：ヨコナデ・ナデ	口縁：ヨコナデ・ナデ	5Y5/1 灰色	10YR6/3 にぶい黄橙色	良好	中・並									1/8	未調	外面煤付着

第 25 表　出土土器観察表（11）

遺物番号	図版	地区名	遺構名	層位	器種	計測値（cm・g）				材質	残存	備考
						現存長	最大幅	最大厚	重量			
6	31	6区	包含層Ⅳ		石塊Ⅰ	6.66	4.82	0.95	48.08	泥質片岩（やや珪質）	半折	
7	31	6区	包含層Ⅳ		楔形石器	6.16	4.12	1.32	40.11	サヌカイト		
8	31	6区	包含層Ⅳ		石鏃	1.49	1.14	0.25	0.51	サヌカイト	完存	
9	31	6区	包含層Ⅳ		石鏃	2.91	1.82	0.35	1.67	サヌカイト	ほぼ完存	
10	32	6区	包含層Ⅳ		石錐	18.7	6.5	4.7	953.04	泥質片岩（やや珪質）	上下端欠損	
70	31	6区	SR01	上層	石鏃	2.03	0.87	0.36	0.76	サヌカイト	下半欠損	
71	31	4区	SR01	中層	磨石	8.99	6.49	5.77	460.09	砂岩	完存	
156	32	2区	SD02	上層	紡石	6.34+	4.91+	3.12+	134.15	流紋岩	破片	
157		2区	SD02	下層	紡石	6.24	2.34	2.06	51.09	珪質泥岩	上下端欠損	
164	31	6区	SD08		石鏃	2.22	1.24	0.34	0.95	サヌカイト	先端部欠損	
191	32	1区	SK03		尾石	15.5	12.9	6.5	1,305.54	角礫凝灰岩	欠損	
239	31	2区	SP05		石鏃	1.60	1.00	0.27	0.36	サヌカイト	完存	
282	31	4区	包含層Ⅰ		磨石	4.8	7.0	4.3	164.34	流紋岩ないしデイサイト	破損	
329	31	3区	包含層Ⅱ		石鏃	1.75	1.11	0.29	0.46	サヌカイト	完存	
330	31	3区	包含層Ⅱ		石鏃	1.58	1.42	0.22	0.52	サヌカイト	上半折損	
331	31	3区	包含層Ⅱ		石鏃	1.78	1.98	0.32	1.22	サヌカイト	欠損	
344	31	6区	包含層Ⅲ		石塊Ⅰ	3.03	3.21	0.59	6.61	サヌカイト	半折	
345	31	6区	包含層Ⅲ		石鏃	1.64	1.34	0.30	0.59	サヌカイト	先端部欠損	
346	31	6区	包含層Ⅲ		石皿	29.2	26.6	6.6	7,000	砂岩	一部折損	
377	32	2区	SD02		石鏃石材				6.360	緑色片岩		写真のみ掲載
378		2区			軽石	4.65	2.84	1.82	6.39	軽石		計測値のみ掲載

第 26 表　出土石器観察表

遺物番号	図版	地区名	遺構名	層位	器種	計測値（cm）			樹種	木取り	残存	備考
						現存長	現存幅	最大厚				
159		2区	SD02	中層	板材	27.9	3.6	0.5	モミ属マツ科	板目	一部欠損	

第 27 表　出土木製品観察表

遺物番号	図版	地区名	遺構名	層位	器種	計測値（cm・g）				材質	残存	備考
						現存長	最大幅	最大厚	重量			
86	33	1区	SR04		鉄滓	4.7	3.8	2.8		鉄		
102	33	1区	SK07		鉄滓	4.9	3.9	2.8		鉄		
158	33	2区	SD02	下層	鉄滓	3.8	4.7	3.0	68.63	鉄	完存	
192		1区	SK03		鉄釘	5.6	0.5	0.5		鉄	上下端欠損	
195	33	1区	SK06		鉄釘	4.7	0.35	0.3		鉄	一部欠損	
240	33	1区	SP16		刀子	10.1	1.8	0.5		鉄	切先欠損	

第 28 表　出土金属器観察表

遺物番号	図版	地区名	遺構名	層位	器種	計測値（cm・g）					色調	材質	残存	備考
						長径	短径	最大厚	孔径	重量				
31		6区	SR03	上層	管玉	1.55	0.37	0.37	0.16		5BG3/2 青みの暗い青緑	鉄石英	完存	
165	巻頭	6区	SD08		琴柱形石製品	3.61	2.85	0.61	0.24	7.86	7.5GY4/1 暗 緑灰色	滑石	一部欠損	
374	巻頭	6区	包含層		琴柱形石製品	3.47	3.12	0.59	0.19	8.57	2.5GY4/1 暗 オリーブ灰色	滑石	ほぼ完存	
376	巻頭	センター保管資料（出土地不明）			琴柱形石製品	2.84	2.35	0.58	0.21	3.37	5GY5/1 オリーブ灰色	滑石	一部欠損	赤色顔料付着

第 29 表　出土玉類・石製品観察表

遺物番号	図版	地区名	遺構名	層位	器種	色調		焼成	胎土			計測値（cm）				調整			残存率	備考
						凸面	凹面		石英・長石	角閃石	雲母	現存長	現存幅	最大厚	その他	凸面	凹面	端面		
151		2区	SD02	右船内埋土	丸瓦	N4/ 灰色	N5/ 灰色	良好（須恵質）	中・多					2.9		ナナナデ	布目	ケズリ後ナデ	破片	玉縁
152	30	2区	SD02	上層	丸瓦	5BG4/1 暗青灰色	5BG4/1 暗青灰色	良好（須恵質）	中・少					2.1		縄目タタキ後ナデ	布目後ナデ	ケズリ後ナデ	破片	
153	29	2区	SD02	下層	丸瓦	5B4/1 暗青灰色	5B4/1 暗青灰色	良好（須恵質）	中・多					2.2		縄目タタキ後ナデ	布目・模骨痕	ケズリ後ナデ	破片	
154	30	2区	SD02		平瓦	2.5Y3/2 黒褐色	2.5Y3/1 黒褐色	良好（須恵質）	中・多					2.4		縄目タタキ	布目	指オサエ・ナデ	破片	
155	30	2区	SD02		平瓦	N4/ 灰色	N4/ 灰色	良好（須恵質）	中・多					2.8		縄目タタキ	布目	ケズリ後ナデ	破片	
189		1区	SK03		丸瓦	7.5Y4/1 灰色	7.5Y2/1 黒色	良好（瓦質）	中・少					2.0	1.8（玉縁長）	ヨコナデ・タテ板ナデ	横状タタキ？後ナデ	ナデ	破片	
190		1区	SK03		平瓦	N2/ 黒色	10Y2/1 黒色	良好（瓦質）	中・少					1.6		ヨコナデ・さらこ	タテ板ナデ	ケズリ後ナデ	破片	
206		2区	SK09		平瓦	N3/ 暗灰色	N4/ 灰色	良好（瓦質）	中・少					1.8		ナナナデ・さらこ	ヨコ板ナデ	ケズリ後ナデ	破片	打ち欠いて釘穴穿孔
207		2区	SK09		丸瓦	N3/ 暗灰色	N3/ 暗灰色	良好（瓦質）	中・少					1.3		ナナナデ	布目	ケズリ後ナデ	破片	
228		1区	SX01		丸瓦	N1.5/ 黒色	10Y2/1 黒色	やや軟（瓦質）	中・少					1.7		ナナナデ	布目	ケズリ後ナデ	破片	
229		1区	SX01		平瓦	2.5GY2/1 黒色	2.5GY2/1 黒色	良好（瓦質）	中・少					1.5		板ナデ・さらこ	ヨコ板ナデ	ケズリ後ナデ	破片	
230	30	1区	SX01		平瓦	N2/ 黒色	5Y6/1 灰色	良好（瓦質）	中・少					1.8		コビキ後板ナデ・離れ砂	ナデ	ケズリ後ナデ	破片	
268		4区	包含層 I		平瓦	10Y7/2 灰白色	10Y4/1 灰色	やや軟（須恵質）	中・少					1.8		縄目タタキ	布目		破片	
269		4区	包含層 I		平瓦	5PB4/1 暗青灰色	5PA/1 暗紫灰色	良好（須恵質）	中・多					2.6		縄目タタキ	布目	ケズリ後ナデ？	破片	
324		4区	包含層 II		丸瓦	10YR7/2 にぶい黄橙色	10YR5/3 にぶい黄褐色	軟（須恵質）	中・並					1.7		縄目タタキ？メメツ	布目	ケズリ後ナデ？	破片	

第 30 表　出土瓦観察表

遺物番号	図版	地区名	遺構名	層位	器種	調整	色調	焼成	胎土			計測値（cm・g）				残存率	備考
									石英・長石	角閃石	雲母	現存長	現存幅	厚	孔径		
144	30	2区	SD02	下層	縁状土師	指オサエ・ナデ・マメツ	10YR6/3 にぶい黄橙色	良好	中・並	細・少	細・少	2.5	1.4		0.4	4.12	破片
145		2区	SD02	上層	縁状土師	指オサエ・ナデ	2.5YR6/2 灰白色	良好	細・少			4.3	1.4		0.35		欠損
146	30	2区	SD02		縁状土師	指オサエ・ナデ	10YR6/2 灰黄褐色	良好	細・並			7.0	1.2		0.4	16.07	欠損
147		2区	SD02		縁状土師	指オサエ・ナデ・マメツ	10YR6/3 にぶい黄橙色	やや軟	細・並		細・並	5.5	1.3		0.4	9.88	欠損
148	30	2区	SD02		縁状土師	指オサエ・ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙色	良好	中・少			2.1	1.3		0.3	3.28	完存
149	30	2区	SD02		管状土師	指オサエ・ナデ	7.5YR4/1 褐灰色	良好	中・少			3.6	1.4		0.3	6.87	欠損
150	30	2区	SD02		管状土師	ナデ・マメツ	10YR7/2 にぶい黄橙色	やや軟	粗・多			4.2	22	1.8	0.5	17.79	一部欠損
126		6区	SD10	中層	縁状土師	マメツ	5YR7/2 明白色	やや軟	中・少			1.9	1.4		0.45		欠損
178	30	6区	SK09		管状土師	指オサエ・ナデ	7.5YR5/4 にぶい褐色	良好	中・少			2.5	1.4		0.35		ほぼ完存
204	30	2区	SK09		管状土師	指オサエ・ナデ	5YR8/1 灰白色	良好	細・少			6.2	1.5		0.45	9.25	欠損
205	30	2区	SK09		管状土師	指オサエ・ナデ	5YR8/1 灰白色	良好	細・少			5.7	1.6		0.45	11.06	欠損
227	30	1区	SX01		縁状土師	指オサエ・ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙色	良好	細・少			5.3	20		0.65	15.86	欠損
270		4区	包含層 I		縁状土師	指オサエ・ナデ	2.5Y7/2 灰黄色	良好	中・並			5.9	1.5	1.2	0.4		欠損
271		4区	包含層 I		縁状土師	指オサエ・ナデ	10YR6/3 にぶい黄橙色	良好	中・並	細・少		5.6	1.3	1.2	0.45		欠損
272		4区	包含層 I		縁状土師	ナデ・マメツ	7.5YR6/4 にぶい橙色	やや軟	細・少			2.1	1.0	1.0	0.3		欠損
273		4区	包含層 I		管状土師	指オサエ・ナデ	10YR8/3 浅黄橙色	良好	中・並			3.4	1.2		0.25		ほぼ完存
274		4区	包含層 I		管状土師	指オサエ・ナデ	10YR6/3 にぶい黄橙色	良好	中・並			3.1	1.3		0.5		欠損
275		4区	包含層 I		管状土師	指オサエ・ナデ	10YR5/2 灰黄褐色	良好	中・並			3.8	1.4		0.45		欠損
276		4区	包含層 I		管状土師	指オサエ・ナデ	5YR6/4 にぶい橙色	良好	中・少			4.6	1.6		0.4		欠損
277		4区	包含層 I		管状土師	マメツ	2.5YR6/4 にぶい橙色	やや軟	中・少			4.4	1.4		0.35		一部欠損
278		4区	包含層 I		縁状土師	指オサエ・ナデ	2.5Y4/1 黄灰色	良好	粗・並			5.9	1.6		0.6		欠損
279	30	3区	包含層 I		管状土師	指オサエ・ナデ	10YR8/3 浅黄橙色	良好	粗・少			5.3	2.0		0.45		ほぼ完形
280		4区	包含層 I		管状土師	ナデ・マメツ	2.5Y6/3 にぶい黄色	良好	中・多			5.8	2.2	2.2	0.65		欠損
281		4区	包含層 I		縁状土師	指オサエ・ナデ	10YR5/1 褐灰色	良好	中・少			6.4	1.9		0.5		欠損
325		4区	包含層 II		縁状土師	指オサエ・ナデ	10YR5/3 にぶい黄褐色	良好	中・並			4.1	1.3	1.2	0.35		欠損
326		4区	包含層 II		縁状土師	指オサエ・ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙色	良好	中・並	細・並	細・少	4.8	1.2	1.2	0.45		欠損
327	30	3区	包含層 II		縁状土師	指オサエ・ナデ	10YR4/2 灰黄褐色	良好	細・並			3.9	1.3	1.2	0.3		欠損
328		3区	包含層 II		縁状土師	指オサエ・ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙色	良好	中・少			2.8	1.5		0.3	9.50	欠損
371		4区	包含層		管状土師	指オサエ・ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙色	良好	中・少			5.9	38		1.35		欠損
372		4区	包含層		管状土師	指オサエ・ナデ	10YR6/3 にぶい黄橙色	良好	中・並			6.0	2.1		0.55		ほぼ完形
373		4区	包含層		管状土師	指オサエ・ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙色	良好	中・多			5.4	2.1		0.5		一部欠損

第 31 表　出土土錘観察表

写 真 図 版

図版７　遺構写真

1 区全景（東より）

1 区 SH01 完掘状況全景
（東より）

1 区 SH01 遺物
（18・19）出土状況
（西より）

1区 SH03 全景
（東より）

1区 SH03 検出状況
（北より）

1区 SH03 土層断面
（西より）

図版９　遺構写真

1 区 SH03 遺物（31）
出土状況（東より）

1 区 SH02 全景（北より）

1 区 SH04 遺物（81）
出土状況（東より）

1 区 SH04 竈完掘状況
（北より）

1 区 SH04 竈断面
（南東より）

1 区 SH06 土層断面
（東より）

図版 11　遺構写真

1 区 SK07 遺物出土状況
（北より）

1 区 SK07 遺物出土状況
（北より）

1 区 SK01 土層断面
（東より）

1 区 SK04 土層断面
（西より）

1 区 SK06 埋甕出土状況
（南より）

1 区 SX01 全景（西より）

図版 13　遺構写真

1 区 SX01 全景（北より）

1 区 SX01 礫検出状況
（北より）

1 区 SX01 土層断面
（東より）

2 区 SH06 全景（北より）

2 区 SH06 遺物出土状況
（南より）

2 区 SH06
炭化物出土状況（北より）

図版 15　遺構写真

2 区 SH06 土層断面
（西より）

2 区 SD02 全景（南より）

2 区 SD02 護岸石積（北）
検出状況（西より）

2 区 SD02 護岸石積（北）
検出状況（西より）

2 区 SD02 護岸石積（北）
検出状況（南西より）

2 区 SD02 護岸石積（北）
検出状況（東より）

図版 17　遺構写真

2 区 SD02 護岸石積（北）
検出状況（南西より）

2 区 SD02 護岸石積（南）
検出状況（北西より）

2 区 SD02 護岸石積（南）
検出状況（西より）

3 区第 1 面全景（西より）

3 区 SB02 全景（西より）

3 区 SB02 全景（北より）

図版 19　遺構写真

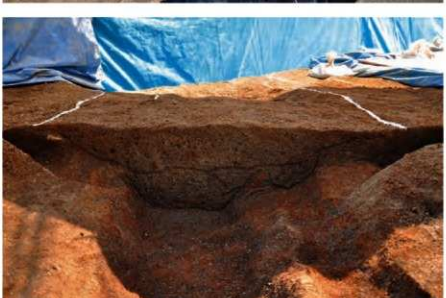
3 区 SD05 土層断面
（北より）

3 区調査区北壁土層断面
（南西より）

3 区調査区東壁土層断面
（南西より）

4 区全景（西より）

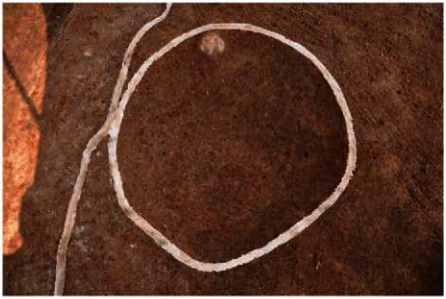
4 区 SD06 全景（南より）



4 区 SD06 土層断面
（南より）

図版 21　遺構写真

4 区 SD07 全景（北より）



4 区 SK11 完掘状況
（南より）

4 区調査区北壁土層断面
（南西より）

5区 SR01 全景（北東より）

5区 SR01 土層断面
（南東より）

6区西半部全景（東より）

図版 23　遺構写真

6 区東端部全景（北より）

6 区 SR01 全景（西より）

6 区 SR01 木株出土状況
（東より）

6 区 SR01 土層断面
（南より）

6 区 SD08 遺物（165）
出土状況（南より）

6 区 SD08 遺物（160）
出土状況（北東より）

図版 25　遺構写真

6 区 SD08 動物遺存体
出土状況（北より）

6 区 SD10 完掘状況
（北より）

6 区 SD10 遺物（176）
出土状況（北より）

6 区 SD10 土層断面
（南より）

6 区 SA02 全景（西より）

6 区 SA03 検出状況
（南より）

図版 27　遺構写真

6 区調査区北壁東半
土層断面（南より）

6 区包含層Ⅲ遺物
（351・352）出土状況
（東より）

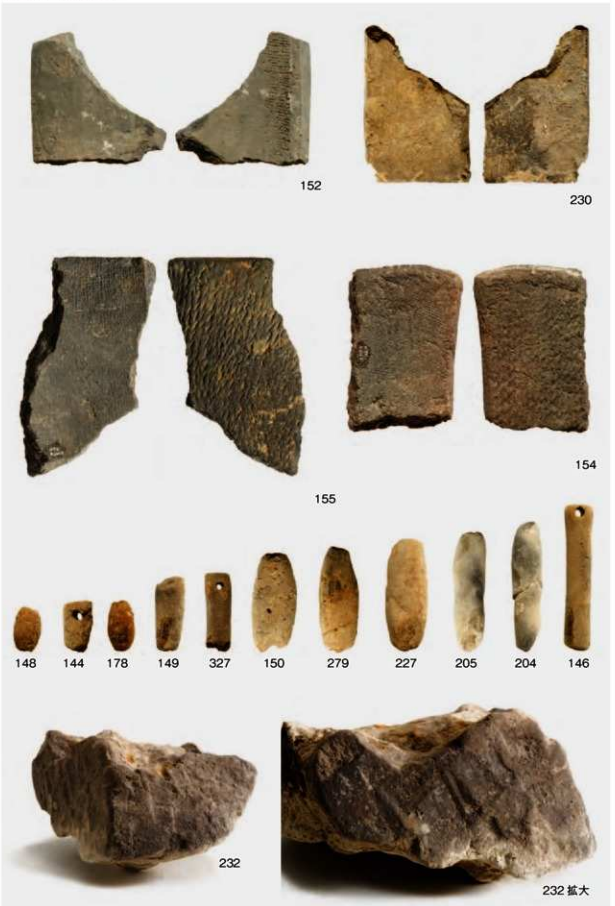
遺跡より白鳥廃寺方向
遠望

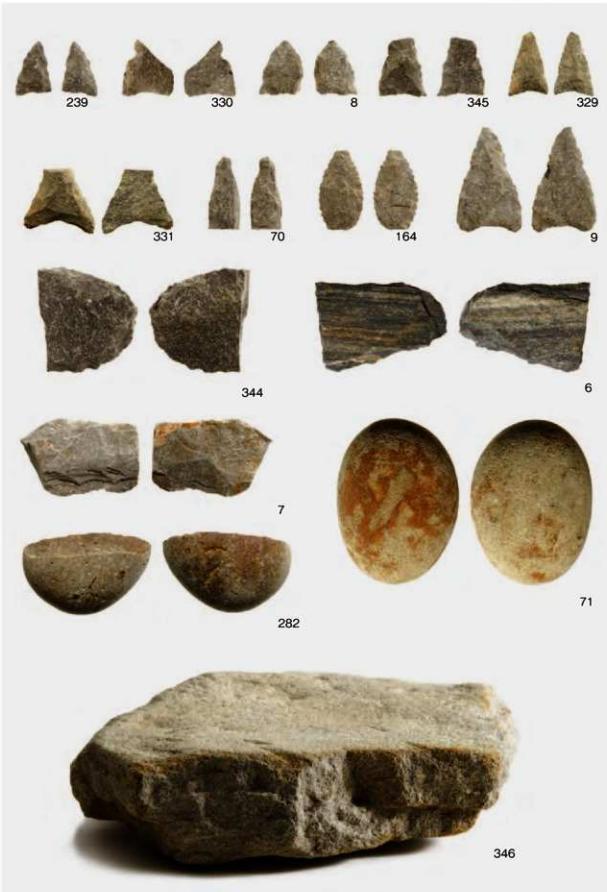
21
17
19
18
16
75
73
78
234
40
46
34
42
235

図版 29　遺物写真

360
343
336
332
2
1
153

図版 31　遺物写真


152
230
155
154
148
144
178
149
327
150
279
227
205
204
146
232
232 拡大


239
330
8
345
329
331
70
164
9
344
6
7
71
282
346

図版 33　遺物写真

240

195

86

102

158

分析資料番号 4

分析資料番号 5

分析資料番号 6

分析資料番号 7

報告書抄録

ふりがな	たなかいせき
書名	田中遺跡
副書名	国道 11 号大内白鳥バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
巻次	第３冊
編著者名	蔵本晋司（編）、パリノ・サーヴェイ株式会社、株式会社イビソク、石丸恵理子
編集機関	香川県埋蔵文化財センター
所在地	〒 762-0024　香川県坂出市府中町字南谷 5001-4 TEL. 0877-48-2191　Mail. maibun@pref.kagawa.lg.jp
発行機関名	香川県教育委員会・国土交通省四国地方整備局
発行年月日	2017 年３月 28 日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
田中遺跡（たなかいせき）	香川県東かがわ市白鳥（かがわけん ひがし しらとり）	37207		34° 14′ 27″	134° 21′ 01″	2010 年６月１日～2010 年 10 月 30 日	2,655㎡	国道 11 号大内白鳥バイパス改築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
田中遺跡	集落	縄文晩期／弥生時代終末期／古代／中世／近世	竪穴建物／掘立柱建物／土坑／溝／自然河川	縄文土器／弥生土器／石器／須恵器／土師器／黒色土器／土師質土器／緑釉陶器／琴柱形石製品	琴柱形石製品２点が出土

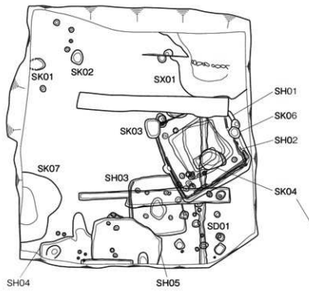
要約

遺跡は、湊川右岸の河岸段丘上に立地する。調査区東端部で縄文時代晩期から弥生時代前期とみられる包含層が堆積し、土器や泥質片岩製の大形石棒等が出土した。また、調査区中央部を弥生時代後期の自然河川が北流し、その東西両岸の微高地上で弥生時代終末期や７世紀中葉の竪穴建物、古代の掘立柱建物、中世の護岸施設を伴う大型水路等を検出した。また、中世の溝から、県下２例目となる琴柱形石製品２点が出土した。

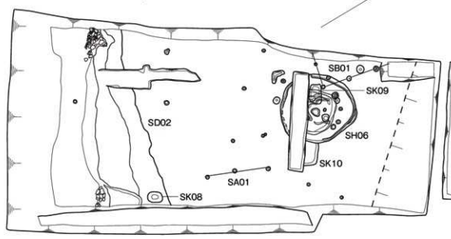
国道 11 号大内白鳥バイパス改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告　第 3 冊

田中遺跡

2017 年 3 月 28 日
編集　香川県埋蔵文化財センター
〒 762-0024 香川県坂出市府中町字南谷 5001-4
Tel 0877-48-2191
E-Mail　maibun@pref.kagawa.lg.jp
発行　香川県教育委員会・国土交通省四国地方整備局
印刷　ワールド印刷株式会社



1区

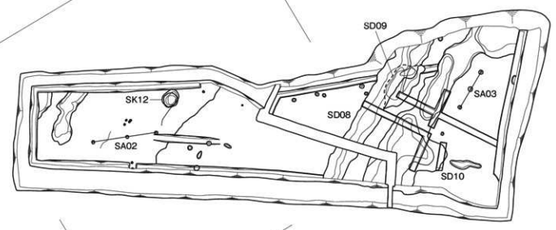


2区

3区

4区

5区



6区

付図　田中遺跡平面図